

博士論文

17世紀ジャワ北岸地域の華人

立教大学大学院 文学研究科史学専攻

97PC003M

久礼克季

## 目次

第1章	はじめに	
1.	問題の所在	1
2.	先行研究とその問題点	2
3.	本稿のねらい	6
4.	史料	9
第2章	17世紀前半までのジャワ北岸地域の華人	
1.	序	11
2.	17世紀前半までのジャワ北岸地域への華人流入とその活動	11
3.	17世紀前半におけるオランダ東インド会社(VOC)と華人	17
4.	マタラム王国の台頭と華人	19
5.	マタラム-VOC関係と華人	21
第3章	17世紀ジャワ北岸地域における貿易と華人	
1.	序	26
2.	17世紀ジャワ北岸地域の貿易状況	28
3.	米貿易	30
4.	砂糖貿易	33
5.	木材貿易	40
6.	ジャワ北岸地域への輸入	42
第4章	17世紀後半における華人とマタラム王国	
1.	序	45
2.	アマンクラット1世治世におけるマタラム王国の統治	46
3.	17世紀中葉以降における華人流入	48
4.	鄭氏とジャワ北岸地域	50
5.	17世紀後半におけるマタラムと華人	53
第5章	トルノジョヨ反乱と華人	
1.	序	60
2.	反乱直前期における北岸地域社会と華人	62
3.	反乱の拡大と華人	64
4.	反乱の終息と華人	69
第6章	1680年以降のジャワ北岸地域における華人の境遇の変容	
1.	序	73
2.	第3期におけるジャワ北岸地域への華人流入	74
3.	首長とVOCの影響力拡大と華人	75
4.	華人貧困層と華人反乱	80
5.	華人反乱後のジャワ北岸地域と華人	84
第7章	おわりに	
1.	本稿のまとめ	87
2.	17~18世紀ジャワ北岸地域の華人の境遇における変化と共通性	89
注		92

## 史料集

【史料 1】	VOC 1200, f. 32-33. [19-4-1653]	102
【史料 2】	VOC 1283, f. 1349. [25-2-1671]	104
【史料 3】	<i>De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie</i> , vol. 7, p. 204.	105
【史料 4】	<i>De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie</i> , pp. 156-157.	106
【史料 5】	VOC 1321, f. 1115. [20-8-1676]	108
【史料 6】	<i>Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India</i> , anno 1676, p. 207.	109
【史料 7】	<i>Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India</i> , anno 1676, p. 328.	110
【史料 8】	<i>Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India</i> , anno 1676, p. 328.	111

## 表

[表 1]	ジャワ北岸地域発バタヴィア行船舶総積量	114
[表 2]	ジュパラ発バタヴィア行物品表 [非 VOC 船舶分]	115
[表 3]	グレシク発バタヴィア行物品表 [非 VOC 船舶分]	116
[表 4]	ジュパラ発バタヴィア行木材数量表	117
[表 5]	バタヴィア発砂糖輸出額 [VOC および非 VOC 船舶分]	118
[表 6]	バタヴィア発ジュパラ行物品貿易額 [非 VOC 船舶分]	119
[表 7]	バタヴィア発グレシク行物品貿易額 [非 VOC 船舶分]	120
[表 8]	砂糖生産従事者の職務および人数	121

## 図

[図 1]	『天工開物』に見られる縦型ローラー甘蔗压榨機	124
-------	------------------------	-----

## 地図

地図 1	大航海時代の東南アジア	126
地図 2	南シナ海貿易の拠点	127
地図 3	ジャワ島、マドゥラ島	128
地図 4	ジャワ島西部	129
地図 5	ジャワ島東部、マドゥラ島	130
地図 6	1677 年ジュパラ	131

## 参考文献

## 第1章 はじめに

### 1. 問題の所在

本稿は、ジャワ島において17世紀から19世紀後半まで続く社会経済体制の形成に重要な役割を果たした17世紀ジャワ北岸地域の華人について、その流入や活動を明らかにするものである。

ジャワにおける華人は、記録に登場する限りにおいて遅くとも15世紀以降現在に至るまで、経済活動において重要な役割を担い続けている。本稿は、これらのなかでも17世紀のオランダ東インド会社〔正式名称は連合東インド会社〈Vereenighde Oost Indische Compagnie〉、以下VOCと略す〕ならびにマタラム王国の貿易活動において、ともに中核的役割を担ったジャワ北岸地域における彼らの活動を取り上げる。なお本稿では、「ジャワ北岸地域」の用語を、VOCとマタラム王国を結びつけた王国勢力下の華人を検討していくため、バンテン〈Bantén〉、チルボン〈Cirébon〉、およびVOCが拠点を構えたバタヴィア〈Batavia〉を除いたトゥガル〈Tegal〉以東のジャワ北岸地域を指して用いる。

17世紀ジャワ北岸地域における華人の活動は、その後のジャワ史の展開を方向づけるうえで重要な役割を果たしたように思われる。北岸地域の華人のなかには、17世紀以前に既に当該地域へと定住した者が少なからず存在した。彼らは、自らの故郷である中国において香辛料の需要が高まったことを背景として、16世紀には、同地域で生産されていた胡椒や、マルク〈Maluku〉〔モルッカ〈Molucca〉〕諸島で産出される丁子〔クローブ〕、肉豆蔻〔ナツメグ〕、豆蔻花〔メース〕等の香辛料を中国へ輸出したり、中国商品を中心とした物品を香辛料生産地へ運ぶ貿易に従事していた。この貿易に従事する華人の多くは、出身地との関係を維持しながらジャワでの貿易活動に参入し、自らムスリムとなり現地人の女性と家族を形成する者も少なくなかった。当該の時代、彼らは、現地における商業活動を通じて、現地の有力者と関係を構築する。ジャワ北岸地域の華人は、貿易を通じて多くの富を蓄積し、それを背景としてピチ〈pici〉と呼ばれる現地通貨<sup>1</sup>をも自ら鑄造し、現地において流通させていた。

こうした華人は、内陸部から海岸部へと勢力を拡大するマタラム王国や、ジャワ島やその周辺地域の貿易に参入し、独占貿易を試みようとしていた VOC の経済活動に重要な意義を持った。マタラムと VOC は、17 世紀中葉以降ともに北岸地域の華人を活用して貿易を展開させていく。この華人を利用して行われた貿易は、16 世紀まで中心となっていた香辛料の中継から、米や塩、木材、さらにはこの時期に初めて栽培と生産が行われる砂糖の輸出へと変化していった。この貿易を通じて構築された関係をもとに、華人は、マタラムと VOC の両者にとって欠くことのできない存在となった。マタラムは、17 世紀末まで、こうした華人を経済活動において利用することで集権的政策を進めた。一方 VOC は、17 世紀末から 18 世紀に影響力を強めていくなかで彼らとの関係を深化させ、その後オランダ植民地期にも自由主義政策が導入される 19 世紀後半まで、植民地政庁が華人と緊密な関係を構築し続けた<sup>2</sup>。すなわち、ジャワ北岸地域の華人が 17 世紀にマタラムや VOC と関係を構築し深化させたことによって、19 世紀後半まで続く植民地体制の礎が形成されたのである。

なお、本稿では「華人」を、中国出身者ならびにその子孫の意味で用いる。当時の彼らは、出身地や同郷出身者さらに血縁者との関係を保持しつつ、多くが現地人女性と家族を形成し、ムスリムとなった。近代とは異なり、彼ら自身はさほど強い華人意識を有したわけではないが、オランダやマタラム王家は、中国や華人間との商業ネットワークを有する彼らを、「華人」として認識し重用した。こうしたなかで、彼らが現地社会に深くコミットしはじめると、支配者とジャワ人を仲介する重要な存在となる。これまであまり扱われてこなかった 17 世紀の華人の活動、ならびに、まわりの人々が彼らをいかにとらえていたかを考察することは、ジャワ史さらにはインドネシア史を検討するうえで、貴重な材料を提供しよう。

## 2. 先行研究とその問題点

本稿が扱う主題にかんしては、重点を置く時期や地域の違いから 3 つに大別される先行研究が存在する。

1 つ目には、メイリンク・ルーロフス<Meilink-Roelofs>のものが挙げられる。同氏は、ムラカ<Melaka>〔マラッカ<Malakka>〕が繁栄した 15 世紀から、1511 年に同地を占領したポルトガル人が活躍した 16 世紀、バタヴィアを拠点に VOC のオランダ人勢力が台頭する

17世紀前半〔1630年頃〕までのインドネシア諸島における貿易全般について論じる。この論考の中で、同氏は、マタラムとVOCの双方が勢力を拡大した同世紀前半のジャワ北岸地域において、16世紀から居住していた華人が、主にジュバラやグレシクで、バンテンと密接に連携しつつ胡椒を中心とする香辛料貿易に従事したことを指摘する。そのうえで、当該時期にはポルトガル領マラッカを經由した貿易が継続されており、香辛料貿易に従事した華人の多くがVOCと競合するに至ったが、彼らの一部には会社に協力する者も現われたと論じている<sup>3</sup>。

2つ目に、ブリュッセイ〈Blussé〉の研究が挙げられる。同氏は、1619年から1799年までのバタヴィアをとりあげ、ここを拠点としたVOCの貿易活動や、同地において重要な役割を果たしていた華人や混血者の活動について論じている。特に、本稿と直接関係する17世紀におけるバタヴィア華人の動向について、ブリュッセイは、次のように述べる。VOCは、1619年のバタヴィア創立に際し、同地の建設や運営のために、オランダ人と華人をバタヴィアに移住させる政策を行う。これらのうちオランダ人のバタヴィアへの移住は、女性の移住に対する非難や自由市民が財を成すと本国に帰国してしまうことから失敗したが、税を軽減した華人の移住は、順調に進んだ。その後、同地への華人移住は、バタヴィアの郊外〔オムランデン〈Ommelanden〉〕の開発、1681年の清朝による遷界令の解除や1683年のVOCとバンテンとの抗争終結を契機に増加する。特にオムランデンへの華人移住は、VOCが彼らに対して人頭税の免除、会社による砂糖買い上げや最低買取価格の保障を示したことによって、急激に増加した。これらの動きの中で、バタヴィアでは、ヤン・コン〈Jan Con〉をはじめとする華人有力者が、賭博税、市場税、輸出税、輸入税、ワヤン上演税などの徴税請負やバンテン等周辺地域との交渉を受け持ち、会社の中国貿易にも関わり、バタヴィアで現地の貨幣ピチの鑄造を任されるようになったことを指摘する<sup>4</sup>。

3つ目として、ナフテハール〈Nagtegaal〉の研究がある。同氏は、トルノジョヨ反乱〔1675-1680年〕が終結した直後の1680年から、華人反乱<sup>5</sup>〔1741-1743年頃〕が発生する1741年までのジャワ北岸地域をとりあげ、同時期における当該地域、VOC、マタラム、現地支配者、華人といった勢力の動きを網羅したかたちで以下のように論じる。1680年以降、トルノジョヨ反乱におけるVOCによるマタラムへの軍事援助をきっかけとして、マタラムは当時軍事的に圧倒的優位にあったVOCから軍事協力を得る一方で、会社はマタラムから米や現金で見返りを得るといった関係が成立した。これを背景に、ジャワ北岸地域各地において、VOCに商品作物を供給し、マタラムには現金を供給する仲介人が出現する。この仲介の役

割を担ったのが、現地の首長<sup>6</sup>や現地の華人有力者であった。同地域の首長は、マタラムに任命され同王国の監督下に置かれていたが、王国から課された税が軽かったことから、次第に勢力を強めていく。一方、華人は、トルノジョヨ反乱が終結した 1679-1680 年の期間には主にバタヴィアやバンテンから、また清朝による遷界令解除ならびに 1684 年の展界令発令を受けた 1695-1710 年の時期には中国本土から、それぞれ多数が北岸地域に流入し、彼らのなかから VOC との貿易に従事して有力となる者が現われた。これにより、彼ら華人有力者は VOC に保護してもらい、他方 VOC は華人から利益を引き出すという関係が形成される。こうして、当該時代のジャワ北岸地域では、VOC、マタラム、現地の首長、華人有力者が、主にコーヒーや藍〔乾燥藍〕を中心とする商品作物の生産と輸出を行うことによって、それぞれ利益をあげた。その一方で、上記の勢力の下で半強制労働に従事せざるを得なかった多くのジャワ人や華人貧民層は、富を蓄積していく VOC や現地の首長に対する不満を増大させていった。この不満の増大と 1740 年にバタヴィアで発生した華人虐殺の北岸地域への波及によって翌年に華人反乱が発生し、現地で大きく展開したと論じる<sup>7</sup>。

上記の各先行研究から、17 世紀初頭と終わりにおける、ジャワ北岸地域における華人の活動が明らかになったといえよう。すなわち、1630 年頃まで華人はマタラムやバンテンと密接に関係を持ちながら香辛料貿易に従事し、他方 1680 年以降においては、一部の華人が VOC や現地支配者と密接に関係を持ちながら富裕化した一方で、多くはその労働者となった。

しかしながら、上記の先行研究は、両時期における北岸地域の状況について明らかにしつつも、その間にある期間のジャワ北岸地域の華人や彼らの活動について論じていない。メイリンク・ルーロフスは、上記の論考において、特に 17 世紀について自らの研究が取り扱った時代が非常に限られていると述べ、さらに長い期間でみた考察が必要であると指摘している<sup>8</sup>。しかし、その後ナフテハールが取り上げた時代までの約 50 年間のジャワ北岸地域における華人の活動ならびに現地の社会経済状況をめぐる研究は、ほぼ空白のままとなっている。また、この時期の華人の活動にかんしては、ブリュッセイが言及しているものの、同氏の研究の中心はバタヴィアであり、北岸地域はそれとの関係で若干述べられるにとどまっている。このため、1630 年代以前と 1680 年以降とで大きく異なっているジャワ北岸地域における政治・経済状況の変化について、何故そうした変化が生じその変化がどのように展開したのかという説明がなされていない。

このような 17 世紀のジャワ北岸地域にかんする社会経済史研究の現状は、マタラムや同

王国の影響下に入った北岸地域の貿易にかんして、ある部分で史実とは異なる認識を生じさせ、他の研究にも少なからぬ影響を与えている。香辛料を求める東西世界の商人が東南アジア地域に來航するようになった1450-1680年を「商業の時代」〈The Age of Commerce〉と定義し、同地域における貿易について論じたリード〈Reid〉が、マタラムを貿易に興味を持たない内陸国家と位置づけ、同王国の政治的な貿易独占政策によって、海上貿易を営むジャワ人はバンテンやスマトラ島のパレンバン〈Palembang〉、南カリマンタンのバンジャルマシン〈Banjarmasin〉、南スラウェシのマカッサル〈Makassar〉、マレー半島のパタニ〈Patani〉などに移り、ジャワ島に残った住民は海上貿易に無関心となり船舶も所有しなくなったと指摘したことは、このことをよく示している<sup>9</sup>。だが、後に述べるようにマタラムが1640年代まではポルトガル領マラッカと貿易を行い、1646年以降にはVOCと貿易を再開させたことをみれば、同王国は貿易に対する強い関心を持っていたと考えるべきである。加えて、マタラムが、第4代王アマンクラット1世〈Amangkurat I〉[位：1646-1677]の治世において貿易独占を行い、王国内のジャワ人を対外交易活動から排除しようとした際に、誰に王国の貿易を担わせたかという問題についても検討しなければならない。

また、華人の流入や彼らの活動にかんしても、更なる考察が必要である。ナフテハールが多数の華人流入が見られたと主張する1679-80年の時期と1695-1710年の時期とでは、それぞれ現地に流入した華人の構成が大きく異なっていた。前者の時期において同氏が華人の流入元だったと主張するバタヴィアやバンテンは、トルノジョヨ反乱当時ジャワ北岸地域に居住していた華人の避難先となっていた<sup>10</sup>。このため、当時北岸地域に流入した華人の大多数は、避難先から帰還した北岸地域の住民であったといえる。加えて、この時期は1661年に始まった清の遷界令が継続しており、中国本土から流入する華人の数が限られていたことから、当時流入した華人は、その多くが北岸地域をはじめジャワ島で長く居住していた華人であったと考えられる。一方、後者の時期に流入した華人は、清朝の遷界令解除と展界令発令を受けて中国本土から華人移民が大量に生み出されたなかで、北岸地域に流入した人々であった。これらの事実を考慮すれば、ジャワ北岸地域の華人について論じるには、1684年以前に居住していた者の状況と、それ以降、特に1695年以降に流入した者が置かれた状況を、それぞれ区別して議論しなければならない。

さらに、1680年以前のVOCとマタラムとジャワ北岸地域の華人との関係についても検討する必要がある。ナフテハールは、1680年以前のジャワ北岸地域について、三者の接触が最小限のものにとどまっていたと主張する<sup>11</sup>。しかしながら、トルノジョヨ反乱が大きく



展開していた 1677-78 年に、マタラムが VOC に対して行った反乱鎮圧の援助要請を会社が受諾する際において両者の間で結ばれた合意では、会社がジュパラとその周辺で生産される砂糖の買い付けおよび輸出の独占を行うなどといった内容が含まれている<sup>12</sup>。このような内容が含まれるためには、反乱が発生する以前の時期に VOC がジャワ北岸地域と接触して同地を重要視するに至ったことや、17 世紀当時において唯一砂糖の生産技術を持っていた華人が、1680 年以前からジャワ北岸地域にも流入し、その生産などに深く関わるなどして、当該地域において経済活動を担う重要な存在となっていたことを考慮に入れねばならない。

これらに加えて、ナフテハールが「政治企業家」と定義する、ジャワ北岸地域で活発に経済活動を行った首長らについても再検討が必要である。同氏は、政治企業家の存在が顕著になったのは 18 世紀であったとする<sup>13</sup>。だが、ナフテハールが扱った時代に積極的に経済活動を行った首長のなかには、華人の混血者が多く含まれ、彼らの活動は、17 世紀に活発に経済活動を行い当時においてマタラム王国の経済政策を担った華人有力者と、多くの点で共通していた。このことをみれば、政治企業家は、18 世紀ではなく、既に 17 世紀後半には北岸地域において顕著な存在になっていたと考えなければならない。

### 3. 本稿のねらい

上記で提示した諸問題を検討するために、本稿は、以下のように 17 世紀ジャワ北岸地域における華人流入や、現地における彼らの活動について明らかにしていく。

ジャワ北岸地域への華人の流入にかんして、その時期は、彼らの故国である中国が明清交代期にあった国内状況や両王朝の対外政策と密接に関係して、大きく 3 つに分けることができる。すなわち、1567 年から 1644 年までの第 1 期、1644 年から 1684 年までの第 2 期、1684 年以降の第 3 期である。第 1 期では、中国において明朝がそれまで強化させていた海禁政策を緩和したことによって、中国本土から多くの者が商業活動や商品作物栽培のために北岸地域に流入しはじめ、明朝が滅亡し清が北京に入城する時期まで流入が続いた。このなかには、中国本土から直接現地に流入した者や、VOC が拠点としたバタヴィアを経由して流入する者が含まれていた。第 2 期では、明清交代期で中国国内が大きく混乱したことや、1661 年に清朝が遷界令を出した影響によって、中国本土からの流入が非常に少な

くなった一方、隣接するマカオからの流入や、鄭氏を中心に台湾をはじめとする中国本土外に在住する華人の流入が主流になった。第3期では、清朝が1681年に遷界令を解き1684年に展界令を発令したことをきっかけに、再び中国本土からの流入が行われる。この時期については、ナフテハールが論じるように、1695年以降において、特に大規模な流入がみられた。

これら3つの期間に流入した華人のうち、本稿では、特に第1期と第2期に流入し活動した華人に焦点を当てて論じる。この2つの時期に流入した華人の多くは、それ以前から現地に居住していた華人と同様に、現地化をして多くが商業活動に従事していたと考えられる。その活動を通じて、彼らが構築したジャワ北岸地域間やマルク諸島さらにはポルトガル領マラッカやパレンバンなどマラッカ海峡とのネットワーク、中国をはじめとする南シナ海域とのネットワーク、加えて彼らが持つ資金力や彼らが鑄造する貨幣ピチの存在が、マタラムとVOCを引きつけた。こうして彼らは、貿易で中心的な役割を果たすようになる。

加えて華人は、17世紀前半から中葉にかけて、北岸地域に中国から製糖技術を導入した。これにより同地域は、後に主要な砂糖の生産地となる。そして、これをきっかけとして、ジャワ北岸地域は、後に商品作物の生産地域となっていくのである。

さらに、ジャワ北岸地域の華人は、17世紀においてマタラムとVOCとを結びつける役割を果たした。マタラムとVOCは、1610年代までマタラムが支配下に置いた港を通じて互いに貿易を行う関係にあったが、1620年代以降その関係が急激に悪化し激しく敵対することとなった。だが、その後17世紀中葉以降、両者は関係を急速に改善させ、1646年には両者の間で友好条約が結ばれ、貿易も再開される。一方、華人は、両者の関係が公式に断絶していた時期においても、マタラムの領域となっていた北岸の各地域からバタヴィアへと航海し、小規模ながらも貿易も行っていた。また彼らは、この時代、バタヴィア在住の華人と連携するかたちでVOCやマタラムに情報を提供していた。両者の関係修復は、ジャワ北岸地域の華人の存在無くしては実現し得なかった。

その後、両者の関係が修復し、1651年にVOCがジュパラに商館を再開した以降活発に展開するVOCとマタラムとの貿易においても、彼らは、主要な役割を担うことになる。特にマタラムは、1646年以降アマンクラット1世の貿易独占政策のもと北岸地域のジャワ人有力者の貿易活動を厳しく規制した一方で、王国の貿易を現地の華人に担わせた。その後VOCとマタラムとの間で貿易が活発になるのにもない、ジャワ北岸地域の華人は、双方にとって重要な存在となる。そして、1669年以降、マタラムが北岸地域のジャワ人有力者に対

する統制をさらに強めるなかで、現地の華人は、マタラムから徴税、塩や竹の専売、アラク酒の製造ならびに販売、ピチの鑄造の許可、華人の人頭税の徴収等の権利を得るなど、ジャワ北岸地域の経済においてほとんどの部分を掌握することになった。

このようにジャワ北岸地域で華人が現地の貿易や経済を掌握した状況下で、トルノジョヨ反乱が発生する。当時、多くのジャワ人民衆は、貿易が活発となるなか、米や木材、砂糖の生産に従事する労働者になっていた。こうしたなか、1674年にジャワ島で天候の不順により米が不作となり価格が高騰すると、生産や貿易を取り仕切っていた華人有力者とジャワ人労働者との間に緊張関係が発生し激化する。このために、トルノジョヨ反乱では、反乱軍による華人への攻撃や虐殺が行われ、これを逃れるために大多数の華人はバタヴィアやバンテンに避難した。

トルノジョヨ反乱がマタラム-VOC 連合軍の勝利によって終結した 1680 年以降、バタヴィアやバンテンに避難していた華人は、避難先からジャワ北岸地域に戻り、再び貿易を行うようになる。この時期には、反乱鎮圧での援助に際してマタラムが VOC に多くの見返りを提供したことで、同王国の経済的負担が増大した一方、北岸地域の現地支配者である首長が経済的に勢力を強めたことから、華人は、それまでの VOC とマタラムに加え、首長とも関係を構築して商品作物の生産や貿易を行うようになった。加えて、1684 年以降には、第 3 期の華人流入が始まる。この時期に流入した華人の多くは、既存の経済体制の下で労働者となった。この二点において、流動性の高かった 1680 年以前と同年以降とでジャワ北岸地域における華人をめぐる状況は大きく異なっていた。こうした状況で、ナフテハールが主張する社会経済状況が展開していくのである。

これらのことを明らかにするために、本稿は、7 章の構成で論じる。

この第 1 章につづく第 2 章では、まず 16 世紀やそれ以前のジャワ北岸地域における華人の活動について概観し、同世紀後半から始まる第 1 期の華人流入についてみたらうえで、17 世紀前半期の華人と VOC ならびにマタラムとの関係構築について検討を行う。

第 3 章では、特に VOC とマタラムとの公式な貿易が再開され活発となっていく同世紀中葉以降、北岸地域でそれまでの中心であった香辛料の輸出や中継から、米をはじめとする食糧、木材、そして砂糖の輸出へと貿易が大きく変化したことを示す。そのうえで、砂糖栽培や生産技術を中国から導入して砂糖の生産を行い、米はその運搬や関税の徴収、木材については切り出しから運搬、販売まで、それぞれ重要な部分を担い、輸入においても陶磁器、銅、アヘンの販売に華人が強くかかわるようになり、現地社会との関係を深めたこ

とを述べる。

第4章は、17世紀中葉以降にみられた第2期の華人流入と、彼らによるジャワ北岸地域の経済掌握について議論を行う。同章では、まず経済掌握の背景にあった当時のマタラム王であったアマンクラット1世の統治について論じた後に、ポルトガル領マカオからや台湾などから鄭氏の華人によるものが中心となった第2期の華人流入の実態を示す。そのうえで、現地の華人が、VOCと関係を強めつつマタラムの貿易に深く関わることで、現地の経済を掌握していったことを明らかにする。

第5章は、トルノジョヨ反乱と華人について検討する。同反乱は、従来、アマンクラット1世の中央集権政策に対しての、反マタラム反乱とされてきた。しかし本稿では、この反乱において華人が襲撃された事実があったことを重要視し、同反乱の引き金として、当時多くが米、木材、砂糖生産の労働者となっていたジャワ人民衆の間に、ジャワ北岸地域の経済活動を牛耳っていた華人に対する強い反感があったことを述べていく。

第6章は、2章から5章まで述べてきた1680年までのジャワ北岸地域の華人の流入や彼らの活動と、ナフテハールが論じた1680年以降同地域に流入し活動を行った華人の活動との比較を行う。1680年以降VOCがジャワ北岸地域での経済活動への関与を強めていくにともない、VOCをはじめマタラム王家と現地の首長の庇護のもとで、華人は経済活動を拡大できた。同時に、この時期、すなわち第3期に流入した華人の多くが労働者となり、有力者との貧富の差が拡大し、1741年の華人反乱につながっていったことを明らかにしていく。

第7章では、本論文の到達点を示すとともに、この後の時代の華人研究を展望したい。

#### 4. 史料

本稿では、主に、VOC文書をはじめとするオランダ人による記録を用いて考察を行う。16世紀末にジャワ島に初めて航海を行って以来、オランダ人は、同地域にかんして多くの記録を残している。とりわけバタヴィアを拠点としたVOCは、17世紀のジャワ北岸地域との貿易について貴重なデータを残している。このため、本研究においても基礎となる重要な史料となる。

これらの記録は、ハーグの国立公文書館〈Nationaal Archief〉に所蔵されている各商館からバタヴィアへ宛てた『通信文書』〈Overgekomen Brieven en Papieren〉、VOCがジャワ島

に本拠を置いたバタヴィアにおける日々の記録をまとめ、1624年から1682年分まで活字化され出版されている『バタヴィア城日誌』〈Dagh-register Batavia〉、東インド総督と評議員によって執筆されオランダ本国の17人会に送られた文書で1610年から1761年分まで活字化され出版されている『一般政務報告書』〈Generale Missiven〉、17世紀前半にVOCの第4代総督となったヤン・ピーテルスゾーン・クーン〈Jan Pietersz. Coen〉が残した書簡で1616年から1629年分まで活字化され出版されている『クーン書簡集』、デ・ヨンゲ〈de Jonge〉の著作 *De opkomst van het Nederlandsh gezag in Oost-Indie* に記載されている『通信文書』や『一般政務報告書』の記事、17世紀にVOCが発布した『公告』〈Plakaatboek〉などより構成されている。このうち、『通信文書』では、1651年以降再開されたジュバラ商館とバタヴィアとの間でやりとりされた文書を主として利用する。そして、ジュバラ商館の『通信文書』にない部分については『バタヴィア城日誌』など他の記録を利用して議論を進めていく。

また、第3章や第4章については、1648年、1649年、1651年、1652年、1654年にVOCの使節として王都マタラムへ赴いた、レイクロフ・フォルケルツゾーン・ファン・フーンズ〈Rijcklof Volckertsz. van Goens〉の「ジャワ旅行記」および「ジャワ島の短い記述」も用いる。彼の記録は、17世紀中葉のジャワ島の様子やマタラム王国の統治制度について詳しく記述している。

さらに、第2章については、本論の背景となるVOCが創立される以前の時代についても議論を行うことから、VOCの記録に加えて、ハウトマンらによる航海記といったVOC以前のオランダ人による記録や、ポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸国記』、『東西洋考』といった漢籍、『ババッド・タナ・ジャウイ』〈*Babad Tanah Jawi*〉』『ババッド・チルボン』〈*Babad Cirebon*〉』といったジャワの王統記も利用していく。これらの各史料のうち、ハウトマンらの航海記や『東方諸国記』、『東西洋考』はVOCが創立される以前のジャワ北岸地域や華人について記録しており、当時の状況を知るのに非常に有用である。また、ジャワの各王統記の記述は、直接的に歴史的事実と符合するわけではないが、当時のジャワの王権が華人をどのようにみなしていたかということについて、非常に興味深い手掛かりを与えてくれる。

## 第2章 17世紀前半までのジャワ北岸地域の華人

### 1. 序

本章では、17世紀前半までのジャワ北岸地域における華人の流入や彼らの現地における活動について論じる。

本章で扱う事柄については、序章で論じたように、16世紀から17世紀前半にかんしてメイリンク・ルーロフスが考察を行い、その後についてはブリュッセイの研究が間接的に言及している<sup>14</sup>。上記の先行研究の成果をふまえたうえで、この章では、さらに16世紀以前のジャワ北岸地域の華人の状況や、16世紀中葉以降17世紀中葉まで大きく展開した第1期における同地域への華人流入や彼らの活動について論じる。そのうえで、華人と、ジャワ北岸地域に大きな影響を与える勢力となったマタラムやVOCとの関係構築について述べ、華人がこの両者を結びつける役割を果たしたことを明らかにしていきたい。

### 2. 17世紀前半までのジャワ北岸地域への華人流入とその活動

ジャワ北岸地域は、その置かれた地理的条件から、古くから貿易が盛んであった。火山活動が活発であるジャワ島は、本稿で後述するムラピ山<Mt. Merapi>をはじめ多くの火山をが内陸部に点在し、その裾野や麓には、高原盆地や沖積平野が形成されている。これらの土地では、肥沃な火山性土壌に覆われ、火山に降って地中に浸透した雨水が湧き出す湧水に恵まれたことから、古くから稲作をはじめとする農業が発展していた。また、北を水深の浅いジャワ海、南を外洋のインド洋にはさまれたジャワ島では、険しい崖が多い南海岸にはあまり多くの港が存在しなかった一方、本稿がとりあげるジャワ北岸地域は低地が続いたため良港が数多く形成された。これら北岸地域の港のなかには、ジャワ海に流れ出る河川を内陸部との交通手段として利用できる場所も存在した。こうした条件を背景にして、北岸地域で得ることのできる水、同地で生産される塩、内陸部で生産され河川交通

によって同地域へと運搬される米の存在があったこと、さらに18世紀終わりまで丁子や肉豆蔻、豆蔻花の香辛料を唯一産出していたマルク諸島に比較的近い位置にあったことが、ジャワ北岸地域の香辛料中継貿易や米や塩の輸出を大きく発展させることになった。加えて、特に中部ジャワの北岸地域から良質な木材が産出されたため、同地域では造船業も活発に展開していた。このようなジャワ北岸地域の港においてもっとも早く繁栄したのが11世紀にその名が知られていたトゥバン〈Tuban〉で、その後グレスク〈Gresik〉、スラバヤ〈Surabaya〉、ドウマク〈Demak〉、ジュパラ〈Jepara〉、トゥガル、スマラン〈Semarang〉なども主要な港市となっていく。

15世紀になり「商業の時代」を迎えたことにより、ジャワ北岸地域の港市は他の地域にもその存在が詳細に知られるようになる。15世紀前半に明朝が派遣した鄭和の遠征隊に参加した馬歡は、北岸地域の港市について以下のような記事を残し、そこに華人が存在していたことを指摘する。

爪哇国の古名は闍婆である。その国には四カ所の重要なところがあるが、みな城郭はない。よその国の船が来るとまず杜板(トゥバン)という所に着く。次は新村(グレスク)という所に着き、また蘇魯馬益(スラバヤ)という所に着く。さらに満者伯夷(マジヤパイト〈Majapahit〉)というところに至る。

〔中略〕

歴代の中国の銅銭が通用している。

杜板は土地の名は賭斑という地名である。ここは約千軒余あり、二人の頭目が治めている。ここは沢山の中国の広東、漳州の人が流れて来ている。鶏、羊、魚、蔬菜は甚だ卑しいものとなっている。

海中に小さな池があるが淡水で飲むことができ聖水といっている。伝説では元代の史弼、高興が闍婆を攻めたときに幾月も上陸できなくて船中の飲料水が尽きようとし、兵士たちは困った。そこで二人の将軍は天を拝み「命を奉じて蛮国を伐ちにきた。天はわれわれに泉水を与えたもうか、あるいは与えたまわざるか」と祈って、力をふるって槍を海中に突きさすと泉水が槍の突きささった所から沸き出でその水は淡水であったため飲むことができ、みなみな生気をとりもどしたのは天の助けであったのであり、今でもそれが残っているのである。

杜板から東に半日ばかり行くと、新村、土地の名で革児昔に着く。もとは砂州の土地であったが中国の人々がここにやって来て始めて住みついたことにより新村と名づ

けられ今に至るまで村主は広東人である。約千軒余りあり各地の人々がここに来て売買する。金や宝石などいろいろの品物が売られ甚ださかんな所である。新村より南に向かって二十里ばかり船で行くと、蘇魯馬益、土地の名で蘇児把牙に着く。その港口は淡水が流れているが、大船はここからは進みにくいので小船を用いて二十里ばかり行くと始めてそこに着く。ここにも村主がおり住民を千軒余り治めている。そのなかには中国人もいる。

〔中略〕

この国には三種の人々がいる。一種はイスラム教徒(回回人)でみな西方諸国の商人であり、この地に流れて来たもので衣食その他は洗練されている。一種は中国人(唐人)でみな広東、漳州、泉州の人々のここに流れて来たもので、日常生活は清潔で多くイスラム教を信じ、おつとめをしている。一種は原住民で顔かたちはみにくく、もじゃもじゃ髪であかはだしで鬼教を信じている。仏典にいう鬼国はこの地である<sup>15</sup>。

この記事では、トゥバン、グレシクが15世紀当時において繁栄している様子、ならびに両港およびスラバヤに、華人が多数存在したことが記録されている。彼ら華人がいつ頃から存在していたかについて『瀛涯勝覽』は明確に言及していない。だが、上記の記事が挙げるトゥバンにおける海中に湧き出す淡水の池にかんする伝説が、元のジャワ遠征と関連しており、かつ当時から現地に華人が存在していなければ15世紀まで伝承されることは極めて難しい。このことから、ジャワ北岸地域には、遅くとも元のジャワ遠征が行われた13世紀末ないし14世紀初頭に、ある程度の数の華人が存在していたとみるのが妥当と考えられる。そして、彼ら華人は、ムスリムになるなど現地の文化を積極的に受け入れた一方で、中国の銅銭を流通させるなど貿易において影響力を発揮していたことも、この記事からうかがえる。これらの華人にかんするその後の動向は、詳しいことは明らかでない。だが、中国では明朝による海禁政策が行われた15世紀前半にも、これを無視して海外貿易を行う商人が存在していたことが、指摘されている<sup>16</sup>。この時代にも中国から現地への華人流入が続いていた可能性は高い。

このようにジャワ北岸地域に華人コミュニティが存在した状況下で、1567年に明朝の海禁政策が解除され、中国から大規模な海外渡航が開始される。この時代における華人の海外渡航は、当時の中国国内情勢と密接に関連するものであった。

明は、元代の銀に基づく経済システムが崩壊した後に成立した王朝であったことから、王朝成立当初においては銀などの通貨に頼らずに財政を成り立たせる意図を持っていた。



このため、同王朝は、「戸」という単位で人民を把握し、これを基礎に「里甲制」を定め、労働力を直接に徴発したり穀物などの現物を納入させる「戸メカニズム」を整備していた<sup>17</sup>。しかし、15世紀中葉に西北辺境地域の警備が強化されたことや住民の負担が増大したこと、民衆の間に貧富の差が開いたことにより住民が逃亡したことなどから、「戸メカニズム」が崩壊し、明は財政運営において再び銀に頼らざるを得なくなった。このことから、同時代以降、田地に対する課税である税糧や労働力を提供する徭役双方の銀納化が展開する<sup>18</sup>。このことを背景として、中国国内での銀需要は再び高まった。

この状況を後押ししたのが、南アメリカで大量に生産された銀を運んだスペイン人のマニラにおける本拠地建設と日本での銀増産だった。1521年にマゼラン艦隊によって大西洋から南アメリカ大陸の南端経由でフィリピン諸島へと到達したスペイン人は、1565年セブ島に拠点をつくった後、さらに1571年にスペイン領フィリピンの拠点としてルソン島のマニラに本拠地を建設した。これにともない、1573年以降中国—マニラ—南アメリカ間での貿易が行われ始める。マニラ経由でアメリカへともたらされた絹織物や陶磁器などの中国商品は、スペイン本国を経由したものよりも圧倒的に安かったことから、現地のスペイン人を大いにひきつけた<sup>19</sup>。同じ時期、南米では、水銀アマルガム法の導入によりポトシ銀山<sup>20</sup>での銀生産が飛躍的に急増する。これにより、上記の三地域間の貿易は非常に活発となり、南米からの銀が大量に中国にもたらされることになった<sup>21</sup>。

一方、同時期の日本においても、石見銀山の発見と灰吹き法の導入によって銀の爆発的な増産と輸出が行われるようになる。これを背景に、当時石見地域を勢力下に置いていた大内氏の下で博多商人の神谷一族が明との貿易に携わるようになった<sup>22</sup>。その結果、生糸をはじめとする中国商品と日本銀との貿易は、当時の東アジア地域で最大の利益をもたらすものとなっていった。

こうして、この貿易は、中国や日本で密貿易商人を生み出し、ポルトガル人をも1511年に自らが占領したマラッカを拠点として参入させる。彼らのうち、特に前者は、海禁政策の下で取締りを行う明に対抗するために、武装した船団を編成し密貿易と略奪を行うようになった。これは「後期倭寇」といわれるもので、1550年代に最も盛んとなった<sup>23</sup>。しかし、明は1560年代にこの鎮圧に成功する。そして、中国沿岸における倭寇の活動が終息に向かったのを機に、明は、1567年に関税を銀で払い交易許可証である号票文引を所持することを条件として華南からベトナム、マラッカ方面に向かう西洋航路と中国から台湾、フィリピンを経てブルネイ方面に向かう東洋航路について、対外貿易を行うことを認めた。

これにより、海上での治安維持にあたる海防館〔後に靖海館に改称〕が置かれた福建省漳州の月港を拠点に、各地域へ華人が渡航することになったのである<sup>24</sup>。

上述したような状況のもと、香辛料を求めてジャワ北岸地域へも大規模に華人流入が行われるようになった。メイリンク・ルーロフスは、『クーン書簡集』などの記述から、17世紀初頭、特に1610年代頃までジャワ北岸地域に華人が存在していたことを指摘する。同氏によれば、この当時華人は、特にバンテンにおいて胡椒を中心として展開した貿易に従事して活発に活動していた。これにともないバンテンへの華人による大規模な移住があり、同地には大規模な華人居住区が存在したという<sup>25</sup>。一方、バンテンのほかにもこの時期貿易を活発に行っていたのがグレシクとジュパラで、前者は香料諸島からの香辛料中継、後者は米をはじめとする食料の輸出を中心としていた。そして、グレシクでは特にバンテンとの貿易について大部分は華人が行い<sup>26</sup>、ジュパラでは華人商人が〔オランダ人と同様に〕関税免除の特権を持っていたと述べる<sup>27</sup>。さらに同氏は、北岸地域に居住した華人のなかには現地で有力者となった例も挙げている。1619年にジュパラのシャーバンドル〈syahbandar〉〔港務長官〕、また、1626年にジョルタン〈Jortan〉<sup>28</sup>の副シャーバンドルとして記録されているインチェ・ムダ〈Intje Moeda〉は華人であったとされている。シャーバンドルは、東南アジアの港において存在した外国商船ならびに居留外国人の管理責任者で、現地に居留する外国人商人の長老が王権から任命され、土地の権力者に代わって外国商船の接待、管理、徴税および居留外国人商人の統制にあたった<sup>29</sup>。当時のジャワ北岸港市には2名のシャーバンドルが置かれ、1名はジャワ人が、他の1名は非ジャワ人（大抵は華人）がその役職を担っていた。そして、このインチェ・ムダは、ジャンビに兄弟がいた一方、バタヴィアで最初にカピタン〔華人居留区長〕となった華人ベン・コン〈Beng Kong〉の娘と婚姻関係を結んでいたという<sup>30</sup>。彼らジャワ北岸地域の華人の多くは、当時現地における貿易に参入したVOCとは競合関係にあり、会社は彼らの多くを非常に警戒していたが、一方でシム・スアン〈Sim Suan〉という人物をはじめとして華人の一部には会社と関係を持つものも現われた<sup>31</sup>。そして、1618年にVOCがマタラムと対立し、同王国の外港となっていたジュパラ攻撃をおこなった際には、同地に居住する華人が、会社に対して攻撃により現地が破壊される前にVOCの影響下にある地域へ居住することを求めていたとも、同氏は述べている<sup>32</sup>。

メイリンク・ルーロフスは、17世紀初頭のジャワ北岸地域における貿易の展開や状況のみを解明することを議論の中心とし、華人の動向のみを追跡したものではない。だが、同

氏の議論からは、当該時代の北岸地域における華人の状況や彼らが担っていた役割が非常によく見えてくる。17世紀初頭にバンテンをはじめジュバラ、グレシク、ジョルタンなどのジャワ北岸地域へ渡航し現地に居住するようになった華人の多くは、一方で自らの母語を用いつつ他方では現地式の名を名乗りムスリムとなって現地人の女性と婚姻関係を結んだ。彼らは、ジャワ島内やスマトラ島、マレー半島で生産される胡椒や香料諸島で生産される丁子、肉豆蔻、豆蔻花、さらに食糧を得るために、豊かな資金力をもとに、現地の取引ネットワークを活用した委託取引<sup>33</sup>を主とした貿易を行っていた<sup>34</sup>。

また、香辛料をはじめとする現地での貿易を通じて富裕化したジャワ北岸地域の華人は、その富を基盤として、現地でピチと呼ばれる現地通貨を流通させた。ピチとは、銅や鉛、錫の合金で鑄造され現地で用いられた価値の低い貨幣である。ブリュッセイによれば、16世紀後半、バンテンをはじめとするジャワ沿岸地域では中国銅銭が使われていたが<sup>35</sup>、16世紀末に中国が銅銭の輸出を禁止したことにより、鉛ピチが代わりに輸出されたことや現地では銅銭が護符として貯蓄され流通しなくなったために、同時期以降鉛ピチが主に使われるようになったとされる。ピチは、導入された初期の16世紀末から17世紀初頭、中国で鑄造され中国貨幣の形態を模したものがジャワに運ばれていた。そして、この貨幣は、当時流通していたスペイン銀から鑄造された銀貨レアルなどと比べて価値が非常に低く、レアルが長距離貿易の決済に使用されて流通量が限られていたことを背景に、ジャワ各地で流通するようになった<sup>36</sup>。また1630年代には、ピチは中国から運ばれただけでなく、ジャワ北岸各地で鑄造されるようになる<sup>37</sup>。そして、胡椒栽培における前貸しとして使われることにより、ジャワでは鉛ピチが港市だけでなく後背地まで流通することになり、ピチを持つ華人は、内陸部でも貿易を行うことが可能となった。このようなピチ流通の拡大は、ジャワ北岸やその周辺の地域において華人の貿易を拡大させる重要な要素となったといえる。

以上のように、ジャワ北岸地域に移住した華人は、自ら各地とネットワークを構築し現地で貿易を行い、豊富な資金力をも誇るようになった。これを背景に華人は、17世紀にジャワ島において中心勢力となるマタラムやVOCをひきつけていくのである。

### 3. 17世紀前半におけるオランダ東インド会社(VOC)と華人

オランダ東インド会社は、1602年に設立された会社である。

オランダのアジアへの進出はヨーロッパのなかでは遅く、16世紀末の1594年に最初に設立された遠国会社〈Compagnie van Verre〉が派遣したハウトマン〈Houtman〉により率いられた艦隊が、1595-1597年にバンテンへの航海を成功させたのが最初である。そしてこの航海の成功が、オランダ国内におけるアジアへの航海に対する関心を急激に上昇させ、同じ時期には前期諸会社〈Voor Compagnien〉と呼ばれる航海会社が各地の港に設立され、各社による多くの航海が行われた。その結果アジア地域には、1601年末までに15の船隊からなる65隻のオランダの船舶が来航することとなった。これら前期諸会社による航海の増加は、会社間相互の競争を激化させ、アジア地域での商品の仕入れ価格の高騰と、ヨーロッパにおける販売価格の下落という事態をもたらした。オランダでは、前期諸会社が乱立した16世紀末からこれらを統合すべきとの意見が連邦議会をはじめとして存在しており、各会社の統合計画も存在したが、各社やその母体となる各州間での対抗関係やオランダ人の間に存在する航海ならびに貿易の自由を主張する動きがあったために、統合がなかなか進まなかった。しかし、上述した状況が統合計画の後押しとなり、1602年3月、連合東インド会社(VOC)が設立された<sup>38</sup>。

設立当初において、VOCは、スペイン、ポルトガル、イギリスなど他のヨーロッパ勢力と対抗するために、貿易を行う拠点を確立することが必要だった。このため当初会社は、バンテン、ジャカルタ、グレシク、ジュバラ、ジョホール〈Johor〉、パタニ、マカッサルなど多くの港に商館を置いて現地の貿易に参入した。その後VOCは、当時の総督クーンの時代、1619年にジャカトラからイギリスならびにバンテン王国の勢力を駆逐して占領し、ここをバタヴィアと改名し以後の本拠地とした。

このバタヴィアの建設にともない、VOCは華人優遇政策を採った。前に述べたように、VOCは、貿易において競合関係となるジャワ北岸地域の華人の多くに対して強い警戒感を持っていた。だが、高い技術を持つ華人の存在がバタヴィアの建設には欠かせなかったこと、中国との貿易において華人の持つネットワークを会社は無視できなかったこと、さらには現地の華人のなかに会社に対して協力的な者が存在したことで、VOCは彼らに対する

優遇政策を採ったと考えられる。このことが、ジャワ北岸地域への華人流入において新しい流れを加える。すなわち、従来から存在した中国から北岸地域への直接流入やバンテンを経由した流入に加えて、バタヴィアを経由した流入が加わることになったのである。

バタヴィアへの華人流入については、ブリュッセイが詳細な研究を行っている。同氏は、バタヴィアにおいて、1619年以降、城壁建設などの労役を人頭税で代用することが認められたことや毎年同地に最初に寄港した船舶は関税が免除されたこと、当時のバタヴィアに存在した24の税のうち17について華人の徴税請負が認められたことなど、VOCによる華人優遇政策によって、現地に多数の華人が流入しはじめたと論じる<sup>39</sup>。ジャワ北岸地域への華人流入も、バタヴィアへの流入とほぼ同じ時期からさらに増加した可能性が極めて高い。1620年代から30年代まで、バタヴィアには年平均5隻の華人ジャンク船が中国各地から来航し、年平均1000人の華人が来航していた<sup>40</sup>。そしてこの当時、VOCは、これらのバタヴィアに来航した華人のうち中国に帰るのは3分の1以下であると認識していた<sup>41</sup>。かりに、この約20年にわたって来航した華人の3分の2が全てバタヴィアにとどまったとした場合、バタヴィアに居住する華人は1630年代末には7000人弱になり、17世紀後半には更にその数は増加して、10000人を超えているはずである。しかしながら、1674年の記録をみると、バタヴィアに居住する華人の数は2747人にすぎない<sup>42</sup>。これらを考慮すれば、当該の時期にバタヴィアに来航した華人のうち大多数は、バタヴィアに留まらず、さらに別の地域に移ったとみるのが妥当であり、ジャワ北岸地域にも多くの数が移っていたと考えられる。

17世紀には、VOC文書においてバタヴィアとジャワ北岸各地域との船舶往来の記事が現れる。この記事は、既に1620年代の各記録から見る事ができる。例えば、1626年には、前年に中国からバタヴィアに来航して関税を免除される特権をVOCから与えられた華人ジャンク船が、会社の許可を得ずにさらにジュパラへ向けて出航しようとして拿捕される事件があった<sup>43</sup>。さらに1630年代には、VOCの記録において華人を乗せてバタヴィアとジャワ北岸各地域とを往復する華人船の記事が多数見られるようになる。当時VOCは、関税免除の特権を持った船舶にはバタヴィアから北岸地域への渡航を認めなかった一方で、その他の船舶に渡航は特に制限しなかった。そのため、ジャワ北岸各地では、17世紀初頭に存在していた者に加え、1620年代以降バタヴィア経由で華人が流入したことで、その数が更に増加したと考えられる。上記の1630年代におけるVOCの記録は、これを反映したものでいえよう。

この時期にバタヴィアを經由してジャワ北岸地域へ華人が流入した背景の一つには、17世紀はじめに形成されたバタヴィアと北岸各地域との華人ネットワークの存在がある。前述した1618年にジュパラの華人がVOCの支配地域に自分達の居住を求めた事実は、同年の段階で既にVOCと北岸地域の華人との間で関係が構築されていたことを示している。この会社と北岸地域の華人との関係が、バタヴィア建設後のジャワ北岸地域とのネットワーク拡大につながっていった。ブリュッセイは、バタヴィア建設時において中国沿岸やジャワ島でバタヴィアに近接する地域の港から華人が強制的に移住させられたことを指摘する<sup>44</sup>。この中には、北岸地域から移住させられた者が含まれていた可能性が、極めて高い。彼らも、バタヴィアと当該地域とのネットワークを形成する一つの要素となった。一方、北岸地域への華人流入の背景には、当時のジャワ北岸地域の状況をあげることができる。1649年の記録には、マタラムの影響下にあった北岸地域では人頭税をはじめとした税がなく、食糧もバタヴィアと同様に入手しやすいと記されている<sup>45</sup>。当時、北岸地域が、華人にとってバタヴィアよりも居住しやすい状況にあったのである。

バタヴィア建設当初から形成された地域間ネットワークは、その後、両地域の華人有力者同士の関係構築まで発展する。同じく上述したメイリンク・ルーロフスが指摘しているジョルタンの副シャーバンドルであった華人インチェ・ムダが、1626年の段階でバタヴィアのベン・コンの娘と婚姻関係を結んでいた事実は、このことをよく示している。そして、この華人ネットワークこそが、17世紀前半には激しく対立していたVOCとマタラムを同世紀中葉以降結びつけるのに決定的な役割を果たすことになるのである。

#### 4. マタラム王国の台頭と華人

マタラム王国は、ジャワ内陸部に拠点を置き、その農業生産力を基盤とした王国である。同王国が成立した時期については、根拠となる史料が王統記のみで、かつ、記述が直接的に歴史的事実と符合しない箇所もあるものの、同時代におけるオランダ側の史料との対比から、16世紀末には成立していたということが明らかとなっている。

マタラムは、王国が成立した当初から、内陸部と沿岸部とを結ぶ河川流域の主要な地域や、ジャワ北岸地域に対する影響力拡大を積極的に図っていた。初代の王スナパティ<Senapati>[位：1584頃-1601]治世には、1588年にドウマクを、またこれとほぼ同時期に

ジュバラを自らの支配下に置いた。また、同王国は、1591年と1600年にパスルアン〈Pasuruan〉を攻撃し、1598年と翌1599年にはトゥバンに対しても攻撃を行ったとされる。そして、これらマタラムによるジャワ北岸地域に対する攻撃は、当時後背地に穀倉地帯を有し、かつ繁栄する周辺港市を影響下に置く東部ジャワのスラバヤとの敵対関係を発生させた。さらにマタラムは、1597年にバンテンに対する軍事遠征を行って、成功はしなかったものの、自らの勢力を誇示した。

17世紀に入り、スナパティの死後王位を継いだ同王の息子である第2代の王クラブヤック〈Krapyak〉[位：1601-13]の時代になると、マタラムは、更に勢力拡大の志向を強め、スラバヤと激しく対立するに至る。クラブヤックは、1610年から1613年まで毎年スラバヤに対する攻撃を行い、同地域における米の生産に大きな打撃を与えた。

1613年にクラブヤックが死去した後に同王の息子アグン〈Agung〉[位：1613-46]<sup>46</sup>が王位に就くと、同王は、ジャワ北岸地域やその後背地への大規模な征服活動を開始する。この征服活動を通じて、マタラムは、1616年にラセム〈Lasem〉、同年もしくは翌1617年にはパスルアン、1619年トゥバン、1622年にグレシク、1625年にはスラバヤをそれぞれ征服していく。その後1630年代には更に東のパナルカン〈Panarukan〉や西ジャワのプリアンガン〈Priangan〉地方を支配下に入れ、1640年にジャワ東端の balanbangan 〔Balambangan〕を制圧する。これらの結果、ジャワ島は、独立した王国が存続していたバンテンとチルボン、およびVOCの拠点バタヴィアを除いた、ほぼ全ての地域がマタラムの勢力下に置かれることになった。

この時期におけるマタラムの活動は、特にスラバヤの支配下にあった東部のジャワ北岸地域に大きな打撃を与えた。この当時スラバヤの影響下にあり、その領域において最も繁栄した港とされるグレシクは、アグンによる征服以前にも何度も同王国による攻撃を受けた。1612年のVOCの記録には、同地がスラバヤとマタラムとの戦争のため荒廃していると記されている<sup>47</sup>。また、翌1613年の記事には、グレシクとジョルタンがマタラムにより占領されたことや、グレシクでは町が燃やされ、ジョルタンでは住民の多くが殺され、残った者は逃亡したと記されている<sup>48</sup>。

このように、17世紀にジャワ内陸部から勢力を拡大し、多くは武力をもって北岸地域を勢力下に置いたマタラムであったが、他方で、領域内に居住する華人とは、王国の初期から極めて良好な関係を構築していた。アグン時代に原形が成立したジャワの王統紀『ババッド・タナ・ジャウイ』に、マジヤパイト最後の王ブラヴィジャヤ〈Brawijaya〉の王妃の一

人に華人の王女があり、この王女が産んだ息子の子孫が後のマタラムの始祖となるという記述が見られる<sup>49</sup>。その一方で、それまでのヒンドゥー王国時代のマジヤパイトの宮廷年代記『デーシャワルナナ』〈Desawarnana〉〔『ナーガラクルターガマ』〈Nagarakertagama〉〕には、中国は登場しない。この語りは、マタラムが自らの系譜において華人を織り込み、同王国が彼らや中国との強固な関係を持っていたことを積極的に主張していたことを示している。また、マタラムは、王統紀で華人との関係を主張しただけでなく、実際に王国内で彼らを重用して緊密な関係を結んだ。上述したように、ジュパラのシャーバンドルやジョルタンの副シャーバンドルが華人であった事例に加え、VOCの記録では、1631年にトゥガルのトゥムンゴン〈Tomagon〉〔治安長官・地方領主〕<sup>50</sup>の下で働いていた華人が存在していたことが記されている<sup>51</sup>。さらに、1641年にはマタラム王アグンが、華人ビンガム〈Bingam〉の大型ジャンク船で硫黄を南インドのコチン〈Cochin〉へ運ばせていたという記録が残っている<sup>52</sup>。これらの記事から、マタラムは、勢力下に置いた北岸地域における貿易において、華人を利用していただことがわかる。米をはじめとする内陸部の農業を基盤とする同王国が生産物の輸出をはじめとする貿易を行う際に最も利用しやすかったのが、当時の貿易ノウハウに精通し各地と交易ネットワークを持っていた華人であった。そして、後の章で論じるように、同王国はこの後も華人を貿易活動において重用し、さらには現地における経済活動の中核部分に彼らに関与させていくのである。

## 5. マタラム-VOC関係と華人

これまで述べてきたように、17世紀のジャワ島において勢力を伸張しつつあったマタラムとVOCは、互いに無視できない存在となった。この両者の関係は、17世紀の間に、良好な関係から敵対関係、そして再び友好関係へと激しく変化する。

マタラムとVOCとの間で公式になされた最初の接触は、マタラムがクラブヤックの治世にあった1613年とされる。この接触は、同王が、当時マタラムと競合関係にあったスラバヤと対抗するために、VOCの初代総督であったピーテル・ボート〈Pieter Both〉に対し、マタラムと会社の同盟を打診するというものであった。この申し出に対し、VOCは、当時マタラムの領域にあったジュパラだけでなく、同王国と対抗したスラバヤの影響下にあったグレシクにも商館を置いていた事情から、この打診を拒否した。だが、VOCがマタラムの



領域において生産される米を同王国と取引していたので、この当時両者の関係は比較的良好であった。

しかし、勢力拡大に一層の積極策をとるアグンの治世期に入ると、両者の関係は一変する。アグンは、王位に就いた当初から VOC の存在を非常に警戒していた。アグンの就任に際し 1614 年に VOC が王国へ使節を送ったとき、同王が使節に対して、もし会社がジャワを征服しようとするならば、両者の友好関係は崩壊することになると警告を与えていた。加えて、同王が率いるマタラムの北岸地域への征服活動が、バタヴィアのある西ジャワにまで及んだことや、征服活動の影響で労働者不足になりジャワの米生産に重大な支障をきたしたこと、そのために米の輸出にも影響が及んだことが、両者の関係に暗い影を落とした。1618 年には、ジャワ島で米の収穫量が極めて少なくなったことから、アグンは VOC への米の販売を禁じた。このことが、米の取引をマタラムとの友好関係維持の理由としていた VOC の態度を硬化させる。さらに、1618 年に、マタラムが VOC によるジャワ人船舶への海賊行為を激しく非難したことで、両者の対立は決定的なものとなる。同年、マタラムによってジュパラの現地首長となっていたグジュラティ<Gujerati>が現地の VOC 商館に対する攻撃を行い、商館員のうち 3 人のオランダ人が殺害され、残りの者が捕らえられる事件が発生した。これに対し VOC は、その報復として現地に停泊する全てのジャワ人の船舶や町の大部分を焼き払った。

その後、アグンがジャワ北岸地域やその後背地への軍事遠征を優先させたため、両者の対立は一旦落ち着く。1621 年には捕虜となった VOC のジュパラ商館員が解放され、マタラムから米の供給も再開された。一方、1622 年から 1624 年までの 3 年間、会社は、毎年マタラムに使節を派遣する。その際、使節に対してアグンは、同王国が敵対するスラバヤ、バンテン、バンジャルマシムへの軍事遠征を行う際に会社の海軍の援助を求めたが、これらの地と交易関係を有した VOC の使節は、これを頑なに拒否した。その翌年の 1625 年、アグンは VOC からの援助を得ずにスラバヤを陥落させる。

この時点においてアグンは、援助を拒否した VOC を、自らにとって最も脅威な存在と認識するに至る。そして、1628-29 年、アグンは 2 度にわたりバタヴィアの包囲を行った。1628 年に行われた 1 度目の包囲では、マタラム軍はバタヴィアを陥落寸前にまで追い込むが、目的を達することはできなかった。また翌 1629 年に行われた 2 度目の包囲では、マタラム軍がバタヴィアに到着する前に、VOC 軍がトゥガルやチルボンにある王国の食料倉庫を破壊したことからマタラム軍は病気と飢餓に苦しみ、大きな被害を出して失敗に終わっ

た。この失敗の影響と、その後マタラムが他のジャワ島各地への征服活動に重点を置いたこともあって、両者の大規模な衝突は見られなくなった。

アグン時代には互いに断絶し激しい敵対関係にあったマタラムと VOC であったが、米を輸出したい同王国とそれを効率よく入手したい会社との利害は、基本的に一致していた。1646年にアグンが死去しアマンクラット1世が跡を継ぐと、両者の関係は一気に修復される。アマンクラット1世は、1646年に VOC からの友好条約の申し出を受け入れ、これによりマタラムと VOC との間に公式な関係が復活することになった。その5年後の1651年には、VOC は同王による許可が出たことでジュパラの商館を再開し、両者の間での貿易が拡大することになる<sup>53</sup>。

この1646年における両者の関係修復の大きな要因として、1つ目は、マタラムが王国成立当初から主要な貿易相手としていたポルトガル領マラッカが、1641年にオランダにより占領されたことで、同王国が特に米の輸出において新たに主要な貿易相手として VOC に目を向けたことが考えられる。アマンクラット1世は、王国の強化を図るために、VOC との貿易を再開させ、利益をあげようとした。アマンクラット1世の時代においても、マタラムと VOC との間に緊張関係が時々発生することがあった。主なところでは、後述する同王による港の閉鎖や1652年の VOC に対する米や木材の輸出を禁止する命令の発布、1669年に会社により派遣された使者が王都プレッドに入るのを拒否されたことなどが挙げられる。しかし両者の間で発生した緊張関係は、以前のような大きな衝突までには至らなかった。この理由として、一つには前王が行ったバタヴィア包囲の失敗により、マタラムは軍事的に VOC を服属させることが困難であると認識したことがある。『ババッド・タナ・ジャウイ』において、バタヴィアの征服に失敗したアグンが、オランダを神が遣わしたものであり、オランダはマタラムを支援するはずである、と言ったとする記述が見られることが、この認識をよく表している<sup>54</sup>。もう一つには、当時両者の間で確立され拡大しつつあった貿易の状況から、同王国と会社ともに、貿易を促進したほうが両者にとって利益となると判断したことが挙げられる。こうして、マタラム優位でありながら両者の友好が保たれた関係は、トルノジョヨ反乱が発生する1675年まで続くのである。

2つ目には、両者をつなぐジャワ北岸地域ならびに彼らとネットワークを有していたバタヴィアの華人の活動があった。さきにも指摘したように、1630年代以降には、バタヴィアとジャワ北岸各地域の間を航行する華人船の記事が、『バタヴィア城日誌』において散見される。バタヴィアと北岸各地域それぞれの地域に居住する華人が、連携して貿易を行っ

たことは、当時公式には断絶していた VOC とマタラムの勢力下にあった両地域を、彼らが結びつけていたことを示している。

1630 年代から 1640 年代前半にかけての VOC の記録には、会社が、ジャワ北岸地域にかんする調査や現地との連絡、また現地有力者との交渉などにおいて、華人を使っていたことが記述されている。例えば、先に述べた『バタヴィア城日誌』の 1631 年 10 月 20 日にある記事には、VOC が、バタヴィアから華人ナコダ〔船長〕のチックル〈Ticker〉やヤンコン・ゼイネライ〈Jancon Sijnelaij〉その他の主要な華人を乗せ、ジュパラのトゥムンゴンに宛てた書簡と贈物を携えて、ジュパラに派遣したとある<sup>55</sup>。この華人の派遣は、VOC が、当時停止していたマタラムとの貿易を再開できる可能性について現地で調査を行うこと、また、会社がこのトゥムンゴンを通じてマタラムとの間で和平を成立させることを望んでいる意向を、同王国に対して伝えるために行われた。加えて、同日誌の 1634 年 11 月 6 日における記事には、VOC がジャワ北岸地域の華人を用いてマタラムや現地の有力者と交渉を行っていたことが記述されている。同記事は、次のように述べる。11 月 6 日にプリンス・ウィーレン号〈Prins Willen〉という船舶がトゥガルからバタヴィアに帰港した際に、トゥガルで同船を迎えた 10 人の華人のなかに 1 人のムスリム華人が存在し、彼は、自分がトゥガルのトゥムンゴンの急使であると、同船に乗船したヨアン・ファン・ブルッコム〈Joan van Broeckom〉に伝えた。そしてこのムスリム華人は、彼から会社の書簡と贈物を預かってトゥムンゴンのもとへ行き、その後、彼のところからさらにマタラム王のもとへと向かったとされる<sup>56</sup>。さらに華人は、マタラムの領域で捕らえられたオランダ人との接触をとおして、彼らと VOC との連絡役も担った。同じ日誌の 1636 年 9 月 18 日の記事には、バタヴィアからジュパラに向かう華人船の記述があり、VOC が同船のナコダである華人ソニオ〈Sonio〉に、会社からマタラムの王都に捕われたオランダ人へ宛てた書簡を託したと記録されている<sup>57</sup>。また、1640 年代前半にも、VOC はジャワ北岸地域とバタヴィアとの間を往復する華人から現地にかんする情報を得ていたことが、会社の文書に記録されている。『バタヴィア城日誌』1641 年 9 月 24 日の記事には、エコ〈Eco〉という名の人物をはじめする華人やジャワ人を乗せた船舶がジュパラからバタヴィアに来航した際に、上述したマタラム王による硫黄輸出の情報を、会社がこの船から得ていたことを記している<sup>58</sup>。

このように、1630 年代から 1640 年代前半にかけて、VOC はバタヴィア在住の華人をジャワ北岸地域に派遣し、彼らから現地の情報を得ていた。当該の時代、会社は、アグン治世下のマタラムと 1610 年代から 1620 年代に軍事衝突を伴って激しく対立したが、VOC は、

現地で産出されていた米や木材、砂糖などの商品の存在から、北岸地域における貿易の再開も望んでいたとみられる。他方、当該の時期、ジャワ人や華人の商人は、バタヴィアとジャワ北岸地域をはじめとするマタラム領域の各地域との貿易を絶え間なく行っていた。このうち、華人による貿易については、バタヴィア在住の華人と北岸各地域に在住する華人の双方によって行われていた。上述した 1631 年に行われた VOC による華人を使った調査は、VOC が彼らと連携し、会社と親密な関係にあったバタヴィア在住の華人を通じてマタラム領域の事情に詳しい現地の華人からの情報を得ることを意図したものであったといえよう。その後、マタラムとの交渉や現地からの情報収集は、VOC が華人を現地へと派遣するかたちから、1630 年代後半以降には現地からバタヴィアに來航した華人から情報を得るかたちへと変化する。ジャワ北岸地域とバタヴィアとの間で華人が往来して、公式には断絶していたマタラムと VOC の双方に商品と情報をもたらしたことが、両者が再び公式な関係を構築させ、貿易を再開させるのに大きな役割を果たすことになったのである。

### 第3章 17世紀ジャワ北岸地域における貿易と華人

#### 1. 序

本章では、17世紀ジャワ北岸地域の貿易と華人の関わりについて考察する。

マタラムの影響下に入った17世紀において、ジャワ北岸地域の貿易は、特に同王国とVOCが関係を修復した同世紀中葉以降、現地で生産・産出される米や砂糖、木材のバタヴィアへの輸出が中心となった。そして、これらの貿易では、上記の両者を結びつけた華人が、中心的な役割を果たすようになる。

このようなジャワ北岸地域の貿易にかんして言及する従来の研究は多くあり、それらのなかには、貿易が不活発となったと論じるものと活性化したと議論するものの、大きく二つの傾向が存在する。

前者については、後者と比べて多くの研究が存在しており、なかでも先にあげたリードがその代表といえる。リードは、同時代のジャワ島について、スフリーケ〈Schrieke〉の議論<sup>59</sup>を用いて、序章で述べたように、貿易に関心を持たない内陸王朝のマタラムにより征服および支配され、同王朝が現地で生産される米の輸出を中心とする貿易独占政策を行ったために、同世紀中葉にはジャワ島に残った人々が海上貿易の知識が全く無く船舶も所有しない者ばかりとなったと主張する<sup>60</sup>。

同氏の議論では、大きく二つの点が強調されている。一つは、マタラムが内陸の農業生産を基盤とした王朝であること、もう一つは、そのマタラムによる17世紀初頭の征服活動によってジャワ北岸地域がマタラムの統治下に置かれたということである。これらが強調されることにより、マタラムの影響下に入った17世紀のジャワ北岸地域の貿易は、総じて内陸部からの米輸出を中心とするものとなり、しかも、マタラムの沿岸部に対する統制が強くなり及んだために、香辛料中継貿易を行っていた16世紀ほど活発ではなくなったとの見解が生まれた。

このような17世紀ジャワ島の貿易活動は不活発となったとする見方に対して、修正を迫る研究も、1990年代以降に見られるようになる。以下にあげるハウベンとナフテハールの

研究がそれである。

17世紀のジャワ内陸部における貿易を概観したハウベンは、マタラム王国の王統紀『ババッド・タナ・ジャウイ』および『ババッド・イン・ソンカラ<Babad Ing Sankala>』<sup>61</sup>、VOCの各文書に現れる記述から、同王朝が決して貿易と無関係ではなかったと主張する。同氏は、『ババッド・タナ・ジャウイ』で中部ジャワのパジャンの支配者となるジョコ・ティンキル<Jaka Tingkir>にかんするエピソードにおいて、彼が筏に乗ってダウンケン川を航行しているときに北西から後光を受けたことや、後にパジャンから独立しマタラムの創始者となるジョコ・ティンキルの甥スナパティが叔父に対し「私は貴方が舵を取る船のようなものだ」と語ったこと、またその後彼がウンパ川に飛び込み漂流した後にたどり着いた南海の海底で女神ニヤイ・ロロ・キドゥルと交信したことに着目する。そして同氏は、これらをとおしてスナパティが水界を統べる精霊を味方につけたこと、マタラムの敵が河川の洪水によって滅ぼされたことを挙げ、ジャワ内陸部の王権が河川交通と密接に関係していたと論じる。また同氏は、『ババッド・イン・ソンカラ』に、1646年頃からマタラムの領域でタバコの栽培が始まったことや、1655年頃にはジャワ北岸地域からの税がスペインリアルで徴収されていたこと、王国内では銅銭が使われていたことなどの記述があることを指摘する。さらにハウベンは、VOC文書から、同王国がアマンクラット1世以後の時代VOCとの貿易を行っていたと述べている<sup>62</sup>。

一方ナフテハールは、17世紀のジャワ北岸地域での貿易は、米、塩、砂糖、木材、魚、ヤシ油、ジャワ綿布、ムシロといった日常品を中心とした輸出や、インド綿布、銅、鉄、磁器、籐紐といった手工業品および蠟、檳榔、筍、アヘンをはじめとする麻薬等の輸入など地域経済に密接に結びついていたものであったとする<sup>63</sup>。これらに加えて1680年以降、藍〔乾燥藍〕やコーヒーといった商品作物の貿易が活発に展開し始め、そのなかでVOCや現地の首長をはじめとする有力者に加え現地に移住した華人が大きな役割を果たしたと、同氏は指摘する<sup>64</sup>。

本稿も、ハウベンやナフテハールと同様の立場をとる。だがその一方で、ナフテハールとは異なり、1680年以前についても、マタラムの貿易にかんする徴税にも華人が関わっていたことや、彼らの活動によってジャワ北岸地域において貿易が活発に展開していたことも合わせて示していく。前にも触れたように、1675年にマドゥラ島から発生してジャワ島に波及したトルノジョヨ反乱に対し、VOCがマタラムを支援するための合意内容には、綿布〔インド綿布〕、アヘンの輸入並びに米買い付けのVOCによる独占や、ジュパラとその周

辺で産する砂糖の買い付けおよび輸出の独占といった条項が含まれていた。反乱以前のジャワ北岸地域において、現地からの米や砂糖の輸出ならびに現地への綿布やアヘンの輸入といった貿易が、VOC が重要視する程度にまで展開していたことを示しており、この同意以前から、現地において華人が貿易に深く関わったことを意味しているからである。

## 2. 17 世紀ジャワ北岸地域の貿易状況

はじめに、17 世紀、特に 1680 年までのジャワ北岸地域の状況についてみていく。

VOC がジャワ島やその周辺での貿易に参入した 17 世紀、ジャワ北岸地域の貿易は、次第に VOC との関係を強くしていった。これを最もよく示す事柄が、ジャワ北岸各地域とバタヴィアとの間で展開された貿易である。

ジャワ北岸地域全域からバタヴィアへ来航した船舶にかんしては、ナフテハールが、1640 年から 1775 年の時期をとりあげて船舶の総積量を提示している[表 1]。同表によれば、1640 年の積量が 4110 コヤン(1 コヤン=約 1750 キログラム)だったのが、1675 年には 13127 コヤンと急増している。特に 1675 年の量は、同氏がとりあげたデータのなかで、1775 年、1735 年に次ぎ 3 番目に多い。このうち、非 VOC 船舶については、1675 年には 5380 コヤンと 1775 年に次ぐ積量となっており、1640 年でも 4110 コヤンで 1705~1735 年よりも多い数量となっている。一方、VOC 船舶の積量は、1640 年には 0 であったが、その後 1675 年には 7747 コヤンと増加し、その数量は 1685~1705 年の時期よりも多い。また、非 VOC 船舶と VOC 船舶との比率では、1640 年では前者のみで 100%を占めていたが、1675 年には非 VOC 船舶が約 41%で VOC の船舶が 59%となっている。

1640 年から 1675 年の間に VOC 船舶が急増した理由には、まず VOC が、1640 年当時アグン治世下のマタラムと敵対する状況にあり、同王朝の影響下にあった北岸地域に会社の船舶を寄港させることができなかったことがある。しかし、その後 1646 年アマンクラット 1 世の時代にマタラムと VOC との関係が修復され、1651 年に会社がジュパラに商館を置いて以後、バタヴィアとジャワ北岸各地の間で会社の船舶による貿易が展開することになる。

17 世紀中葉以降に VOC の船舶が急増した一方で、非 VOC 船舶は、1640 年時点で既にある程度の量の貿易品を運搬しており、1675 年になるとその量はさらに増加している。ナフテハールは、1680 年代以降のジャワ北岸地域における貿易について、VOC によって非 VOC の

各勢力による貿易が排除されていくと論じている。だが、[表 1]に示されている両者の船舶数の推移を見ると、1680年までの時期におけるジャワ北岸地域ーバタヴィア間の貿易は、VOCによる貿易の急伸があった一方で、それ以前から行われていた非 VOC 勢力による貿易も並存し、引き続いて貿易量を伸ばしていたとみることができる。

さらに筆者は、ナフテハールが提示したジャワ北岸全域からのデータに加え、1624～1682年の時期にジュバラおよびグレシクからバタヴィアに来航した非 VOC 船舶による主要な輸出品の表[表 2][表 3][表 4]ならびに輸入品の表[表 5][表 6]をもとに、17世紀における中部ジャワや東部ジャワそれぞれの貿易状況を示したい。この各表は、『バタヴィア城日誌』に現れるバタヴィアと各地との船舶に積載された商品の数量や額をとりあげて集計したものである<sup>65</sup>。ジュバラとグレシクは、16世紀まで中部ジャワ、東部ジャワにおける主要な貿易港であり、17世紀、特にトルノジョヨ反乱が発生する以前の時期においてもそれぞれの地域を代表する港であった。

これらの表から、両港における貿易の相違点ならびに共通点が見えてくる。まず、相違点を挙げると、ジュバラについては、数量は多くないものの1624年から貿易が行われていたことが確認される。他方、グレシクは、1636年まで貿易が行われていたことを確認することはできない。その一方で、両港とも1660年代以降、特に輸出を中心に貿易量が急増していることがわかる。このうち、ジュバラが早い時期から貿易を行っていた背景には、同地が比較的早い時期にマタラムの影響下に入り、以後同王朝の主要な貿易港となっていたことが考えられる。その一方でグレシクも、ジュバラに遅れるものの活発に貿易を行うようになった。

17世紀のジャワ北岸各地域ーバタヴィア間の貿易では1651年に、現地からの輸出については1660年代前半に、現地からの輸入では1660年代末に、それぞれ大きな増加があったとみられる。このうち、1651年は先に述べたジュバラにおける VOC 商館の再開、また1660年代については、後述する北岸地域における砂糖生産の拡大が大きな要因と考えられる。それでは、ジャワ北岸地域とバタヴィアとの貿易では、どのような貿易品が取引されていたのか。

まず、現地からバタヴィアへ運ばれた品物については、[表 2][表 3][表 4]からその数量を見ることができる。これらの表から、貿易品について次のことが明らかとなる。まず、16世紀以前において現地の主要な貿易品であった丁子や胡椒をはじめとする香辛料は、この時期になるとほとんど見ることができなくなる<sup>66</sup>。その一方で、16世紀の同地域におい



て、香辛料について主要な貿易品であった米や塩は、17世紀でも世紀全体を通じて安定して貿易が継続しているのが見てとれる。また、米や塩と同様に古くから現地における貿易品であった木材は、17世紀、特に後半以降量が急増していく。これらに加えて、16世紀以前には両地域の貿易品として現れてこなかった商品作物の砂糖の貿易量も急増していくことがわかる。これ以外にも、後に同地域で大量に生産されることになった綿布や綿糸<sup>67</sup>が1660年代から、またグレシクにおいては、鹿皮や水牛の皮の輸出が1660年代末から顕著となる。ナフテハールは、ジャワ北岸地域の貿易が、とりわけ1680年以降香辛料の中継から現地で生産される日用品や商品作物の輸出へと変化したことを指摘するが、その変化は、まさに17世紀のそれ以前の時期から始まったといえる。

一方、バタヴィアから現地に輸入された品物については[表5][表6]に示したとおりである。この二表からわかることは、一つには、ジュパラは1636年以降、グレシクは1640年以降輸入が見られ始めることである。そしてもう一つには、当該時期全体を通じて綿布の輸入が中心となっていること、1660年代初頭から陶磁器、同年代中葉から銅、同年代後半からアヘンの輸入がそれぞれみられるようになったことである。

では、各商品についてどのように貿易は展開し、華人はそれぞれの貿易においてどのようにかかわっていったのか。以下、特に米、砂糖、木材の生産や輸出の状況、輸入の状況、貿易における華人の関わりをそれぞれとりあげて検討していきたい。

### 3. 米貿易

ジャワ島では、古くから内陸部を中心として広い範囲にわたって米が生産され、同島における最も重要な食料となっていた。また、多くの農民は、生産が行われるなかで生み出された余剰分の米を商っていた。特に、灌漑農業によって米作が行われていた地域では、多くの余剰米が生み出されたため、農民は多くの量の米を商うことができた。大航海時代が展開した16世紀、ジャワ北岸地域が香辛料の中継で大きく繁栄した理由には、塩や水などとともに当該地域で生産された米を香辛料の生産地に輸出できたことが大きかったといえる。

17世紀にもジャワ島では多くの米が生産されていた。当時のジャワ島の米作、とくに灌漑農業による米作については、大木昌が、内陸部の盆地や谷筋で、住民が簡単にコントロ

ールできる谷川や泉の水を用い、自然の傾斜を利用した簡易灌漑が基本の形であったと指摘している<sup>68</sup>。こうした内陸部での生産が良く知られるジャワ島の米であるが、その一方で、同地域だけでなく海岸部でも生産されていたことが、当時の記録にも残されている。17世紀中葉に王都マタラムへ赴いたフーンスは、バタヴィアから船でスマランに到着した後に陸路で王都へ向かった際、彼が通過した各地域について記述をしている<sup>69</sup>。それによれば、スマランの住民のなかに稲作で生計を立てているものがあり、スマランから次の休息場所となったオンガラン〔ウンガラン<Ungaran>〕に向かう6ドイツマイル〔1ドイツマイル=約7404.4メートル〕の道中で通過した村々の住民は、全て稲作で生計を立てていたという<sup>70</sup>。なお、この記述では、当時のスマランなど沿岸の平野部における稲作の形態については全く記していない。しかし、次節で後述するように、ジャワ北岸地域ではこの時期以降に灌漑を必要とするサトウキビの栽培が大きく展開したことを考慮すれば、北岸地域の港市周辺の平野でも灌漑による稲作が行われていた可能性が高い。北岸地域から輸出されていた米は、このような港市周辺で生産されたものと内陸部で生産され港へ運ばれたものからなっていたと考えられる。そして港市に集められた米は、主要な貿易品として北岸各地から輸出され、マルク諸島やマラッカ海峡周辺地域の食糧自給ができない地域にも運ばれた<sup>71</sup>。

17世紀にジャワ島での貿易に参入したVOCが、同島の産品で最も早くから関心を示したものの一つは、米であった。前章で述べたように、会社が1610年代にマタラム王国とできるだけ良好な関係を維持しようとし、その後同王国と敵対した状況でもマタラムとの関係回復を図った最大の理由が、同王国領域で生産される米の存在であった。そして、1646年にマタラムと和解した後に、会社が木材と並んでジャワ北岸地域で最初に主たる取引を行ったのも米だった。その後もVOCは、マタラムによる北岸地域の港の閉鎖に際して、米の取引を行えるよう、同王朝と何度も交渉を行っている。また、1646年以降、VOCの多く記録には、バタヴィアを出航しジュパラに寄港した会社の船舶が、現地で米を補給した後にテルナテやアンボンなどのマルク諸島へ出航する記事がみられる。

VOCとマタラムとの関係が修復した後の同王国領域からバタヴィアへの米の輸出においては、両者の間で毎年決められた価格で取引が行われた。例えば、1664年には1ラストあたり12リアルとなっており<sup>72</sup>、1667年には1ラストあたり15リアルでVOCと取引されていた<sup>73</sup>。当時のジャワ北岸地域では、ジャワ人の現地首長が、米を含めた全ての輸出品の取引を独占していた。彼ら現地首長は、商人に販売するための米を、臣民からの貢納や市

場での購入によって得ていた。また現地首長は、自らの独占販売権を更に第三者へと貸し出していた。このため、現地で貿易を営む商人は、専ら現地首長の代理人から米を購入しなければならなかった。こうして VOC も、他の商人と同様に現地首長や彼らの代理人から米を購入した<sup>74</sup>。

他方で、17世紀は米作にとって困難が伴った時代でもあった。リードは、1690年まで世界的な寒冷期に入っていたことを背景に、当該時期の東南アジア島嶼部において旱魃や疫病が発生し、ジャワ島もその影響を受けていたことを指摘する<sup>75</sup>。この議論の中で同氏は、同島における寒冷期による主な米作への影響例として、1624-25年の疫病や1664-65年における旱魃、1673-75年の旱魃を挙げている。1624-25年の疫病は、特に東部ジャワで人口減少をもたらし、アグンによる征服と並んで、その後17世紀後半になるまで現地の活動が一時的に停滞する一因となった。また、1673-75年における旱魃は、現地での米価高騰を引き起こし、第5章で述べるマドゥラ島で発生し、一時はマタラムの王都を陥落させるまで大規模に展開したトルノジョヨ反乱の原因ともなった<sup>76</sup>。だが、[表1]や[表2]に示されているように、そのようななかでも、量の変化こそ見られるものの、米のバタヴィアへの輸出は続いた。現地首長や華人の米の集荷力は安定していたのである。

このジャワ北岸地域からの米輸出は、VOCが、マタラムとの関係を回復した後に現地において最初に関心を示した貿易であった。当初、マタラムとVOCとの貿易は、同王国とバリとの抗争により大きな影響を受けていた。このためマタラムは、1652年に米や木材の輸出禁止の布告を出す。しかし、この輸出禁止は翌1653年に解除され、同王国とVOCとの間で、会社がジュパラで米と木材をいつでも輸出することが可能であるとする取り決めが結ばれた<sup>77</sup>。この1653年における会社の記録において、華人は早い時期からVOCの米貿易に関与していたことが明らかとなる。1653年4月19日付でジュパラからバタヴィアに送られた書簡には、チンスイ<Tinsuij>という名の華人ナコダが、自らのジャンク船でVOC向けの米176ラストをバタヴィアに運ぶために航海するが、強い向かい風によって妨害され、最終的には会社に約137ラストが供出されたことや、その後で荷を得るためにグレシクに向かった後さらにバタヴィアへ向かうことが記録されている<sup>78</sup>。また、同年1月の記事には、チンスイのジャンク船がジュパラに寄港した際に行われる米の荷下ろしは、激しい天候と風により不可能であると記されている<sup>79</sup>。この2つの記事から、当時チンスイは、ジュパラ、グレシク、バタヴィアとの間でVOCの米の運搬を行っていた人物であったといえる。また、前出の4月の記事には、ティーヘン<Tiegen>というVOCに負債を残して故人

となった華人について、彼のジャンク船が兄弟の指揮の下でジュバラに來航した後にドゥマックへ向かおうとしていることなどが報告されている<sup>80</sup>。この記事から、ティーヘンやその兄弟が、ジュバラとドゥマックとの間で米の運搬に関わっていたことがわかる。さらに、同年8月の記事には、レンバン(Rembang)とジュバラとの間で華人ジャンク船がVOCの米や木材を運搬していたことが書かれている<sup>81</sup>。VOC相手の米貿易において、主要な海上の運搬は華人が担っていた。

米の貿易は、17世紀後半においても引き続き行われ、1670年代には、VOCだけでなく、後述する北岸地域へ來航する鄭氏とも取引された。この取引において、会社は、鄭氏の船舶に対して、後に述べるようにあからさまな敵対行動をとることはなかった<sup>82</sup>。これらにともない、華人の米貿易への関与は更に強まった。先述したチンスイは、1660年代や1670年代もVOCの米貿易に大きく関わっていた<sup>83</sup>。特に、1672年4月の記事は、VOCが会社が望んだ量の米を南スラウェシのマカッサルに運ぶことを手配するようチンスイに約束させたものだった<sup>84</sup>。同記事から、マカッサル戦争[1666-1669年]の後にVOCの影響下に入ったマカッサルへの米輸出にも、彼が関わっていたことが明らかとなる。

このように、北岸地域の華人は、米貿易に1651年のVOCジュバラ商館再開後からそれほど遅くない時期に関与しはじめ、その後彼らの関わりは時代が経過するに従って強まっていったといえる。

#### 4. 砂糖貿易

17世紀ジャワ北岸地域の貿易において、新たに取引された商品として現れたもののうち、最も顕著な存在となったものは、砂糖(甘蔗糖)であった。

甘蔗糖の原料となるサトウキビは、古くからジャワ島に自生していたとされる。しかしながら、16世紀以前の記録には、現地においてサトウキビからの製糖が大規模に行われていたという記述はみられない。この背景には、現地住民が、サトウキビよりも栽培が容易でかつ製糖が困難でないヤシから得た砂糖(椰子砂糖)を古くから甘味料として利用していたことがある。だが、椰子砂糖は、腐敗しやすく貿易には不向きだったため、あくまで現地で利用されるにとどまっていた。17世紀に入ってから北岸地域でサトウキビが栽培され甘蔗糖が生産されるようになったのは、現地から輸出するための貿易品として生産された

とみるのが妥当である。

『バタヴィア城日誌』に現れるバタヴィアへの輸出ならびに同地における生産記録では、ジャワ島における砂糖生産は、1628年のトゥガルを皮切りに、1633年にバンテン、1634年にはジュバラおよびチルボン、1636年スラバヤ、1637年にバタヴィア、1641年にはグレシクにおいて確認される<sup>85</sup>。ジャワ島におけるサトウキビ栽培と製糖は、17世紀前半に西部から中部・東部へと次第に拡がっていったとみられる。

サトウキビ栽培と砂糖生産は、米や木材と比べてマタラムの関与が低かったと考えられる。例えば、砂糖と同様に17世紀からジャワ北岸各地での生産やバタヴィアへの輸出が見られ始める木綿にかんして、マタラムは、1664年に米の栽培に悪影響をきたすとして、この栽培を禁止している<sup>86</sup>。だが、その一方で同王国は、砂糖についてはこのような禁令を出しておらず、その他のサトウキビ栽培や砂糖生産と関連した命令は出していない。また、1665年の記事には、砂糖商人はマタラムの外にいると記述されており<sup>87</sup>、この商品の貿易にかんしてもマタラムの関与の割合は低かったことが改めてわかる。

このような生産の展開を見せたジャワ島産の砂糖は、[表1]や[表2]に見られるように、一度バタヴィアに輸出され、同地からさらに他の地域へと輸出されていた<sup>88</sup>。こうして輸出された砂糖は、「バタヴィア産」とされた。しかし、当時バタヴィアでの製糖にかんしては、ブリュッセイが、その主要な砂糖生産地であった後背地のオムランデンについて、1638年に華人ヤン・コンが砂糖生産に失敗していることや、同地域の開発が本格的に進んだのがVOCとバンテンとの関係が回復し、現地の治安状況が改善された1683年以降であったことを指摘しており<sup>89</sup>、同年以前は質量ともに北岸地域を圧倒するほどの砂糖を生産していなかった可能性が極めて高い。この点を考慮すれば、この時代「バタヴィア産」として輸出されていた砂糖には、バタヴィアだけでなく、それ以外のジャワ各地で生産されていた砂糖が多数含まれていたといえる。

砂糖について、バタヴィアからの輸出先ならびに輸出額を示したのが[表4]である。この表を見ると、1640年代にはバタヴィアからペルシャ、1660年代以降にはペルシャに加えて主に広南、トンキン、日本、中国、オランダ本国へ、多くの額に相当するものが輸出されていたことがわかる。また表にあげた各国への輸出のうち、ペルシャや日本、オランダ本国向けについては、全てがVOCの船舶によって行われている。また、中国向けは、ごく僅かに非VOC船舶による輸出が行われているものの、殆どがVOCの船舶によって行われている。その一方で、トンキン向けは多くが非VOCの船舶によって行われ、他方広南向け輸

出の全ては非 VOC 船舶が行っている。

このうち、筆者は、少なからぬ額が輸出された広南への輸出について注目したい。広南への砂糖輸出が急増するのは、1669 年以降であり、これは次章で後述するバタヴィアやジャワ北岸地域に鄭氏の華人が流入した時期と一致する。この当時のベトナムにかんしては、チン(鄭)氏政権のトンキンが貿易において 1650 年代以降 VOC との関係を強化した一方で、トンキンと対抗する阮氏政権の広南は鄭氏との関係を強化しており、バタヴィアと広南との間で VOC の船舶による貿易は行われなくなっていた。これらの事実を踏まえると、この当時のバタヴィアから広南への砂糖輸出には、台湾などを拠点とした鄭氏の華人が関係していた可能性がある<sup>90</sup>。こうしてバタヴィアから広南へ輸出された砂糖は、現地で消費されたのと同時に、一部は中国や日本へさらに運ばれていたとみられる。当時の広南阮氏について考察を行ったリ・タナーや、製糖技術を例に 17、18 世紀における東アジアや東南アジア域内貿易と生産技術移転について論じたクリスチャン・ダニエルスは、17 世紀後半に広南から中国や日本への砂糖輸出が行われていたことを指摘する<sup>91</sup>。しかし、先に挙げたバタヴィアから広南への砂糖輸出の事実を考慮した場合、特に 1669 年以降については、現地からの輸出品の中には、非 VOC 船舶によるバタヴィアを経由したジャワ産の砂糖が含まれていた可能性が高い。

このようにして、1660 年代にジャワ産の砂糖が大量に各地へ輸出されるようになった背景には、次の 2 つの事情があったと考えられる。

まず 1 つ目は、1662 年の鄭氏による台湾占領によって、台湾からバタヴィアへの砂糖の供給がストップしたということである。当時は、特にサファヴィー朝最盛期のペルシャにおいて砂糖の需要が拡大する情勢にあり、そのなかで台湾からの砂糖供給が断たれてしまうことは、VOC にとって大きな痛手であった。この状況に対応するため、VOC は、1662 年の段階でジャワにおける砂糖の生産を拡大することを望んでいた<sup>92</sup>。鄭氏の台湾占領が、VOC にジャワにおける砂糖生産の必要性を大きく高め、ジャワにおける砂糖の生産と輸出を拡大させるという結果を生んだのである。

続いて 2 つ目は、当時のアジア地域においてジャワや台湾と並んで主要な砂糖生産地であったベンガル産のものとは比べ、ジャワ産の砂糖の価格ならびに品質が安定していたということである。なかでも、ジュパラ産砂糖は特に高く評価されるようになった。1642 年の記録には、ジュパラが台湾やバンテンと並んで主要な生産地としてあげられている<sup>93</sup>。また、1663 年の記事によれば、当時ジュパラで作られた砂糖は、バタヴィア産のものと同

で、VOC の競争相手であるインド商人によって主に供給されたベンガル産よりも品質や価格が安定しており、かつバタヴィア産の砂糖よりも品質が良いとされていた<sup>94</sup>。そしてこの時期以降、バタヴィアからの輸出品のなかに「ジュパラ産砂糖」という品目も散見され始めるのである。

だがその一方で、安価でかつ高品質であったジャワ産の砂糖は、その長所から、VOC との取引においてしばしば問題を引き起こした。その理由には、この当時砂糖主要な輸出先となっていたオランダ本国をはじめヨーロッパの市場において砂糖の取引価格の下落が起こったことと、会社がバタヴィアで生産される砂糖の保護を意図したことがある。このうち前者については、1655 年以降、ヨーロッパにおいて安価なブラジル産の砂糖が大量に流入し、運搬途中で品質が低下したアジア産の砂糖を凌駕したことが要因となった<sup>95</sup>。また、後者については、フラマン<Glamann>やナフテハールが 1680 年以後のケースを取り上げ、これら VOC によるジャワ北岸地域産砂糖買い取りをめぐる問題について、砂糖の供給が停止する事態がしばしば発生したことや、VOC が投資を行っていたバタヴィア周辺地域の製糖業を保護する政策が背景にあったことを指摘している<sup>96</sup>。1680 年以前についても、状況は同じだったと考えられる。1659 年 12 月の記事には、VOC が華人に対して、それまで行っていた 1 ピクル当たり 5 1/3 レアルでの買い取りができないと通告したのに対し、彼らが現地からバタヴィアに向かう船舶のバラストに困ると訴えたため、1 級品にあたる白砂糖については 1 ピクル当たり 5 レアル、2 級品については同 4 レアルで買い取るようになったと記されている<sup>97</sup>。また、1662 年 5 月の公告には、砂糖検査官が製糖工場を検査した際、もしジュパラ産をはじめバタヴィア以外の地域で生産された砂糖が工場にあった場合、その砂糖は没収されるとある<sup>98</sup>。さらに、1669 年 1 月 22 日の公告には、バタヴィア政庁が、これ以後ジャワやバンテンで生産された砂糖の輸入を行わないことが記述されている<sup>99</sup>。しかし、VOC の取り締まりや砂糖買い取り拒否の公告が出された後もバタヴィアへの砂糖輸出は継続して行われていたことは[表 2][表 3]から明らかであり、公告の効果は極めて限定された範囲にとどまっていた。

このように、ジャワ北岸各地に生産地域が広がっていった製糖や砂糖の輸出は、華人が主導して行われていたことが、多くの先行研究で指摘されている。製糖技術を例に 17、18 世紀における東アジアや東南アジア域内貿易と生産技術移転について論じたクリスチャン・ダニエルスは、次のように述べる。16 世紀末以降に東南アジアで展開した製糖技術は、16 世紀末に福建で出現した、甘蔗品種の選択、甘蔗栽培法、甘蔗压榨工程、清澄工程、煎

糖工程、分蜜工程からなる一系列をなす技術体系として出現したものであった。その技術を示す代表的なものは、甘蔗圧搾工程で使われる二つのローラーを垂直に配置しローラーの間に甘蔗を投入してその汁液を搾り取る機械である堅型雙ローラー甘蔗圧搾機とされる〔図 1〕。この機械を用いた製糖技術の東南アジアへの移転は、アジア域内貿易の変動に応じて行動する中国からの移民によって一括して行われた。そして、ジャワやマレー半島では、移民が移転当初から甘蔗栽培から砂糖製造までの全作業を行った。このために、砂糖生産が支障なく直ちに開始でき、また他の移民や現地人に技術・技能を直に伝承し得たため、移転・定着が短期間に達成できたのである。そのうえで、同氏は、上記の製糖技術は 17 世紀初頭にジャワへ移転したと主張している<sup>100</sup>。

ジャワ北岸地域における製糖も、現地の華人によって始められ、行われていたといえる。17～18 世紀のバタヴィア郊外のオムランデンにおける製糖について言及したボンダン〈Bondan〉は、上述したような製糖において高い技術が必要なことに加え、土地賃貸料や労働者への賃金、薪木となる木材の調達費、製糖で用いる水牛の維持管理費などに多額の費用がかかるため、製糖所の運営には現地人がほとんど関与できなかつたと論じる<sup>101</sup>。また、長岡新治郎は、1719 年のジュパラをはじめとする北岸地域に存在する 37 の製糖所全てが華人によって所有されていたことを指摘する<sup>102</sup>。この状況は、17 世紀のジャワ北岸地域でも同じであった可能性が極めて高い。1653 年 3 月にジュパラからバタヴィアに送られた書簡には、当時砂糖が華人を通して取引されるのが原則であったことをうかがわせる記事が存在する<sup>103</sup>。また、上述した 1659 年の VOC による通告は、砂糖の貿易や運搬が華人によって行われていたことを示している。さらに、1672 年 9 月の書簡には、VOC が現地において綿布を対価として華人と砂糖の取引を行っていた記事が見られる<sup>104</sup>。加えて、1685 年において、VOC が中部ジャワで購入した砂糖のうち 46% が、ジュパラのカピタンであった華人ウィ・ピン・コ〈Oey Pin-ko〉によって供給されていた<sup>105</sup>。このウィ・ピン・コは、1679 年には既にジュパラでカピタンとなっていたことが記されており<sup>106</sup>、これ以前から現地で製糖や砂糖の貿易に関わっていたと考えられる。

その一方で、ジャワ北岸における製糖業では、ダニエルスが主張するような華人移民のみによって行われていたのではなく、多くのジャワ人も関与していたとみられる。サトウキビ畑の開発やそれにともなう水利の敷設、サトウキビの栽培や収穫、製糖といった現場における労働や水牛など動物の管理は、高い技術が必要とされることがそれほどなかったため、ジャワ人が関わるのが可能であった。



ナフテハールは、1683年における中部ジャワ 33 の製糖所においておよそ 1800 人のジャワ人労働者が存在していたと指摘し、彼らが煎糖工程や監督といった作業ではなく、技術を必要としない工程における労働に従事していたとする<sup>107</sup>。製糖所における職務と具体的な人数にかんしては長岡新治郎が言及しており、ここでは[表 8]にまとめた。なお同氏がとりあげたのは、18 世紀末のパタヴィアにおけるケースであるが、本稿が扱う 17 世紀ジャワ北岸地域におけるケースと比べて、製糖所の規模や人員数において多少の差異はあるものの、特に職種においては大きな差異はなかったと考えられる<sup>108</sup>。これによれば、それぞれの職種の人数を合計すると 188～214 名となり、これに人数不明な職種を加えた人数が、1 つの製糖所におけるおおよその人員を構成していた。このうちジャワ人は、明らかに分かっているものだけで 145～167 人となっている。18 世紀のパタヴィアにおいても製糖所の総人員の約 8 割弱がジャワ人によって構成されていたことを考慮すれば、当時と比べて会社の影響力がごく僅かに限られ華人の数も少なかった 17 世紀北岸地域の製糖所では、人員においてこれ以上の割合をジャワ人が占めていたとみるのが妥当である。

上記の人員で構成されたサトウキビ栽培や製糖の現場では、労働者の住居や食事、生活必需品や嗜好品を製糖所が供給していた。17 世紀末以降のオムランデンでは、製糖所が、ルマ・ペタツ<rumah petak>もしくはポンドツ<pondok>と呼ばれる労働者用の小規模な住居を建て、製糖所に隣接する水田で収穫された米を食糧として彼らに提供していたことが明らかとなっている<sup>109</sup>。また[表 8]に示した職種には、彼らのために生活必需品やアヘンを買入れる人物や炊事人が含まれていた。その一方で労働者は、住居の賃料を経営者に支払い、生活必需品、嗜好品も経営者から購入していた。この生活必需品や嗜好品には、上述した米やアヘンだけでなく、塩、インド綿布、アラク酒、竹製の食器や家財などあらゆるものが入っていたと考えられる。ボンダンは、17 世紀末以降の製糖所ではコストが低かったことから奴隷よりも賃金労働者を使用して作業を行っていたことを指摘する<sup>110</sup>。これには、奴隷は生活に必要なものを全て与えなければならなかったのに対し、賃金労働者は賃金を与える必要があった一方で、上記のように生活必需品などはその賃金で購入させられたことが、その理由として挙げられる。こうして華人経営者は、ジャワ人労働者を経済的に自らへと依存させた。

また、製糖所だけでなくサトウキビ栽培の現場でも、労働力が必要とされた。

サトウキビは、多量の水を必要とする作物である。東南アジアにおいて、サトウキビの生育期間中に必要とされる水の量は、約 1500～2000mm とされる。特に、生育の最盛期であ

る植え付け後 6~7 ヶ月目では、1 日あたり 8~9mm の水が必要となった<sup>111</sup>。このため、サトウキビ栽培の現場では、灌漑のための施設をつくり管理することが必要だった。

他方で、こうした灌漑の必要性が、サトウキビ栽培と稲作との輪作を可能とさせる。サトウキビは、概ね 5 月頃に植えつけられる。そして、新たに苗を植えつけるもの〔新植〕についてはおおよそ 12~18 ヶ月、刈り取った株から伸びた茎を栽培するもの〔株出〕は大体 11~12 ヶ月で、それぞれ収穫された。一方、稲は、主に 12 月頃に植えられ、3~6 ヶ月ほどで収穫される<sup>112</sup>。サトウキビを収穫した後、稲の主な植え付け時期まで 6 ヶ月ほど空くものの、その間に豆など別の作物を栽培するか休耕すれば稲作との輪作が可能である<sup>113</sup>。サトウキビの輪作については、クリスチャン・ダニエルスが、台湾南部で、サトウキビ栽培を 2 年〔新植 1 回、株出 1 回〕ないし 3 年〔新植 1 回、株出 2 回〕行いその後地力回復のためにサツマイモを 2 年間栽培する輪作が、遅くとも 17 世紀後半には存在していたことを指摘する<sup>114</sup>。台湾のサトウキビ栽培が中国本土から流入した人々によって行われていたことを考慮すれば、同じく中国本土から流入した華人が主導したジャワ北岸地域のサトウキビ栽培においても、台湾南部と同じようなかたちで、かつ水田を用いた稲作との輪作が行われた可能性が高い。

その一方で、輪作だけでは、需要を満たすだけの砂糖と米の生産を完全に両立するのは難しかったとも思われる。稲作とサトウキビ栽培との輪作が高度に展開した 19 世紀の強制栽培制度の時代とは異なり、17 世紀において輪作を行う技術などは、前者の時代と比べると高くなかった。このために、砂糖と米の生産を両立させるために、輪作に加えて、サトウキビ栽培や稲作のため北岸地域の港市周辺や郊外の開墾や灌漑設備建設を行ったと考えられる。砂糖の生産が大きく拡大した 17 世紀後半のジャワ北岸地域は、前節で述べたような 1664-1665 年の早魃はあったものの、同世紀前半やトルノジョヨ反乱の時期に比べると平穏で、人口も増加した可能性が高く、比較的土壌開墾が行いやすかったと考えられる。

製糖所にとって、米の生産との両立は、製糖所の労働者や周辺村落住民の食糧を確保するうえで非常に重要であった。、もしも輪作や開墾を行ってもなお食糧が不足した場合、華人経営者は、周辺地域から食糧を調達した可能性が高い。

このように、製糖所やサトウキビ栽培、そのための開墾の現場で大人数のジャワ人を抱えるためには、ジャワ人農民に影響力を行使できる当地の首長の協力が、華人経営者にとって不可欠であった。こうして、彼らは、現地首長に見返りを支払い、それと引き換えに首長から村々における労働力と必要な土地の管理を任された。また、製糖所や関係する地

域の食糧が不足した場合には、華人経営者は周辺地域の現地首長から食糧を調達した。

このことは、華人とジャワ人との関係において、極めて重要な意味を持つ。すなわち、製糖所の華人経営者は、製糖所やサトウキビ栽培現場のジャワ人労働者や関係する村落の住民を経済的に彼らへ依存させた。また、それだけでなく、当該地域や周辺地域の現地首長をも、自らの生産活動に関与させた。華人製糖所経営者は、非常に広範囲にわたって多くの人々を経済的に巻き込んでいたのである。

## 5. 木材貿易

ジャワ北岸地域、特に中部ジャワ内陸部の高地には大規模な森林が広がり、船舶や建築物、日用品の材料や薪となる良質な木材を産出することで古くから知られていた。木材は、17世紀初頭以降、造船や都市の建造物の材料として重要視される。またこの時期、北岸地域で VOC は、米と同様に木材にも関心を持っていた。同地域における主な木材生産地は、ジュパラとレンバンが知られているが、17世紀の VOC 文書では、両地域に加えて中部ジャワのパジャンクンガン〈Pajankoengan〉<sup>115</sup>での生産も顕著であることが明らかになっている。そして、これらの地域で産出された木材の多くはジュパラを経由してバタヴィアへと運ばれていた。この数量をまとめたものが[表 4]である。なお同表では 1660 年代前半に「数量不明」となっている項目が多いが、同時期に木材をジュパラからバタヴィアに運搬する記事が非常に多く見られることから、この当時においてもかなり多くの量の木材がジュパラからバタヴィアに運ばれていたとみられる。そしてこの表から、この地域では 1620 年代頃からバタヴィアへの輸出が行われ始め、1660 年代前後から輸出量が急増することがわかる。

1660 年代以降に木材の輸出が急増した背景には次のような理由が考えられる。同年代以降、南スラウェシのマカッサル王国と VOC との緊張関係が激化し、最終的にはマカッサル戦争に至ったことや、ジャワ北岸地域における商業の活発化になど伴って船舶の需要が拡大したことにより、木材の需要が拡大したことである。また、同時期の商業活性化から、バタヴィアをはじめジャワ各地で港湾施設や商館など多くの建築物がつくられ、そのための需要が拡大したこと、前述した砂糖の生産と貿易の拡大に伴った製糖用燃料としての需要も拡大したこと、さらには、桶など木材を使った日用品の需要が拡大したことなども木

材輸出急増の要因となった。特に、船舶への需要は 1660 年代末には非常に高くなっていた。当時のジャワ北岸地域では、造船材料用の木材の輸出が増加しただけでなく、多くの船舶が現地で建造されていた。VOC の記録には、北岸地域ではこの時期に北岸地域に來航していた鄭氏の船舶や、イギリス人の船舶も建造されていたことが記されている<sup>116</sup>。

木材貿易においても、華人は早い時期から関わっていた。1653 年には、先に挙げた 8 月 23 日の記事において、木材が米と並んで華人によって取引された記事が見られる<sup>117</sup>。また、同月 11 日の記事には、パジャンクンガンにおいて、その多くがバタヴィア華人の所有である幅の広く厚い板材<swalp>や梁材<balk>、鋸で切られた状態の板材<gezaagde plank>が十分に貯蔵所に集まっているとある<sup>118</sup>。加えて、1666 年以降にジュパラ商館からバタヴィアに送られた多くの書簡で、ジュパラ、レンバン、パジャンクンガンにおいて華人が木材の供給<sup>119</sup>や木材輸出に関わっていた記事が頻繁に見られるようになる。

これら木材貿易に関わっていた華人のなかで、最も顕著な存在であった一人が、ロウラ・ハウテ<Loura Goute>であった。彼は、パジャンクンガンに住むムスリム華人で、同地域やレンバンにおいて、木材切り出しや港への運搬、VOC をはじめとする船舶への荷積みや販売を通じて、現地での木材輸出に深く関わり、活発に活動を行っていた。1667 年 3 月の書簡には、彼がレンバンにおいて同じ華人であるクレイ・スダナ<Coerij Sedana><sup>120</sup>とともに、並外れて見事な梁材を 4~5 隻の船に積み用意していることや、会社向けに曲材を切り出していたとの記事がある<sup>121</sup>。また、同年 4 月の書簡には、彼が VOC に現地における有力者として認識されており、VOC はあらゆる努力を以て彼と協定を結ぶことが求められる、と記されている<sup>122</sup>。また、1669 年 6 月の書簡には、彼に対して VOC が 700 ないし 800 レアルで曲材を供給してもらうよう依頼するとの記事がある<sup>123</sup>。この当時、ロウラ・ハウテは、VOC が木材貿易を進めていくのにあたり、その多くを依存しなければならなかったほど、当時パジャンクンガンやレンバンにおける木材の多くを取り仕切っていた存在であったといえる。このため、会社は、木材供給を保証するため、彼に便宜を図る必要に迫られていた。1671 年の書簡には、VOC に彼の娘婿からそのための依頼書がもたらされたことに際し、会社は、ロウラ・ハウテがパジャンクンガンやその近郊の沿岸地域において最も卓越した木材の供給者であり、その依頼を拒めなかったとある<sup>124</sup>。

一方、需要の高まった木材を切り出したのは、ジャワ人労働者であった。糖業の場合と同様、華人は現地首長の協力のもとに、労働力を確保した。作業現場における食糧や日常の必需品、嗜好品が華人の手に委ねられたことも、糖業の現場と同様である。

## 6. ジャワ北岸地域への輸入

17世紀のジャワ北岸地域において展開した米、砂糖、木材の輸出の対価として、バタヴィアから現地へ輸入されたのは、主に、インド綿布、陶磁器、銅、アヘンであった。[表 5]はバタヴィアからジュバラ、[表 6]はバタヴィアからグレシクへの輸出品とその額をそれぞれ示したものであり、ともに上述した品物が中心となっている。また、両表共通して、インド綿布については、年によって多少ばらつきが見られるものの、1679年までほぼ安定して輸入されており、陶磁器も、額は少ないものの安定して輸入されていることがわかる。その一方で、銅が1660年代末から1670年代後半まで輸入され、1670年代以降さらにアヘンが現地に輸入されるようになることも、両表から明らかになっている。

インド綿布、陶磁器、銅、アヘンの輸入の実態やその背景については、それぞれ次のように説明することができる。

東南アジア地域において古くから衣料品として用いられ、当該地域全域において主要な輸入品として知られていたインド綿布は、17世紀、特に1670年代までのジャワ北岸地域においても、輸入品の中心を占めていた。これらジャワへ輸入されたインド綿布の用途について、ナフテハールは、当時ジャワ綿布と比べて価格が非常に高価となっていたことを理由に、貯蔵貨幣や威信財として使われていたと主張する<sup>125</sup>。だが、[表 2][表 3]に見られるジュバラ、グレシク両地域からの木綿の輸出は、それほど大きなものではない。また、砂糖貿易の節で述べたように、ジャワ北岸地域における木綿栽培に際しては、その拡大を警戒したマタラムが1664年にこれを禁止する命令を出していた<sup>126</sup>。このため、1680年代以前にかんしては、北岸地域において木綿の栽培や生産は行われ始めていたものの、まだ過渡期にあって、大規模に生産されていたとは考えにくい。1670年代までの時代において、インド綿布は、貯蔵貨幣や威信財として用いられていたのと同時に、現地住民の衣料品としてもまだ多くが使われ続けていたと考えられよう。

陶磁器は、特に東南アジア島嶼部において、インド綿布と同様に、古くから輸入されていた商品であった。17世紀のジャワ北岸地域には、粗製の陶器から高品質の磁器まで様々な種類の陶磁器が輸入されていた。これら陶磁器のうち、陶器についてはジャワ島やその周辺で生産されたものが多く含まれていた一方、磁器については中国やベトナムなど東南

アジア大陸部からの輸入が中心であった。そして、これら輸入された陶磁器は、現地で食器、また磁器については威信財としても使われていたとみられる。

銅については、多くが現地に輸入され、主に前述したピチに鑄造されたとみられる。ジャワ北岸地域、特に本稿でとりあげるジュパラやグレシクにかんしては、1640年代までバタヴィアからピチが輸出されていたが、その後ピチがバタヴィアから現地に輸出されたという記録は見られなくなる。このため両地域については、1650年代以降、ピチは、バタヴィアなど別の場所で鑄造されたものから、現地で鑄造されるものが中心となっていた可能性が極めて高い。VOCの記録では、1660年代末からスマランにおいて華人によってピチが鑄造されていた記事が見られる<sup>127</sup>

アヘンについては、現地で嗜好品として使われていたと考えられる。VOCの記録を見ると、1666年の書簡において、VOCが、北岸地域へのアヘン販売について、現在の1ピクルあたり800レアルでの販売価格や、利益のうち2カテーあたり16レアルを現地の長官<sup>128</sup>ウィラディカラ<Wirat Dikara>に渡すのは高価すぎるとある。そして、現地には大量のアヘンが流入していることから、今後はバタヴィアと同様に1ピクルあたり400レアルで販売し、その利益のうち1カテーあたり2レアルを長官に譲渡するのに改めるとしている<sup>129</sup>。この記事から、北岸地域へのアヘンの輸入や現地における使用は、1660年代後半の段階で既にかなり大きな規模となっていたことがわかる。アヘンの使用については、ナフテハールが、パイプを用いて摂取する純度の高い高品質のものは主に有力者が、またタバコなどに混ぜて摂取されていた純度の低い低品質のものは主に船大工や砂糖工場などの労働者層によって使われた結果、17世紀末には社会のあらゆる層において消費されていたことを指摘する<sup>130</sup>。

こうしたインド綿布や陶磁器、銅、アヘンといった商品の輸入増加は、同時期にジャワ北岸地域において米、砂糖、木材の輸出が活発に展開したことに伴い、現地の経済力が高まったことを示している。

また、これら輸入品の貿易にかんしても、華人の関与が明らかとなっている。綿布や陶磁器にかんしては、『バタヴィア城日誌』の1630年代や1640年代の記事に、既にバタヴィアからジュパラやグレシクに向かう華人船や華人を乗せた船舶が綿布や陶磁器を運んでいた記録が数多く見られる。アヘンについて、ナフテハールは、消費の拡大が現地における華人の増加や華人商人の活動地域の拡大と一致したことを指摘し、当時アヘンの消費者は華人商人からアヘンを購入していたと論じている。そのうえで、ジャワのアヘン貿易は、

1682年までバンテンが中心になって行われていたことや、貿易に従事した商人はバタヴィアで流通する貨幣でアヘンを購入し、そのアヘンを北岸地域で売却して現地で流通する貨幣を入手して米を購入していたと述べている<sup>131</sup>。VOCの1674年の記事には、当時のマタラム皇太子アノム〈Anom〉がジュバラに赴いた際に、現地の華人達がアノムに対してインド綿布とならんでアヘンを贈ったとの記録が見られる<sup>132</sup>。これは彼らがアノムに対して自らが扱っていた現地への輸入品の一部を贈呈したと考えるのがもっとも妥当であろう。現地への輸入においても、華人が関わりを増していたことは否定できない。

## 第4章 17世紀後半における華人とマタラム王国

### 1. 序

17世紀中葉以降華人は、更にジャワ北岸地域へと流入する。当該の時代、中国において明から清への王朝交代があったことや、鄭氏が活動を活性化したことから、華人流入に変化が見られるようになる。王朝交代により中国国内が大いに混乱したことや清朝が遷界令を発令したことにより、中国沿岸各地から北岸地域へ渡航する者は激減した。だがその一方で、この時代には、当時ポルトガル領だったマカオからの流入が目立ち出し、また鄭氏の支配下にあった華人がこれに加わる。そして北岸地域では、このような華人流入があったことと並行して、在地の華人が貿易活動をとおしてマタラムやVOCとの関係を深め、現地社会との関与を一層強めた。

この章では、この時期にあたる第2期における現地への華人流入と、17世紀後半における彼らの活動について論じる。

先行研究をみると、この時期の華人流入については、ブリュッセイが示唆を与えている。同氏は、バタヴィア—中国間の貿易における議論で、バタヴィアへの華人船の来航は明清交代期における中国の混乱から1645年以降一時的に激減するものの、1665年以降少しずつ回復していったと論じる<sup>133</sup>。またナフテハールは、1680年代以降のジャワ北岸地域の華人有力者とVOC、マタラムならびに現地有力者との相互の関係について論じている。

本稿は、両氏が明らかにしていない、17世紀後半のジャワ北岸への華人流入と彼らの活動について論じる。ブリュッセイが論じる17世紀後半におけるバタヴィア—中国間貿易の展開は、バタヴィアへの華人移民をともなった。但し、本稿の第2章で論じたように、バタヴィアに到着した華人は、同地からさらにジャワ北岸地域へと流入した。加えて、同じ時期、中国本土からの流入に加えて、1662年以降鄭氏の支配下に置かれた台湾からの流入も見られるようになる。

一方、ジャワ島における華人とVOCならびにマタラムとの関係は、ナフテハールが指摘する1680年より前に、既にかかなりの程度まで構築されていた。特に17世紀中葉からは、



現地でマタラムとの関係を強める華人が現れるようになり、他方で VOC も北岸地域の華人との経済関係を深化させた。こうして 17 世紀後半には、現地の華人は、経済分野においてマタラムの集権的政策の一端を担っていくのである。

また、本章で明らかにすることは、当時のマタラム王国像に修正を加えるものになる。ナフテハールは、マタラム王国が王を中心とする集権的な国家であるとした従来の議論に対して、支配者層の個人同士の紐帯によって成立した複合的な権力構造体であったと論じる<sup>134</sup>。しかし、トルノジョヨ反乱が発生する以前の時期において、マタラム王は、現地首長らジャワ人有力者を経済分野で可能な限り排除する一方で、華人を重用することによって、集権的体制を強化していたと考えられる。

本章では、マタラム王国の統治、17 世紀後半における華人流入の実態、同時期における華人の VOC やマタラムとの関係深化について、それぞれ明らかにしていく。

## 2. アマンクラット 1 世治世におけるマタラム王国の統治

17 世紀中葉以降のジャワ北岸地域への華人流入や活動について論じる前に、その舞台となる北岸を支配下に置いていたマタラム王国の統治について論じる。当時の当該地域におけるマタラムの統治が、華人が現地において経済を掌握していく大きな要因となると思われるからである。

マタラム王国の支配下にあった各地域は、マタラムから派遣された太守<stedehouder>をトップとした一方で、その下のレベルではマタラムの支配と現地首長の支配が並存した構造となっていた。同王による統治制度については、フーンスが記録しており、デ・フラーフらによる当該時代のマタラム王国史研究は、この記録を史料として用いている<sup>135</sup>。そして本稿でも、その記録を利用する。

当時ジャワ島にあった 14 州のうち 12 の州がマタラム王国の支配下にあった。その 12 州は、沿岸部の balanbangan<Balambangan>、スラバヤ、トゥバン、パティ<Pati>、ドゥマク、プマラン<Pemalang>、チルボンと、内陸部のポルバイア [=マディウン]、ブリタル<Blitar>、スラロン<Selarong> [=バニユマス<Banyumas>]、クラピャック<Krapyak> [=バグララン<Baghlan>]、マタラムで構成されていた。

このうち沿岸部の州では、国王が自ら任命した首長が派遣された一方、後述するパティ

を除き、パンゲラン〔貴族〕の称号を持つマタラムに征服された当該の地の王族の現地首長も存在した<sup>136</sup>。また沿岸部の各州は、それぞれいくつかの地域と都市に分かれていた。各地域は、全体ではマタラムが派遣した首長の支配下にあった一方で、各地域や各都市には、マタラム王が任命した長官<gouverneur>と在地の現地首長が任命した長官がそれぞれ存在した。これらの長官は、その職務について、それぞれ自らを任命したマタラム王や現地首長にのみ報告を行っていたが、マタラムから派遣された首長に対しては敬意を示さなければならなかった。彼らに加えて、各地には、シャーバンドルが2名ずつ存在していた。シャーバンドルは、長官や現地首長の命令に服従する必要がなかった一方で、マタラム王から北部の諸州全体を監督するために任命された2名の弁務官<commissaris>に対して自らの任務について報告する義務を負った。また、この弁務官に対しては、長官達も自らの任務について報告する義務を負っていた。加えて彼ら弁務官は、各州に視察官を配置して、正しい報告がなされているかどうか探らせていた。一方、王族が皆殺しにされたパティとマタラム王国の貿易港ジュパラについては、国王自身の任命した長官が支配していた。

内陸部については、ポルバイア、ブリタル、スラロンがトゥムゴンの称号を持つ宰相の支配下にあり、宰相はこれらに自らが任命した首長を配置していた。だが一方で、この3州についても、多くの沿岸諸州と同様に征服された王族の現地首長も配置されていた。他方、マタラム王の世襲地であったクラピアとマタラムは、トゥムゴン・マタラムの称号を持つ宰相の直接支配下にあった。

これら各地の弁務官や現地首長、長官、シャーバンドルは、宮廷に赴いて、マタラム王に自らが管轄する歳入の報告を行った<sup>137</sup>。マタラム王の収入は、支配下の地域からあがる米の収穫税、北岸港市の輸出入税、交通の要所に設けられた関所税、主に華人などに課された人頭税などから構成された。

以上の事実から、17世紀中葉のマタラム王国では、王国が直轄した州や港を除き、各州にマタラム王が任命した首長と同王国が征服した王族の現地首長が並存していたことがわかる。在地の旧王族の現地首長が派遣した代理人はマタラムが任命した首長に対して敬意を払わなければならなかったことや、弁務官やシャーバンドルが国王に直属する者として存在していたこと、現地首長の派遣した長官やシャーバンドルらに弁務官への報告義務を負わせることで、当時マタラムは支配地域を掌握しようとしたとみられる。

しかし、マタラムが任命した現地首長と同王国が征服した在地の旧王族による現地首長が並存していた王国の統治構造は、後者が有力となった場合に極めて危うくなる。1646年

に VOC との関係が改善し北岸地域を通じて会社との貿易が再開されたことが、その危険性をより大きくしたといえる。そこでマタラムは、北岸地域の貿易活動を制限して、自らによる貿易の独占を図った。まず同王国は、1651 年に自らの臣民全てに対してジャワ島外へ渡航することを禁じ、同島の西部と東部に沿岸部を管轄する監督官を置いた。この監督官は、1657 年に 4 人に増員され、後述する代官にとって代わられる 1669 年まで存在した。また、翌 1652 年から 1653 年にかけて、同王国は、自らに対抗するバリとの貿易を停止させるために米と木材の輸出を禁じる。そして 1655 年から 1657 年まで、マタラムは、それでも密貿易を行う沿岸地域の活動を抑制するために、全ての港を閉鎖した。この港の閉鎖では、大小問わず全ての船舶が破壊され、漁師でさえも海に出ることを認められなかった。また、1660 年から 1661 年にかけても、同王国は、再び沿岸地域の港を閉鎖した。

これらの政策を通じて、マタラムは、北岸をはじめとする沿岸地域の貿易活動を管理下に置き、王室のみがその利益を独占しようとした。このような状況のなか、北岸地域では、次節以降で述べる第 2 期の華人流入が展開し、米や砂糖、木材の取引が一層活性化していくのである。

### 3. 17 世紀中葉以降における華人流入

17 世紀中葉以降、中国では、1644 年に李自成の乱による明の滅亡と清による反乱軍撃退ならびに北京入城によって、王朝の交代が行われる。他方、これとほぼ同じ時期、東シナ海海域を中心に鄭氏の勢力が、貿易を基盤として活発に活動し、1662 年には VOC が築いていたプロヴィンシア砦とゼーランディア城の攻略を通じて台湾を占領して勢力を拡大した。この鄭氏の動きに対して、清朝は、その弱体化を図って 1656 年には海禁令を出して沿岸地域の商船が出航して鄭氏勢力に対して食糧などを販売することを禁じ、1661 年には遷界令を発令して福建を中心に広東から山東にかけて海岸線から 30 里<sup>138</sup>以内の地帯に居住する人々を内陸に移住させた。このような状況のなか、清の康熙帝が、同王朝が華中・華南を制圧する過程において大きな役割を果たした福建の耿繼茂と彼の後継者の耿精忠、広東の尚可喜、雲南の呉三桂の三藩を、中央集権政策を推し進めるために廃止する方針を打ち出したことをきっかけに、三藩の乱[1673-1681 年]が起こる。

本稿が第 2 期と定義する時期の華人流入は、このように中国の状況が展開するなかで行

われた。ブリュッセイは、バタヴィアにかんして、1645年の『一般政務報告書』の記事を用いて、明清交代期の中国国内における内戦状態によって内陸部からの物資の供給や貿易活動が妨害されたことから、1645年以降同地への中国沿岸からのバタヴィアへの貿易船の来航数が激減したと論じる<sup>139</sup>。この中国沿岸からの来航数が少ない状況は、1670年頃まで続いた。中国からの華人流入の大半が同地からの貿易船に乗船するかたちで行われていたことを考慮すれば、同地から来航した船舶の減少が華人の流入にも大きな影響を与えたことは間違いない。

だが、他方で、上記のような非常に混乱した中国の国内状況は、商業従事者を中心に現地住民の国外移住への意欲を大いに高めたと思われる。海禁令や遷界令により清朝支配下の中国沿岸からの出航が難しくなった貿易船に代わる移動手段が確保できれば、彼らはそれで海外へ渡航した可能性が極めて高い。また、前章で示した同時代のジャワ北岸地域において砂糖生産量と木材産出量が増加した背景には、同時期において現地へ華人がさらに流入し、その多くが砂糖や木材貿易の現場で働くことがあったと考えられる。

中国からジャワへの渡航にかんしては、清朝の勢力下にあった中国沿岸地域からの貿易船に代わる手段が二つ存在したと考えられる。一つは、マカオから来航した船舶、もう一つは、鄭氏勢力の船舶である。この両者のうち、後者については次節で詳しく述べるため、ここでは特に前者について述べていきたい。

マカオは、ポルトガル人が、1553年に自らの所有する船舶が座礁して浸水した朝廷への納品を乾かすために同地への上陸を要求し、中国側の管理部局の人物に贈物を贈ってこれを認めさせ、上陸して拠点を築いた。彼らは、1557年には中国側の官吏にこの既成事実を認めさせ、暫定的な居留地設置の許可を得て、同地に建物や城砦を建築した。これにともない、現地にはさらに多くの者が住むようになり、1563年には900人が居住するに至る。そして、1573年、ポルトガル人は、明朝に地租を払う見返りに同王朝から正式にマカオ居留の許可を得た<sup>140</sup>。これらから、マカオは、その後の明清交代期の影響を大きく受けたものの、商業活動は継続することができた。同時代のマカオの貿易について、ブリュッセイは、ウィルズ<Wills>の議論を用いて、清朝の海禁ならびに遷界令によって一時危機的な状況を迎えたが、1668年までにはその状況を徐々に脱し、同年以降バタヴィアからの船舶が密輸の形で貿易を行うようになったと述べている<sup>141</sup>。

このようにしてマカオからバタヴィアに来航した船舶については、ブリュッセイが、『バタヴィア城日誌』の記録から、1665年以降に同地からバタヴィアに来航はじめたことや、

1665-1669年の時代には1隻、1670-1674年には13隻、1675-1679年の期間には15隻、1680-1683年の時期には6隻、それぞれ来航していたことを指摘している。一方で、同氏は、中国沿岸からの来航数が、1665-1669年の時代には無く、1670-1674年には5隻、1675-1679年の期間には28隻、1680-1683年の時期には10隻であったとも論じている<sup>142</sup>。両者の推移から、マカオからの来航船は、1665-1674年の10年間については中国沿岸からの来航船の数を上回っており、1675-1679年の期間にかんしては中国からの船舶の半数近くと比率は下げているものの数は増加していることがわかる。これらから、当該の時期、マカオからの船舶がバタヴィアに来航した船舶の主要な部分を担っていたといえる。そして、この船舶に乗っていた華人は、それ以前の時期と同様に、更にバタヴィアからジャワ北岸地域へ向かう貿易船によりジャワ北岸地域へと流入していったと考えられる。

#### 4. 鄭氏とジャワ北岸地域

マカオからの流入に加え、17世紀中葉以降北岸地域で顕著となるのが、鄭氏の支配下にあった華人の台湾などからの流入である。

鄭氏は、17世紀に中国南部や台湾を拠点として、海上貿易を基盤に活発な活動を行っていた勢力である。この勢力は、鄭芝龍が17世紀前半に東シナ海海域で活発に活動していた李旦の後を継いで以降勢力を拡大していく。また彼の息子鄭成功は、その後の清との抗争をめぐって、鄭芝龍が同王朝に投降したのに対し、彼は清に抵抗し続けた。そして鄭成功は、1662年に当時VOCが支配していた台湾のゼーランディア城を攻略して同地を占領し、台湾開発の基礎を築く<sup>143</sup>。続く鄭経は、台湾占領後まもなく死去した鄭成功の跡を継ぎ、台湾統治時代[1662-1683年]のほぼ全ての時期にわたって現地の統治を行った。そして、同勢力の台湾統治は、鄭経の息子である鄭克塽の時代まで続いた<sup>144</sup>。ここで取り上げる鄭氏は、鄭成功以降の時代に「台湾鄭氏」とも呼ばれた後者の勢力を指していく。

鄭氏の勢力は、17世紀中葉以降ジャワ島に現われはじめる。ブリュッセイは、1654年と1655年に鄭氏に属する8隻のジャンク船がバタヴィアに現われたことを指摘する<sup>145</sup>。その後、清朝による海禁政策や遷界令によって中国本土を追われた鄭氏は、VOCを追放して台湾を拠点とした1662年以降、会社と敵対関係となった。しかし、この間の時期にも鄭氏の勢力下にあった華人は、ジャワ島へ流入していったと考えられる。そして、ジャワ北岸地

域にかんしては、1670年頃から彼らの流入や現地での活動が、VOCの各文書において明らかになっていく。その様子は、以下に挙げる通りである。1671年のバンテン発3月5日付の書簡には、鄭氏のジャンク船がグレシクからバンテンに来航したことや、バンテンの収税官〈tollenaer〉ネベ・セクレダナ〈Nebe Seccredana〉のジャンク船が2月26日に台湾からジャワ東岸へ出航したことが、それぞれ記されている<sup>146</sup>。また、同月13日には、鄭氏のジャンク船が鄭経からバンテン国王へ宛てた書簡を携えて現地に来航したことや、同船に乗っていた3人の華人が数隻のジャンク船を建造してもらうため同地からレンバンに出航したこと、また、多くの鄭氏の華人がバンテンからジャワ東岸やバタヴィアに向け定期的に出航していることが記録されている<sup>147</sup>。そして、これを裏付けるものとして、同年4月のジュパラ商館からの書簡に、スマランやグレシクなどジャワ北岸の各地において台湾からやってきた華人が居住しているとの記述が存在する<sup>148</sup>。この他にも、3月にジュパラ商館からバタヴィアへ送られた書簡には、パジャンクガンにおいてバンテンの華人シャーバンドルであるカイツー〈Caytsoe〉によって建造された船が鄭氏に売られると記述されており<sup>149</sup>、翌1672年の4月と7月には、同地で鄭氏の船が建造されたことが記録されている<sup>150</sup>。また、この両年には、スマラン、ジュパラ、ジュワナ、レンバン、グレシクのジャワ北岸地域沿岸で鄭氏の船舶が航行しているとの記事がしばしば見られ、このうち1672年6月には、鄭氏の船舶がVOCによって拿捕された記録も見られる<sup>151</sup>。

当時、鄭氏は、厦門など中国南部や台湾を拠点<sup>152</sup>に、広南、シャム、カンボジア、パレンバン、テルナテ、バンテンの各地域、更にバンテンからバタヴィアやジャワ北岸各地域といったルートで活動していたことが『バタヴィア城日誌』や『一般政務報告書』の記事から明らかになっている<sup>153</sup>。そしてこれらの地域のうち、バンテン、バタヴィア、ジャワ北岸地域については、鄭氏の台湾占領以降に同勢力の活動が見られるようになる。特に、バンテンは、当時南スマトラや西ジャワ内陸部における胡椒栽培を厳重な監督下に置いて交易活動を発展させたスルタン、アブドゥルフアタ・アグン〈Abdulfatah Ageng〉[位：1651-82]の治下で全盛期にあった。鄭氏は、バンテンと貿易を行うなかで、現地の収税官ネベ・セクレダナや華人シャーバンドルのカイツーといった人物と関係を構築し、彼らを通じて現地と強く結びついた。このことが、鄭氏がバンテンを経由したかたちでジャワ北岸地域へ航海し、同地域やバタヴィアに自らの影響下にある華人を流入させていた背景となっていたとみられる。

鄭氏が東南アジア地域で活発に活動を行った背景には、まず、1670年にイギリス東イン

ド会社との間で貿易契約を締結するなど、台湾での貿易を盛んにするために外国船の来航を勧める鄭經の方針があったとみられる<sup>154</sup>。これに加えて、当時の台湾と中国をめぐる状況も、当時の鄭經の方針に大きな影響を与えたと考えられる。1655年以降鄭氏と清朝両勢力の戦争が激化するなかで、清朝は、鄭氏と大陸沿岸の人民との接触を拒み、鄭氏への物資補給を断つため遷界令を1661年に実施した<sup>155</sup>。この遷界令は同令が解除される1681年まで続き、鄭氏に大きな打撃を与えた<sup>156</sup>。遷界令で中国本土からの米の供給が断たれたことにより、台湾では、深刻な米不足が生じ、鄭氏にとって極めて重大な問題となった。こうしたなかで、鄭氏は、上述した地域との貿易を行うことで自らが生き残る道を見出さねばならなかった。

一方で台湾は、VOCの支配下にあった1640年代から1650年代にかけて、中国本土の混乱から逃れた多くの者を集めたことで、急速に人口が増加していた。ウィルズは、VOCによる統治が始まった当初は3500人だった人口が1650年頃には14000ないし15000人まで増加したとし、その後もさらに増加したと論じる<sup>157</sup>。また、キャンベルは、1661年の段階で台湾の会社支配下の中国人居留地に約25000人が居住していたことを指摘する<sup>158</sup>。加えて、鄭氏の支配下に入った後も、鄭氏が福建や広東から移住者を募り、多くの者がこれに応じたことで、同地の人口は更に増加した<sup>159</sup>。鄭氏の華人によるジャワ北岸地域への流入は、このようにして台湾に集まった華人が、同地を拠点とした鄭氏による貿易にともなってさらに北岸地域へと移動したものと考えられる。

これらを背景に北岸地域へと流入した鄭氏の華人は、現地から米、それを運搬する船舶やその建造や補修の材料となる木材を北岸地域から鄭氏政権に調達し、砂糖を現地から直接もしくは広南など他地域を通じて日本や中国本土へと輸出していた。このような鄭氏の影響下に華人の活動が、第3章で述べたようなジャワ北岸地域の貿易活性化に大きく寄与したのである。

しかしここで問題となるのが、当時ジャワに自らの影響下にある華人をバタヴィアやジャワ北岸地域に送り込んでいた鄭氏とバタヴィアを拠点としていたVOCとの関係である。鄭氏は、台湾占領の前後においてはVOCと敵対関係にあった。だが、自らが生き残るために各地との貿易が不可欠であった鄭氏は、台湾占領から4年後の1666年にはVOCとの貿易を考えはじめようになり、その後会社との和解をも意図するようになったとみられる。1667年の『バタヴィア城日誌』には、前年12月に台湾から日本経由で広南に来航した華人ジャンク船3隻の船長が、鄭經の友人であったとの記録がある。この記事では、鄭經が

VOCとの貿易を望んでいるため、VOCに会社の使者を乗せた船を台湾へ派遣することを要請していたことが述べられている。またこのために、来航した船の船長達が、広南からバタヴィアへ向かうジャンク船の操舵手に対して、上記の内容をバタヴィア政庁に伝えるのを依頼したとも記されている<sup>160</sup>。1671年4月3日の記事には、台湾からバンテンに来航した華人がカイツーへ宛てた書簡において、鄭経や彼の下にいる大官達がVOCと和解することを望むとの内容があったと記録されている<sup>161</sup>。さらに同月19日の記事には、[VOCの]バンテン知事が、もし鄭経がVOCと貿易を望むのであれば、先の「不当な戦争」<sup>162</sup>で奪われた捕虜と物を返さなければならぬとカイツーに告げた、と記されている<sup>163</sup>。

このような鄭氏の貿易や和解の申し出に対して、清朝を援助する意図を持ち同王朝と交渉を行っていたVOCは、これを正式に受け入れることはなかった。しかしながら他方で、VOCは、ジャワ北岸地域周辺の海上を航行する鄭氏の船舶の拿捕を上述の1672年の1回しか行っておらず、バタヴィアやジャワ北岸地域へ流入した鄭氏の華人も特に排除していないなど、あからさまに鄭氏と敵対するような動きは見せていない。当時これらの地域では、現地に流入した華人によって活発に貿易が展開し、VOCもその貿易から利益を得ていた。VOCは、その貿易や自らの活動に対して重大な支障がない限り、鄭氏の華人が活動していてもいわば黙認していたことが見てとれる。

鄭氏華人の来航は、ジャワ北岸地域の経済活動を一層刺激したのである。

## 5. 17世紀後半におけるマタラムと華人

第2章で述べたように、1646年アマンクラット1世統治下のマタラムとVOCとの間で、両者の関係修復と貿易再開の合意がなされて以降、VOCとジャワ北岸地域の華人との間で直接的な関係が構築されるに至った。この事実は、マタラムがVOCとの貿易を独占的に行ううえで、後述するように華人を重用していく大きな要因の一つとなったと考えられる。

1646年以降、VOCがジャワ北岸地域との貿易や現地から情報を入手するやり方に変化が生じる。VOCは、従来よりも現地に居住する華人とより直接関係を構築できるようになった。このことは、前章で述べたVOCと北岸地域との貿易において、チンスイ、ティーヘン、ロウラ・ハウテら各地に居住する華人が会社と直接接触し、会社も彼らを重要視したという事例からも明らかである。そして、VOCと北岸地域の華人との関係が深まるにともない、



両者の間で多額の金額の取引が行われ、華人が会社に対して負債を抱えるという問題が生じる。例えば、上記の華人のうちティーヘンは、1653年の段階で会社に対する負債を抱えていたと記録されている<sup>164</sup>。また、17世紀後半には、チンスイがVOCに対して1700レアルもの負債を残して死去し、その後、その負債の支払いをめぐって彼の娘婿であるジンコ〈d' Siemko〉および彼の未亡人と会社との間で長くトラブルになっていたことを示す記事がいくつか見られる<sup>165</sup>。更に1669年の書簡では、サンコ〈Sanco〉という名の華人がVOCに対して1500レアルの負債を抱え死亡したと記録されている<sup>166</sup>。

これら北岸地域の華人がVOCに対して抱えていた負債の存在は、現地の華人と会社との関係において重要な意味を持っていた。ブリュッセイは、17世紀初頭のバタヴィアにおいて、ヤン・コンが、VOCに対して多額の負債を抱えていた一方で、会社は彼を重用し続けていたことを指摘している。ヤン・コンはバタヴィアに最初に移住した華人の一人で、最初はバタヴィア建設における材木の供給で台頭し、VOCから賭博税をはじめ会社の最も重要な税の請負を行うようになるなど、バタヴィア華人の中で特に傑出した人物となった。また中国や華人間との強いつながりをもつヤン・コンは、1620年代前半からバンテンとの交渉役として活躍し、またVOCの中国貿易にも関わるようになる。そして彼は、1630年以降、鉛ピチの鑄造をも任され、オムランデンにおける砂糖栽培・生産、バタヴィア東方における塩田開発などにも関わる。しかし、VOCをはじめとする債権者からの借金を受けて行われた彼の事業のなかで、砂糖栽培、塩田開発などは失敗に終わり、ヤン・コンはVOCに27636と3/8レアルという多額の負債を残して死亡したという<sup>167</sup>。同世紀後半にみられるジャワ北岸地域におけるティーヘンやチンスイ、サンコについても、バタヴィアでのヤン・コンのケースと同様であったと考えられる。すなわち、これらの負債は、彼ら華人が、米の運搬や木材の供給といった会社と密接に関係した自らの事業に関わる多額の資金の前借りをすることが可能となる程度にまで、VOCの信用を得ていたことを示した事例であったといえる。

こうした関係を背景として、当時の北岸地域の華人は、貿易以外の分野にかんしても会社から信頼を得ていた。1669年以降バタヴィアへ届けられたジュパラの理事官の書簡の多くが、両地域を往復する華人船によってもたらされていたことが、『バタヴィア城日誌』に数多く見られる。また、1671年4月の書簡では、チンスイの娘婿ジンコが、北岸地域周辺の海域を船で逃亡していた鄭氏の華人がグレシクに入港したことについてVOCに報告を行うなど、1670年代に北岸地域に流入していた鄭氏の華人の情報を会社が得るために大きな

役割を果たしていたことが記録されている<sup>168</sup>。このように、彼らジャワ北岸地域の華人は、次第に会社の職務の請負や、会社への情報伝達など VOC にとって重要な役割を担うようになったのである。

他方でマタラムも、北岸各地域に居住する華人との関係をより深めるようになった。こうしたなかで、17 世紀中葉以降、ジャワ北岸地域で活動していた華人のなかから、現地経済の多くの部分を掌握する者が多数現れる。これにかんして、最も数多く見られる事例が、ジャワ北岸の各地でシャーバンダルとなった華人の増加である。マタラムでは、シャーバンダルは、外国商船の接待、管理、徴税および居留外国人商人の統制といった本来の職務に加えて、徴税も司るようになっていた<sup>169</sup>。ジャワ北岸地域においてシャーバンダルとなった華人については、次に挙げる人物が、VOC の各文書に現れる。17 世紀中葉以降に米の貿易に大きく関わっていたチンスイは、1660 年代末からグレシクのシャーバンダルとなり、ジュパラにおいても、VOC が交渉を行う重要な人物であったことからこの地のシャーバンダルでもあった可能性が高い<sup>170</sup>。また、木材貿易において顕著な存在となっていたロウラ・ハウテは、パジャンクンガンのシャーバンダルとなっていた。彼らのほかにも、1664 年には、オンコ<Ongko>という名の華人がジュワナ、レンバン、カリガナン<Kaliganang><sup>171</sup>の 3 港のシャーバンダルとなっていた記録がある<sup>172</sup>。また、1670 年代には、インバサダナ<Imbassadana>の名を持つ華人がドゥマクのシャーバンダルであったと記され<sup>173</sup>、1674 年には、ピロアウロ<Bieloauro>という名の華人がレンバンとラセム<Lassem>のシャーバンダルとなっていた記録が残されている<sup>174</sup>。さらに、1677 年には、ラクサ・サダナ<Raksa Sadana>の名を持つ華人がスラバヤのシャーバンダルであったと記され<sup>175</sup>、1678 年には、サーチア<Saatsia>という名の華人がスマランのシャーバンダルであったことが記録されている<sup>176</sup>。これらから、当時、ジャワ北岸地域における主要な貿易品である米や砂糖の中心的な貿易港だったジュパラやグレシク、また木材の主要な貿易港だったジュパラ、レンバン、パジャンクンガンなど主要な港市において、華人シャーバンダルが存在していたことがわかる。上記の地域では、多くの華人が居住していたことや、対外的にも他地域からの華人との貿易が頻繁に行われていた。これらを背景として、華人の多くがマタラムによってシャーバンダルに任命されたのである。

この事実は、マタラム王国のシャーバンダルが徴税請負の役割も担っていたことを考慮すると非常に重要な意味を持つ。第 2 章で述べたようにジャワ北岸港市には 2 名のシャーバンダルが置かれていたが、ジャワ人シャーバンダルはアマンクラット 1 世の貿易政策に

より実質機能しておらず、華人シャーバンダルが貿易を統轄していた。当時北岸地域の多くの港市では、輸出入税や人頭税、米の収穫税、さらに港市に至る交通の要衝に設けられた関所税などの徴税が、華人シャーバンダルを頂点にして行われていた。この金額は、非常に大きかった。1677と1678年にVOCが行った調査では、マタラムがスラバヤから得た収入の総額が8900レアルで、その内訳は輸出入税が1500レアル、華人が請け負った関所税等が400レアル、人頭税が3000レアル、米収穫税が4000レアルであった。当時スラバヤのシャーバンダルが華人のラクサ・サダナであったことを考えれば、実質同地における徴税のほぼ全ては華人によって行われていたといえる。また、同じ調査では、スマランで徴収された約8000レアルが輸出入税と人頭税で構成されていたことが明らかになっているが、これについても、同地のシャーバンダルが華人のサーチアであり、後述するように人頭税の徴収も彼が行っていた。そのほぼ全てがサーチアによって徴収されたといえよう。さらにグレシクでは、現地で徴収された総額1374レアルのうち輸出入税64レアルとそれ以外の華人請負分1000レアルが彼らによって徴収されていた<sup>177</sup>。東南アジア地域では、シャーバンダルは通常1つの港市のみの職務を受け持った。しかし、上述のオンコやピロアウロのように複数の港市のシャーバンダルを務めた華人がいたことは、マタラムが彼らを通して効率よく徴税を行おうしたことを示している。

この時代、現地の華人は、徴税と同時に現地の商業活動とも関連した権利を持つようになった。1678年の記事には、スマランにおいて、前出のサーチアが、最初の7年間は毎年1200レアル、その後の2年間は毎年1600レアルを現地首長に支払い、塩の専売、竹の専売、アラク酒の製造ならびに販売、ピチの鋳造、華人の人頭税の徴収の権利を得ていたとある<sup>178</sup>。サーチアは1678年の段階で既に9年間支払いを行っていたことから、彼は、遅くとも1669年には現地で上記の各権利を持っていたとみなすことができる。また、1679年のドゥマクでは、首長であったスラ・ナタの妻の妨害によってVOCが塩の購入が不可能となっていたとの事例が見られる。この背景には、現地の華人シャーバンダルのアンガブラダナ<Angapradana>がスラ・ナタの妻を援助していることがあげられており、当時のドゥマクにおいて彼が塩の専売を行っていた可能性が高い<sup>179</sup>。ジャワ北岸地域の華人は、1660年代末には現地の経済に関するかなり多くの重要な部分を掌握していたと考えることができる。

加えて、上に挙げた華人シャーバンダルのうち、ロウラ・ハウテについては、キアイ<keaij>の称号も合わせて持っていたことにも注目する必要がある<sup>180</sup>。キアイは、生田滋

が「長老」と翻訳しており<sup>181</sup>、本稿が史料として用いている VOC の各文書では、マタラムの王宮内の人間や現地首長といった高位の有力者に対する尊称として用いられている<sup>182</sup>。ロウラ・ハウテがこの称号を持っていたということは、当時彼が自身のいるパジャンクンガンにおいて、現地首長に極めて近い地位を持っていたといえよう。

さらに、華人シャーバンドルのなかには、現地首長とほぼ同等の地位を得た者も存在した。1677 年の記録には、マタラムの第 5 代王アマンクラット 2 世〈Amangkurat II〉〔位 1677-1703〕は、1677 年に、先述したスラバヤのラクサ・サダナに対してトゥムゴンの称号とマルタ・ラクサナ〈Marta Raksana〉の名を与え、現地で同王の収入の管理を行うよう命令したとの記述が存在する<sup>183</sup>。当該地域の統治こそジャワ人の臣下に任されたが、華人のラクサ・サダナはマタラムから地方領主を表す称号トゥムゴンを与えられ、現地の財政を任されたのである。

上記のように、マタラムは、華人に対して大きな信頼を置いていた。北岸地域の華人とマタラムとの関係強化には、マタラム側の強い意向が存在した。当該時期のマタラム王アマンクラット 1 世は、貿易港を持つジャワ北岸地域の現地有力者が貿易を行うことによって強力となることを危惧したために、同地域を含めた王国領域からの貿易を全て自らが管理し、ジャワ人が対外貿易を行うのを禁止する政策をとった。17 世紀中葉にマタラムの王都へ派遣されたフーンズは、アマンクラット 1 世が、臣下に財産を蓄積させないように厳しい支配をしなければ自らが王位にとどまれないとの認識を持ち、対外政策ならびに貿易政策について、臣下を誰一人として外国に航海することを許さず、ただ外国から人々が来るのを待つべきとの方針をとっていたと記述している<sup>184</sup>。この貿易独占政策をマタラムが推し進めていくうえで最も都合が良かったのが、北岸地域に居住していた華人だった。前章で示したように、現地の華人は、現地における輸出品の生産や貿易において欠くことのできない存在となっていた。加えて、前述したように、特に砂糖生産の現場で華人が現地のジャワ人を雇用しその住居や必需品、嗜好品を供給したことによって、彼らとも非常に深く関わるようになっていた。さらに、彼らは、北岸各地域間や現地からバタヴィアやバンテン等へ航海を行い、VOC や現地に居住する華人とのネットワークを利用して更にマラッカ海峡や南シナ海方面とも貿易を行っていた。外部へ出向かなくても、彼ら華人のもとに少なからぬ交易者がやってくるのが想定できたからである。そして同王国は、華人に対しては特別に外部への航海を認めた。一方でマタラムは、華人有力者を自らが直接管理していたシャーバンドルに任命して王宮に参内させることで、彼らを統制することができ

たのである。

他方でマタラムは、彼ら華人を自らの臣民ともみなしていた。同王国は、彼らが死去した際にはその財産を没収した。1653年の記事には、ジュバラにおいてローコ〈Looco〉という名の華人が死去した際、マタラムが彼の船舶の積荷を査定していると書かれている<sup>185</sup>。また1672年には、チンスイの死去に際して、マタラムの皇太子アノム〈Anom〉が彼の遺産を査定しているとの記事が見られる<sup>186</sup>。この両記事では、マタラムがローコやチンスイの遺産を没収しているとはまでは記録されていないが、17世紀のマタラムは、アチェ、バンテン、パレンバンなどと並んで、領域内の臣民が死去した際、死去した者に男子の相続人がいない場合には王権がその財産を没収していたことや、未亡人や未婚の娘は王宮に連れて行かれる可能性があったことが、リードによって指摘されている<sup>187</sup>。上記の記事に見られるジャワ北岸地域に居住し現地で死去した華人の財産に対するマタラムの査定は、同王権による没収のために行われていたのであろう<sup>188</sup>。また、マタラムは、領域内の華人が事件を起こして捕らえられた際にも、その人物の財産を没収することができた。1671年にドゥマクのシャーバンドルであったインバサダナが現地での殺人事件に関与して捕らえられた際に、彼の財産がマタラムによって没収されたことは、これを示す事例である<sup>189</sup>。

このように、マタラムは、現地首長をはじめとする北岸地域のジャワ人有力者を厳しい監督下に置く一方で、ジャワ北岸地域の華人を自らの下に取り込んで重用した。これを最も象徴する年が、1669年だったと考えられる。この年マタラムは、現地首長に対する監視を強化するために、それまでの4人の沿岸監督官に代えて代官〈umbol〉を北岸の各地に派遣し、彼らに対する管理をより厳しくした。その一方で、同王国は、本章で述べてきたように、ジャワ北岸地域の華人に王国の経済活動における重要な部分を掌握させた。この2つの動きを通じてマタラムは、自らが推し進める集権的政策を、同年以降さらに強化していったのである。

こうしたマタラムの政策は、ジャワ社会における華人観の形成に大きな影響を与えたと思われる。第2章で述べた、北岸地域の華人のイスラムへの改宗や現地名の使用、現地女性との婚姻は、この時期にも継続していた。上述したジャワ北岸地域の華人シャーバンドルのうち、チンスイ、ロウラ・ハウテ、インバサダナ、ラクサ・サダナがムスリムであったことはVOCの各文書に記されている。また、現地名にかんしても、インバサダナ、ロウラ・ハウテ、ピロアウロ、ラクサ・サダナらは明らかに中国名ではなくジャワないしまレーの名を名乗っており、チンスイについては、中国名だけでなくカンチサラナ

<Kantisarana>という現地名も合わせて名乗っていた<sup>190</sup>。一口に華人といっても、出身地や親族集団によって分化され、彼らのうちで華人アイデンティティがどれだけ共有されていたか疑わしい。こうしたなかで、交易独占政策を目論んだマタラムが、ジャワ人を排除した一方で、対外的なネットワークを有した華人を重用したことは重要である。すなわち、華人シャープバンドルを頂点として、マタラムによって「華人」が措定されたのである。その華人達が商業活動全般において、現地社会と深く関与し始めると、ジャワ人達も商業活動を司る人々を「華人」として認識し始める。こうしたなかで現地社会が経済的に混乱すると、人々の反感は華人全般に向けられることとなる。次章で扱うトルノジョヨ反乱では、それが展開する。

## 第5章 トルノジョヨ反乱と華人

### 1. 序

これまでの章で述べたように、ジャワ北岸地域の華人が VOC とマタラムと結びつき現地の経済を掌握していくなかで、ジャワ人民衆は、砂糖生産や木材切り出しの労働力として、かつ食糧や日常品の購入者として、華人に対する従属度を強めていた。また、マタラムが集権的政策を押し進めていくなかで現地首長らジャワ人有力者を排除して華人を取り込んでいったことによって、同王国とジャワ人有力者との間に亀裂が生じ始めた。トルノジョヨ反乱の拡大には、これらによって生じたジャワ人の不満が、大きな要因となったように思われる。

トルノジョヨ反乱は、1675年にマドゥラ島で発生し、後にジャワ島へと波及した反乱である。同反乱は、マドゥラ島から東部ジャワに波及したのち、中部ジャワにまで波及して1680年まで大規模に展開した<sup>191</sup>。また、反乱が展開するなかで、反乱軍は一時マタラムの王都プレレドを陥落させて同王国の宝器を奪うなど、マタラムを滅亡させる一方手前まで追い込んだ。同反乱は、本稿が考察する時代の最後に発生した、ジャワ島史における重大な事件である。

トルノジョヨ反乱にかんしては、20世紀中葉にデ・フラーフによって発表された一連の研究によって、その展開が明らかにされている。その後現在まで、17世紀のジャワ島を扱った各研究では、同反乱にかんして、同氏の研究を踏まえている。

デ・フラーフの研究は、総じて、マタラム王国やその支配層と密接に関連した形で、トルノジョヨ反乱の背景や展開について論じる。同氏が、1940年に同反乱の初期について論じた研究は、それまでの研究において別個に考察されていた、反乱の首謀者トルノジョヨと、当時のマタラムの皇太子アノムや王宮内に存在した聖職者カジョラン、グレシク近郊ギリのイスラーム聖者<sup>192</sup>、バンテン王国やマカッサル人らとの関係を、『バタヴィア城日誌』や VOC 文書、ババッド類と多くの史料を用いて考察した<sup>193</sup>。この論考に続いて、同氏が1952年に発表した研究は、1679年末の同反乱末期におけるトルノジョヨの敗走と1680

年初頭のマタラム・VOC 連合軍による彼の逮捕、マタラムによるトルノジョヨの処刑までを論じたものであった<sup>194</sup>。さらに、デ・フラーフは、1961年から1962年にかけて著したアマンクラット1世治世下のマタラムにかんする研究においても、同王の政策やその最期と密接に関係したトルノジョヨ反乱について言及する<sup>195</sup>。これらの研究を通じて、トルノジョヨ反乱が、反アマンクラット1世からマタラムに対する反乱として展開したことが、明らかになった。

その後、デ・フラーフの成果をもとに、その補足となる解釈を加えた研究が行われる。近年のナフテハールの研究も、その一つとして挙げられる。同氏は、同反乱が展開するなかで、VOCがトルノジョヨ側とマタラム側の双方から援助を求められ、会社はマタラム側を援助したことに着目する。その決定においては、当時会社の軍司令官で後に総督となり、VOCの覇権拡大の考えを持つコルネリス・スペールマン〈Cornelis Speelman〉〔以下スペールマンと略す〕の意向が強く反映されたことを指摘する。これを通じて、1680年以降のジャワ北岸地域で、VOCがマタラムに軍事力を提供し、会社はその見返りに、マタラムから戦費等に由来する負債や貿易など経済的な見返りを得る関係が構築されたと論じる<sup>196</sup>。

先行研究が明らかにしたことは、トルノジョヨ反乱が、アマンクラット1世やマタラムに対する反乱として展開したこと、そして、反乱や反乱後の展開にマタラム王宮内やその周辺のジャワ人有力者ならびにVOCが大きく関わっていたことである。これらを明らかにした両氏の研究の意義は大きい。だが、その一方で、デ・フラーフやナフテハールの研究は、マタラム王宮内や北岸地域の現地有力者、マカッサル人有力者、VOCといった、当時現地において有力であった勢力の範囲のみに議論が限定されている。有力者の間で反マタラムの大きな動きがあり、それによって反乱が展開したことは否定できない。しかし、有力者の動きをとらえるのみでは、トルノジョヨ反乱が、マドゥラ島からジャワ島に波及し、東部ジャワから中部ジャワにかけてのほぼ全ての範囲を勢力下に置き、同王国を滅亡寸前にまで追い詰めた理由を説明するものには不十分といえる。同反乱の全体像を明らかにするには、先行研究で指摘された有力者層の動きに加え、前章までで述べたような反乱が発生する以前の現地社会において当該地域住民が置かれていた状況を合わせて考える必要がある。また、有力者についても、特に華人をめぐる当時の状況を考慮すると、彼らが見せた反マタラムの動きの要因がより説得的になる。

以上の観点から、本章では、トルノジョヨ反乱が発生し展開した当時のジャワ北岸地域の社会状況に焦点を当てながら、同反乱について考察する。反乱の初期においては、北岸



地域の社会ならびに現地の華人、ジャワ人有力者や民衆の状況が反映されたために反乱が拡大し、後期においては、VOCの介入によって反乱が終結していくことで、その後の同地域社会や華人らが会社への従属度を高めたことを明らかにしたい。本章では、まず反乱直前期におけるジャワ北岸地域の社会経済状況、続いて反乱が各地に拡大した時期における展開と華人の動向、最後に反乱が終結していく時期における展開と華人が置かれた状況について、それぞれ論じていく。

## 2. 反乱直前期における北岸地域社会と華人

トルノジョヨ反乱について述べる前に、まず同反乱の直前におけるジャワ北岸地域ならびに現地の華人が置かれた状況について述べていきたい。

上述したように、ナフテハールは、1680年以降多数の華人が流入したことで、都市では華人居住区とジャワ人居住区との分離が進められ、両者の間で緊張関係が発生していたとする<sup>197</sup>。その一方、1680年以前について、都市は一部を除いてその規模や人口、住居の形態、食糧の調達などにおいて農村とほとんど変わらず、住民もほぼ全てがジャワ人によって構成されていたと主張する<sup>198</sup>。しかし、ナフテハールが論じる1680年以前のジャワ北岸地域のイメージは、実際の状況とはいくつかの点で異なっていた。これまでの章で述べてきたように、規模は異なるものの、1680年以前の時期においても北岸地域に華人が流入した結果、ジュパラをはじめとする各港市では、華人居住区が形成され、その規模は次第に大きくなっていった。地図6にあげたのは、1677年におけるジュパラの地図である。この地図を見ると、中央部分に水色の下線を引いて「2」と示されている通りがあり、華人街〈De Chineesche Straat〉と表記されている。この地図から、当時の華人街は、ジュパラの中心を占めていたことが見てとれる。

北岸地域の華人が、マタラムの集権的政策の下で、徴税や専売、貨幣鑄造といった現地の経済の中核的な部分を掌握していった結果、多くのジャワ人民衆が華人と経済的に深く関わりを持ったことは前にも述べた。1671年、ドゥマクの華人シャーバンダルであったインバサダナが、現地のジャワ人民衆を300リアルで買収して敵対する華人を殺害させたという事件が発生した。これは、経済力を背景にジャワ人を華人の争いに巻き込んだ事件である<sup>199</sup>。華人の前貸しにより、現地人の負債が増大し、彼らが華人に経済的な従属を強い

られたことは、インドネシア経済史研究上でもしばしば言及されてきた。これらによって、華人とジャワ人民衆との間に次第に緊張関係が生じていったと考えられる。

こうしたなか、1674年に東部ジャワを除いたジャワ島各地で米が凶作になった。これは、ムラピ山の噴火や地球的規模の天候不順が影響したものと推測されている<sup>200</sup>。このため、現地では、極端に米が不足して米価の高騰が起こり、飢饉へと発展した。『バタヴィア城日誌』の1673年の記事では、VOCの東インド評議会が、同年に米が豊作であったことから、マタラムから会社への間で行われる米の売買について1ラストあたり10レイクスダールデルで行われることを望み、市場価格もこれとほぼ同じになるとある<sup>201</sup>。また、後の同日誌における記事に実際の売買価格について記述が見られないことから、この年はこの価格で取引されたとみられる。しかし、米が不足し始めた1674年9月1日の記録には、ジュパラにて1ラスト15～16レイクスダールデルで、マタラム王都周辺では同25～30レイクスダールデル<sup>202</sup>、同月27日にはジュパラで同20レイクスダールデル<sup>203</sup>、12月24日には同地で1ラストあたり40レイクスダールデルに上昇したとそれぞれ記されている<sup>204</sup>。また、翌1675年4月7日の記事には、ジュパラにおける米の市場価格が1ラストあたり52レイクスダールデルにまで上昇したとあり<sup>205</sup>、その後の記録では現地での米不足がさらに深刻化したとある<sup>206</sup>。そして、11月17日には、同地で米がほとんど入手できない状況となったと記録されている<sup>207</sup>。さらに、1676年4月10日には、ジュパラでの米価が1ラスト130レイクスダールデルとなり、米を入手できない人々は木の根を食べて飢えをしのいでいると報告されている<sup>208</sup>。

この米不足の状況は、同年に多くの収穫があったため6月に一旦落ち着いた。6月2日の記録には、VOCとジュワナのシャーバンドルとの間で1ラストあたり25レイクスダールデルでの輸出契約が取り決められ<sup>209</sup>、27日の記録には、バンテンが東部ジャワ北岸地域から1ラスト50レイクスダールデルで米を入手したとある<sup>210</sup>。これらの記述から、北岸地域の市場では恐らくこの間の価格で販売されていたと考えられる。だが、8月には、後に述べるトルノジョヨ反乱にともなう戦闘や耕作者の逃亡によって土地が荒廃したために、中部ジャワを中心として再びジャワ北岸地域で米価が高騰しはじめたことが報告されている<sup>211</sup>。

このような米価高騰や飢饉によって、多くのジャワ人は大きな打撃を受けた。米にかんする税の徴収を請け負っていた華人やその輸出先となったVOCは、食糧難に陥ることはなかったが、ジャワ人民衆は食糧難に苦しんだ。しかし、この状況にもかかわらず、マタラ

ムは、自らの領域で生産された米を貿易に回すことを優先した。1675年5月31日の記事では、バンテンの船舶24隻が来航した際に現地の長官ウィラ・マカ(Wirat Maka)が古い籾米100束を10レイクスダールデルで売却し、このために現地の人々が生活に必要な米を購入できなくなったことが、記録されている<sup>212</sup>。また、上述したジュワナのシャーバンダルとVOCとの間で、米の輸出契約が結ばれたことも、その一例といえる。これらマタラムの姿勢が、同王国に対する住民の求心力を失わせたことは、想像に難くない。とりわけ、第3章で述べたように同王国のもとで米や日常品の販売を担い、現地住民との関わりを深化させた華人は、彼らの大きな不満を買うことになった。

これと並行して、木材を産出する地域でも、ジャワ人民衆と華人との緊張関係が激化した。1674年以降、製糖や造船のために森林が伐採されたことによって、現地の木材産出が極端に減少し始める<sup>213</sup>。このため、当時の木材切り出しの中心地の一つであったレンバンでは、華人が行った木材伐採現場の人員削減により、自らの職と収入の手段を失う者が発生した。また、残った者も更に過酷な労働に従事させられたために、切り出し手の不満が増大した<sup>214</sup>。このために1675年には、後者が木材切り出しの作業を放棄して、不足する食糧を補うために米作を行うという事態が生じた<sup>215</sup>。

このように、1669年以降、北岸地域においてジャワ人民衆の華人への経済的従属が非常に強まるなかで、1674年の凶作に端を発した米不足と飢饉は、北岸地域のジャワ人民衆を直撃した。そして、彼らの間における華人への不満が増大し、これが1675年からのトルノジョヨ反乱において爆発するのである。

### 3. 反乱の拡大と華人

トルノジョヨ反乱の首謀者であるラデン・トルノジョヨ(Raden Trunajaya)〔以降、トルノジョヨと略す〕は、17世紀中葉にマドゥラ島の王子として生まれた人物である。トルノジョヨは、彼の父親がアマンクラット1世治世下のマタラムの集権化政策により1656年にマタラム王宮内で殺害されたことや、その後彼自身の命も狙われるようになったために、マタラムや同王に強い敵意を抱くようになった。自らの命の危険を知ったトルノジョヨは、王宮に近接したムスリムの聖地となっていたトゥンバヤット(Tembayat)にいるラデン・カジョラン(Raden Kajoran)〔以下カジョランと略す〕のもとへと逃避する。そして、トルノ

ジョヨは、カジョランの長女と婚姻関係を結ぶことになった。

カジョランは、パネンバハン・ラマ〈Panembahan Rama〉とも呼ばれ、ジャワのイスラーム聖者の1人で16世紀に活躍したとされるスナン・バヤット〈Sunan Bayat〉の血筋を引くとされ、マタラム王家と婚姻関係を結んでいた人物である。カジョランは、1670年頃に、彼の娘婿となったトルノジョヨを、王宮内の女性をめぐる争いからマンクラット1世に対して激しい敵意を持っていたマタラムの皇太子アノムに紹介する。女性への影響力の行使は、ジャワやマレーの世界において王権と密接に関わる問題であった<sup>216</sup>。これによって、トルノジョヨとアノムは結びついた。こうしてトルノジョヨは、マタラム王に反旗を翻すことを決意した。彼は、アマンクラット1世を打倒し、アノムを新たなマタラム王とさせ、自らはマドゥラ島や東部ジャワの一部を支配し、王国の新たな宰相〈patih〉となることを意図していたという。そこで、彼は、その基地とするために出身地マドゥラ島へ向かった。

マドゥラ島へ戻ったトルノジョヨは、まず同島南部の中心地パメカサン〈Paməkasan〉で兵を集め、同地を掌握した。そして1671年にマドゥラ島全島を支配下に置き、さらなる反乱の準備を進める。当初、反乱において彼が戦力として考えたのは、マドゥラ島の兵士、そして同島に流入したマカッサル人の兵士であった。当時、マカッサル人は、マカッサル戦争においてVOC-ボネ王アルン・パラッカ〈Arung Palakka〉<sup>217</sup>連合軍によりマカッサル王国が占領されたことや、占領後に同地域を支配したアルン・パラッカによるマカッサル人に厳しい政策を避けるために、1669年以降、マカッサルからジャワ島などに多数流入した。彼らは、その航海能力を活かして、沿岸部でしばしば略奪を行った。彼らマカッサル人亡命者のうち、一部の者は、当初バンテンへと向かった。だが、この後に、バンテン王アブドゥルフアタ・アグンが、彼らが連れていた女性にも影響力を行使しようとしたのを彼らが拒んだことで、両者の関係が悪化する。

このため亡命者たちは、アマンクラット1世から自分達の居住許可を得るためにジュバラへと向かった。この動きに対して、マカッサル人による北岸地域の海賊・盗賊行為に苦慮していたマタラムは、彼らに対して同地から王都プレド〈Plered〉へ向かうことを拒否し、また彼らのジュバラへの居住も認めなかった。しかし、その一方で、アマンクラット1世と対立していたアノムが、彼らに対して東部ジャワ沿岸のデムン〈Démung〉<sup>218</sup>に居住することを認める。マカッサル人は、この地へ流入し、同地を拠点に活発に活動するようになった。その後マカッサル人は、その活動を拡大するために1675年にトルノジョヨと同盟を結んだ。こうして彼らは、ジャワ島の沿岸地域を攻撃し始めたのである。

反乱軍は、まずトルノジョヨの拠点に近い東部ジャワのトゥバンから東の地域を攻撃した。これら各地域の港は、要塞部分がアグンによる征服時に破壊され修復されていなかったために防御が弱く、反乱軍の攻撃で容易に破壊された。また、これとほぼ同じ時期に、トルノジョヨは、アグンの征服活動でマタラムの支配下に置かれながら、その後も同王国への強い敵対心を持ち続けていたギリのイスラーム指導者の後援を得るようになる。このような反乱軍の動きに際して、当初北岸地域の対応は大きく分かれた。アグンの征服活動でマタラムの支配下に入れられ、同王国に対する反発を抱き続けていたジュワナから東の地域は、反乱軍に好意的だった。他方、マタラムの影響下に既に16世紀終わりから入った西の地域は、当初同王国への忠誠を失わずにいた。反乱が拡大していく状況に際し、アマンクラット1世は、王族に軍を指揮させて反乱の鎮圧を図った。しかし、反乱軍は多くの支持者を集め、マタラム軍は、1676年10月の東部ジャワ北岸ゴゴドグ<Gogodog>での戦いで大敗する。この戦いで、第3代王アグンの兄弟であるパンゲラン・プルバヤ<Pangeran Purbaya>をはじめ、多くの王族が戦死した。

ゴゴドグの戦いの後、反乱はさらに大きく展開する。中部ならびにジャワ人有力者は、マタラムならびにアマンクラット1世への忠誠を捨てて反乱軍に加わった。この最大の理由は、トルノジョヨが制圧した東部ジャワでは、中部ジャワに比べ、米が豊かだったためである。1674年に発生したジャワ島における米価高騰の状況においても、トルノジョヨが反乱の根拠地としたマドゥラ島や、反乱軍の主力を担ったマカッサル人のジャワにおける根拠地となったデムン、またトルノジョヨ軍がジャワに侵攻して最初に影響下に置いたグレシク、スラバヤなどの東部ジャワ北岸地域は、他の地域と比べて米の入手が容易であった。『バタヴィア城日誌』における1675年のいくつかの記事には、グレシクやスラバヤが、米を入手することを望んでいたVOCをはじめとする多くの船舶を、各地から集めていたことが記されている<sup>219</sup>。また、グレシクについては、同日誌の1676年4月23日の記事に、同地では米が非常に安いという風説が流布しており、もしこの噂が本当であれば会社に購入させることが可能であると記録されている<sup>220</sup>。一方、同年9月29日の報告では、デムンが非常に肥沃な地域で、あらゆる食料が豊富に供給されていることや、この地に居住するマカッサル人が増加していること、また、トルノジョヨが居住するマドゥラ島が、非常に肥沃な土地で多くの米を生産することができる<sup>221</sup>。さらに、同年12月29日の記事には、マドゥラ島の稲作地帯はジャワ島のように〔反乱の戦乱で〕荒廃されていないと記述されている<sup>222</sup>。これらのことは、一方で反乱軍の兵士の食料を確保することで彼らの

士気を高めるのに非常に有効であり、他方では凶作と米価高騰から食料の確保が難しくなり飢饉に苦しんでいた他のジャワ北岸地域住民やその有力者を大いに引きつけるものだった。

これにより、トルノジョヨ軍は、チルボンから東部のジャワ北岸地域のうち、マタラムの王都に近接しその影響が強かったジュパラとトゥガルを除いた北岸地域の全てを、自らの影響下に収めることができた。反乱軍の勢力下に入った地域の中には、反乱軍に武力で制圧されたところもあったが、多くの地域は現地の支配者が自ら進んでトルノジョヨと同盟を結び、その支配下に入った。こうして広い地域を影響下に置き、マタラムに対して圧倒的に優位に立ったトルノジョヨは、パネンバハンと王<raja>の称号を得て、自らはマジヤパイト王家の血筋を引く者であると主張した。勢力を増した反乱軍は、1677年、マタラムの王都プレッドを攻撃し、陥落させた<sup>223</sup>。その際、アマンクラット1世は王室の宝器を王宮に残して都を去ったことから、同王国が所有する宝器も反乱軍の手に渡った。プレッドを追われたアマンクラット1世は、反乱軍から逃れて島内を放浪するが、老齢で病身の同王はその行程に耐えられず、同年7月に死去した。

このように、トルノジョヨの反乱軍は、急速に東部ならびに中部ジャワ北岸地域のほぼ全域にまで勢力を拡大し、マタラムの王都を陥落させるに至った。先行研究は、トルノジョヨ反乱がこれらの地域において大規模に拡大した背景として、現地に存在する伝承とそれにもとづく現地住民の期待があったことを指摘する。ジャワ暦1400年にマジヤパイトが滅亡したことから、当時、現地では、同暦における世紀転換期には現在の王室が滅亡し新たな王室が誕生するとの伝承が存在していた。そして、1677年の3月は、ジャワ暦の1600年にあたっていた。さらに、当時ジャワでは、不吉とされる月食もしばしば見られていた。これらの出来事が、当時の現地住民にとって、マタラムやその王であるアマンクラット1世が滅びる凶兆として映ったとされる<sup>224</sup>。ここで検討したトルノジョヨ軍が凶作のなかで豊かな米の産地を勢力下に有したことは、アマンクラット1世に代わる新たな支配者として人々に期待されたことを、さらに説得的にしてくれる。

また、先行研究では直接言及されていないが、反マタラムを掲げたトルノジョヨ反乱において、反乱軍は当初から華人を攻撃対象としていた。前節では、北岸地域の住民と華人との間の緊張関係が高まっていたことを明らかにした。これを背景にして、反乱がジャワ北岸の広域に拡大した1676年、反乱軍の華人襲撃が特に顕著となる。1676年に見られた華人への攻撃では、当初、主にマカッサル人による放火や誘拐、略奪などが行われた。こ

の年6月9日にジュバラからバタヴィアに送られた書簡では、VOCとの和平交渉のため訪れたマカッサル人使節に対して会社が出した8つの要求書のなかに、全ての華人を彼らの財産とともに引き渡すことを求める条項が見られる<sup>225</sup>。加えて、8月31日にVOCからマカッサル人指導者に対して出された要求書のなかにも、マカッサル人によって連行されたマタラムの領内に居住した華人について、同じ状況におかれたジャワ人や奴隷、女性、子供らとともに元の居住地に戻すことを求めた条項が存在する<sup>226</sup>。マカッサル人の襲撃を受けた北岸地域港市の数は、同年4月にはグレシク、レンバン、パスルアンをはじめ20を超えていた<sup>227</sup>。これら襲撃された港市のほとんどで、華人が略奪や放火、誘拐の被害にあっていたと考えられる。『バタヴィア城日誌』9月20日の記事には、ジュバラにおいて華人居住区の大部分が焼失した火災が、マカッサル人によって引き起こされたものであるとされている<sup>228</sup>。マカッサル人の反マタラム活動で、まず華人がターゲットとされたのである。

1676年に入って頻繁に放火や誘拐、略奪の対象とされたジャワ北岸地域の華人は、その多くが他の地域へと避難することとなった。ジュバラからバタヴィアへ送られた1676年8月20日付の書簡には、マドゥラ人〔トルノジョヨ〕の助けでマカッサル人が東部ジャワの支配者になった一方、多くの華人はバタヴィアやバンテンに避難したため、今やジュバラでは取引ができない状況であると記述されている<sup>229</sup>。

多くがバタヴィアやバンテンに避難したジャワ北岸地域の華人であったが、現地に残った者も存在した。しかし、北岸地域にとどまった華人に対して、反乱軍の攻撃はさらに激しくなる。『バタヴィア城日誌』1676年12月2日付の書簡には、北岸地域では至るところでマカッサル人が攻撃を行うようになり、特に多くの華人を容赦なく殺害したとある。そして、北岸地域で殺害された華人の中には、ジュワナのシャーバンドルで、上述したように米不足の状況でVOCに米を販売していたツーコ〈Tsoeko〉が含まれていた<sup>230</sup>。

これらの1676年の反乱軍による華人襲撃や華人虐殺は、マカッサル人のみでなく、ジャワ人も関与していたと考えられる。1676年、特にその後半に入ると、マカッサル人を中心とする反乱軍にマタラムから離反したジャワ人も加わっていったことが、VOC文書に記録されている<sup>231</sup>。このように反乱軍に加わって華人を襲撃したジャワ人が存在した一方、彼らを統治する現地首長らの多くは、彼らの襲撃を止めることはなかった。

第3章から前節までで指摘したように、17世紀中葉以降、ジャワ北岸地域において華人は、マタラムによる集権化政策や貿易独占政策に協力して、北岸地域の経済の大部分を掌握し、現地のジャワ人民衆を経済的に従属させていた。加えて、現地が米不足になった状

況でも華人は、マタラムの政策の下で VOC に米の売却を続けていた。1676 年 6 月に VOC に対して米の売買契約を結んだジュワナのシャーバンダルが、11 月に襲撃を受け殺害されたツークだったことは、彼らの不満がどこに向けられたかを良く示している。前章で述べたようにマタラムによる集権的政策のもとで北岸地域の経済を掌握したことを通じて、ジャワ人の中には現地経済を司る華人のイメージが生じた。こうしてトルノジョヨ反乱では、彼らが打倒されるべき対象となったのである。

一方、本来現地の治安を維持するために襲撃を抑止すべきはずの現地首長らジャワ人有力者も、経済活動から排除されていくなかで、同王国に重用され現地社会に深く関与し始めた華人に対し、反感を有した。その結果、当該地域のジャワ人有力者は、反乱の拡大にともない反乱軍側についた。このために有力者も、反乱におけるジャワ人民衆の華人襲撃を黙認したのである。

#### 4. 反乱の終息と華人

トルノジョヨ反乱の拡大が、この時期までの 17 世紀ジャワ北岸地域における社会変化の帰結であったのに対して、同反乱が終息へと向かう展開は、その後における同地域における社会変化の布石となるものだった。

1675 年以降急速に拡大していったトルノジョヨ反乱であったが、他方で、1676 年後半以降これと並行して反乱に対抗する動きも起こり始めた。ここで重要な役割を果たすことになったのが、VOC であった。VOC は、1620 年代にマルク諸島の各王国を征服しその後も現地における反乱を鎮圧したことや、アグンによる二度のバタヴィア攻撃を退けたこと、1660 年代にはマカッサル戦争を通じてマカッサル王国を征服したことから、1670 年代には東南アジア海域世界において強力な軍事力を誇示するに至っていた。ジャワ島の各勢力も、当時の会社の軍事力を強く認識していた。このため、トルノジョヨ反乱が発生した際には、トルノジョヨ側、マタラム側ともに、VOC に対して自らへの援助を求めたのである。

トルノジョヨ反乱が、反乱派に優位に傾いていた 1676 年 11 月 7 日、2 通の手紙がバタヴィアに届く。1 通はマタラムの王子から、もう 1 通はトルノジョヨからである。前者の手紙には、もはやマタラムが頼る先は VOC しかないとし、会社がマタラムに援助をおこなった見返りには、北岸地域における支配権と経済的利益の保証を約束するとあった。他方、



後者の手紙でトルノジョヨは、東部の北岸地域は全て自らの支配下に入っていると宣言し、会社に対し大砲と弾薬の貸付を要求した。両者の手紙を受け、VOCは自らの利権を守るために、ジャワ北岸地域へ軍隊を派遣することを決定する。但し、VOCは、経済的利益を追求することを最優先する貿易会社で、現地の政治には介入しないとしていた。

当時会社の総督であったマーツアイケル<Maatsuyker>は、反乱に際し、北岸地域で大規模に活動していたマカッサル人の活動を抑えるためのみに、軍を派遣しようとしていた。しかし、マカッサル戦争において軍功を残し、軍を率いる司令官スペールマンは、マーツアイケルとは異なり、VOCはアジア各地に積極的に介入して、現地の王国を会社の影響下に置くべきであるという考えを持っていた。そして彼は、マタラム、トルノジョヨ、どちらに与しても、反乱が終結した後に、会社ならびにオランダ本国の利益になることを考えていた。

会社やマーツアイケルと異なる意見を持っていたスペールマンであったが、まずは会社の指令に従う形で両者との交渉役としての任務を負う。まず、彼が交渉したのは、トルノジョヨであった。交渉の中で、トルノジョヨ側は、VOCに対し、会社が反乱軍に協力し、マタラムを打倒して自らが新たな王国を創始した際には、北岸地域からの貢納品をはじめ莫大な経済的利益を会社に与えることを約束した。しかし、VOCと反乱軍側との交渉は最終的に決裂する。その最大の要因は、トルノジョヨ軍と共に活動していたマカッサル人の掃討への協力を会社が要求したのに対し、反乱軍側がこれに応じなかったことである。当時、マカッサル人によるジャワ北岸地域への攻撃がVOCの貿易活動に深刻な影響をもたらしていたため、会社側は、彼らを排除することを望んだ。だが、トルノジョヨにとってマカッサル人は自らの兵力の中心を担っており、彼が彼らを排除することは不可能であった。

こうして反乱軍側との交渉が決裂した後、VOCは、1677年2月にアマンクラット1世と1646年の条約を更新する形で同盟を締結した。マタラムは、VOCがマタラムを支援する代わりに同王国は会社の軍事費をはじめ全てを負担することや、会社に対して関税を免除するなどの譲歩をVOCに行った。両者の交渉が成立した要因には、マタラムとVOCがともにマカッサル人を排除することを望んだこと、加えて、会社が王朝存亡の危機に瀕した同王国からより多くの譲歩を引き出すことができたことが挙げられる。この交渉締結によって、後にマタラムの王国財政を圧迫するVOCへ戦費負担が始まる。

その後VOCは、スペールマンの意向のもと、アマンクラット1世が死去した後に王位を継いだアマンクラット2世〔位：1677-1703〕とも交渉を行い、1677年7月には、2月の条

約をもとに両者の同盟が強化される。だが同王は、VOC の影響力が拡大することを警戒していた。会社側によるアマンクラット 2 世をトゥガルからスペールマンが自らの本拠を置いたジュパラに移す提案を、同王は、自らの意向に反するものとして 9 月まで拒否し続ける。しかし、この段階で、マタラムが抱える会社への戦費の負担は相当な額になっていたことに加え、同王国は、この支払いを履行できるだけの資産を持っていなかった。このため、同年 10 月と翌 1678 年 1 月に、両者の間で以下の合意が交わされた。

- (1) バタヴィアにおける VOC の領土をインド洋岸まで認める
- (2) マタラム王の戦費完済までジャワ北岸・東岸の都市・海岸における VOC の保障占領を認める
- (3) スマランの割譲
- (4) 関税免除
- (5) VOC による綿布、アヘンの輸入および米買い付けの独占
- (6) VOC によるジュパラとその周辺で産する砂糖の買い付けおよび輸出の独占

マタラムが VOC に提示した反乱鎮圧に際しての見返りは、以後マタラムを経済的に利用しようとするスペールマンの意図と合致するものであった。VOC がマタラム側につくことにかんして、総督マーツァイケルは、会社は現地の政治に介入すべきでないとの考えから最後まで抵抗していた。ところが、1678 年に彼が死去すると、次の総督にスペールマンと同じ意図を持つフーンスが就き、スペールマンも貿易事務総長<directeur-generaal>に就任した。これによって、会社によるマタラム援助の方針は決定的になった。こうして、VOC の軍は内陸部へと進軍する。

一方、この前後、トルノジョヨ側では、彼がマタラムの後継と称したことで、アノムが反乱軍から離れた。また、略奪ならびに海賊行為を継続するマカッサル人勢力をトルノジョヨは統制しきれなかったため、反乱軍の組織が崩れ始めていた。この状況において VOC がマタラムを支援し始めたことで、マタラム・VOC の連合軍が徐々に形勢を逆転していく。VOC 軍は、1677 年にスラバヤを攻撃し陥落させた。このために、トルノジョヨはクディリ<Kediri>へ逃れた。また、翌 1678 年にはマタラム・VOC に、アルン・パラッカ率いるブギス人兵士が加わり、連合軍はさらに攻勢を強める<sup>232</sup>。そして、同年 11 月 25 日、連合軍は、クディリを占領した。そして、このクディリ占領によって、形勢は完全に逆転する。このときトルノジョヨは、アルン・パラッカと同盟を結ぼうとしたが失敗する。トルノジョヨは、さらにクディリよりブリタル<Blitar>、マラン<Malang>、バトゥ<Batu><sup>233</sup>、ンガンタン

〈Ngantang〉、アンジャスマラ〈Anjasmara〉山<sup>234</sup>へと敗走した。また、トルノジョヨが敗走しているのと同じ時期の1679年9月には、反乱を後援していたカジョランがVOC軍に殺害される。そして同年末、トルノジョヨは、同山で捕らえられ、翌1680年初頭にアマンクラット2世によって処刑された。その後、同年4月には、会社の軍が、ギリの宗教指導者を親族らとともに殺害した。これらによって、反乱軍側についていた各地の現地首長は再びマタラム側に戻り、同王国と同盟関係を結んだ。こうして、トルノジョヨ反乱は、この時期にほぼ終結することになったのである<sup>235</sup>。

北岸地域における華人の状況を考えるうえで、この反乱終息期の1677年から1678年にかけてVOCとマタラムの間でなされた合意と、1678年の会社における総督と貿易事務総長交代による方針転換は、重要である。この双方により、VOCは、その後のジャワ北岸地域や現地の華人に少なからぬ影響力を行使することになるからである。

VOCは、この時期以降、自らがマタラムから得たスマランをはじめ周辺地域も含めた経済状況について調査を行い始めた。前章で論じた、ジャワ北岸地域の華人によって行われていた船舶の購入・販売、華人により取引された商品にかんする関税の徴税請負、また塩の専売、竹の専売、アラク酒の製造ならびに販売、ピチの鑄造、華人の人頭税の徴収などは、このときの調査を通じて明らかになった。また、ジャワ人によって行われた税徴収についても、同じ調査で明らかにされている。これらの調査結果にもとづき、1680年以降の北岸地域における会社主導による経済政策が形成されていくのである。

## 第6章 1680年以降のジャワ北岸地域における華人の境遇の変容

### 1. 序

ジャワ北岸地域の華人をめぐる状況は、1680年までとそれ以後とで大きく変化した。この変化は、本稿が第3期とする当該時期における現地への華人の流入の更なる増加と、北岸地域においてVOCや現地の首長が現地へ強い影響力を行使し始めたことが複合的に結合した結果だった。会社や首長は、現地の華人を利用して利益をあげ、影響力を行使することができた。しかし、1680年以降の現地の華人社会では、富裕化と貧困化の二極化が進行し、これが1741年の華人反乱へとつながっていく。

1680年以後のジャワ北岸地域における状況については、ナフテハールが詳細に描いている。同氏は、1)VOCがトルノジョヨ反乱鎮圧の見返りにマタラムから北岸地域の経済的利権を得たことで現地に強い影響力を行使するようになったこと、2)会社に多額の負債を抱えたマタラムは、北岸地域からの収益を返済に充てるために北岸各地の首長に商業活動を認めたこと、3)さらに会社や首長が行った商業活動をはじめとする経済活動に、現地の華人が大きな役割を担ったこと、を指摘する。その結果ナフテハールは、同時代の北岸地域における華人にかんして、混血者であるプラナカン(peranakan)と新規来航者であるトク(totok)の間で発生した不和や、氏族間の競争、有力者層と貧困層との格差、性別の不均衡が、現地で華人コミュニティ内の分裂を促進し、緊張関係を生んだとする。

もっとも、同氏が1680年以降に見られたと指摘する、マタラムや現地の首長さらにVOCのもとで華人が現地の経済活動を行う例は、第4章までで論じたように同年以前にも見られた。前章で指摘したように、トルノジョヨ反乱では、マタラムの集権的政策のもとで自らに代わって現地の経済を掌握していく華人を快く思わず、現地首長は、ジャワ人民衆やマカッサル人による華人襲撃を黙認した。しかし、現地首長は、反乱が終結した後には再び華人に徴税や日常品専売などの経済活動を委ねていく。またVOCも、経済活動を進展させるうえで華人を活用した。このため、トルノジョヨ反乱以前から活動していた華人にとって、新体制は歓迎すべきものとなった。一方、1680年以前、特にトルノジョヨ反乱が発

生ずる以前については、VOC 文書において華人社会内部での大きな分裂やこうした緊張関係が存在する記事は見られない。北岸地域の華人間における緊張関係は、1680 年以降に顕在化したと考えられる。

本章では、当該時代の現地における華人が置かれた状況や彼らの活動を検討し、トルノジョヨ反乱後のジャワ社会における華人がおかれた境遇の変遷を考察する。

## 2. 第 3 期におけるジャワ北岸地域への華人流入

トルノジョヨ反乱が終結した 1679 年以降、ジャワ北岸地域への華人流入は、さらに拍車がかかった。ナフテハールは、以前は華人が 4 人しかいなかったプカロンガン<Pekalongan>が 1679 年までに 20 数家族存在するようになった例をとりあげる。トルノジョヨ反乱が終結し、VOC が北岸地域において影響力を行使するようになったため、同年から 1680 年まで現地へ多数の華人流入があったと主張する。但し、前章で述べたように、同反乱においてジャワ北岸地域の華人がジャワ人の襲撃を受けたことから、多数がバタヴィアやバンテンに避難した事実を考慮すれば、この時期に流入した華人の多くは反乱中の避難先から戻った者であったと考えるのが妥当である。

一方 1681 年以降、彼らに加えて、中国から北岸地域へ流入する華人が多数見られるようになった。清朝は、王朝の交代に際して明の遺臣が起こした三藩の乱を鎮圧し、これに呼応した台湾の鄭氏勢力を平定したことを背景として、1661 年に発令した遷界令を 1681 年に解除し、1684 年には展界令を発令して中国からの海外渡航を認めた<sup>236</sup>。清朝は元々毛皮をはじめとする貿易に基づいて発展した政権であったため、明朝と比べて貿易に積極的な姿勢を持っていた。但し、同時に清は、対外貿易について厳しく監督した。清朝は、海外との貿易を管理するために、華亭県に江(江蘇)海関〔のち上海に移転〕、寧波に浙(浙江)海関、厦門に閩(福建)海関、マカオに粵(広東)海関をそれぞれ置いた。そして、各海関では、商船入港時に船鈔と呼ばれる入港税と貨物に課せられる貨税がそれぞれ徴収された<sup>237</sup>。

加えて、清朝は、海外に渡航する船舶についても厳しい規制を加えた。ブリュッセイは、同王朝が、当時の船舶建造の許可を富裕かつ王朝が信頼する者にしか与えなかったことや、船舶に船首部分の塗装や文字の色でその所属地を示させたこと、船舶の装備や乗組員の数に制限を加えていたことを指摘する<sup>238</sup>。三藩の乱の鎮圧を通じて、鄭氏をはじめとする海

外貿易を通じて大規模となった勢力を清朝に服属させたことで、対外貿易の管理が行いやすくなった。

この体制のなかで、中国におけるジャワへの渡航の主な基地となったのは厦門であった。ブリュッセイは、1686年に中国にバタヴィアに到着した11隻の船舶のうち8隻が厦門から、残る3隻が他地域から渡航したものであり、全11隻で800人以上の華人乗客があり、多数の中国商品が積載されていたと述べる。同時期における中国からジャワ北岸地域への華人流入にかんしても、ほぼ厦門からの渡航が中心であったとみられる。現地への華人流入は、以前と同様に、中国からの直接流入やバタヴィアを経由した形であったと考えられる。中国からバタヴィアへ来航した華人船の数は、1681-1690年には年平均9.7隻、1691-1700年は同11.5隻、1701-1710年では平均11隻、1710-1720年には年平均13.6隻、1721-1730年は同16.4隻、1731-1740年では平均17.7隻と大幅に増加しており、特に1731年から1740年の年平均来航数は、1681年からの10年間と比べて2倍近くになっていることがわかる<sup>239</sup>。バタヴィア—ジャワ北岸地域間を航行していた船舶にかんしては、ナフテハールが1720年頃のスマランをとりあげ、約150隻の非VOCの船舶が同地とバタヴィアとの間で往来していたことを指摘する<sup>240</sup>。また同氏は、ジャワ北岸地域へ華人流入について、特に1695年から1710年にかけて多くが流入し、約2000人の華人が北岸地域で登録されていたことや、1740年には約5000人の華人男性が存在していたと論じる<sup>241</sup>。

中国から流入した華人が自らの家族を伴った事例は、一般に19世紀終わりになるまでほとんどみられない。大多数の移住者が男性で、単身で来航し、当該地のカピタンの差配下に置かれた。彼らの多くは、ジャワ人ら現地人女性と結婚した。1680年以前の華人と同様、イスラームに改宗し、中国名と現地式の名の双方を持つなど現地の文化を受容した者も少なくなかった。他方、一部の華人の間では、華人同士の婚姻や養子縁組を行って、氏族を形成した。これらの氏族の間では、シャーバンダルやカピタンに就くことをめぐって競争や対立関係が現地で見られはじめた<sup>242</sup>。華人間の競合が、以前よりも激しくなりだしたのである。

### 3. 首長とVOCの影響力拡大と華人

1680年以前のジャワ北岸地域における社会経済状況と同年以降との大きな違いは、後者

の時代に見られた VOC と首長の影響力拡大である。

1680 年以降同王国は、アマンクラット 1 世の進めてきた華人を重用し現地首長を排除するかたちの集権化政策を、VOC の軍事力を利用しつつ統治する形態に変更することを余儀なくされた。その一方で VOC は、見返りとして同王国から多くの経済的な権益を得た。VOC が得た経済的権益うちマタラムからの戦費については、VOC への支払額が 250000 レアルであったとされる。この額が高額で王国の負担が重かったことから、特に 1684 年以降支払いをめぐって両者の間にはしばしば緊張関係が発生した<sup>243</sup>。マタラムは、VOC と協定を結びつつも、会社の代わりに軍事的協力を得られる勢力を探し、VOC と距離を保とうとした。その一環として同王国は、1685 年に会社と対立して離反したバリ人のスラパティ〈Surapati〉が率いる勢力を取り込んだ。だが、会社に対して激しい敵意を持っていた彼は、1686 年に VOC から派遣された使者フランソワ・タック〈François Tack〉の使節団を襲撃し、タックを含め使節団の多くを殺害し、東部ジャワへと逃亡した。

このために、マタラムと VOC との間の緊張関係が激化した。しかし軍事面では既に VOC 優位が明らかであったため、最終的にマタラムは VOC と和解した。その後同王国は、VOC に軍事的支援を受ける代わりに、VOC に米や現金でその見返りを支払うという関係を再構築した。VOC の勢力を背景として、マタラムは、不満を持つ首長らを力で封じ、18 世紀に王国内の集権化に再び成功する<sup>244</sup>。だが、このことは同時に、当該時期の北岸地域で VOC の影響力が増すことで、マタラムが VOC に供与する現金や米を実質的に供給する現地の首長の影響力も拡大することも可能にした。

1680 年以降、ジャワ北岸地域の首長は、実質的にマタラムが任命する者のみとなり、追認された以前からの現地首長であった者と新たに同王国から任命された者で構成されていた。彼らは、米と現金を確保する必要に迫られたマタラムに一定の貢納をすることを条件に、経済活動を行うことができた。こうして彼らは、従来からの米や砂糖、木材の輸出を進展させた。このうち米については、特にドゥマクで彼らによる仲介を嫌い農民から直接買い付けようとする VOC との間で激しい競争が見られた。首長らは、華人ネットワークを利用した会社の直接買い付けが行われたことで輸出の独占に失敗したものの、輸出を継続して大きく利益をあげていた<sup>245</sup>。砂糖にかんしては、VOC が投資を行ったバタヴィア周辺地域からの砂糖輸出を保護するために、会社は中部ジャワ産の砂糖の購入をやめ、現地に砂糖輸出の禁止を命じた。しかし、中部ジャワの首長や製糖所は、VOC が干渉しない比較的 low 品質な砂糖生産に転換し、対マラッカを中心にアジア域内で販売することで利

益をあげた<sup>246</sup>。また木材については、特にジュパラやドゥマクにおいて、現地首長が輸出で大きな利益をあげていた<sup>247</sup>。

これらに加えて、VOCは、藍〔乾燥藍〕やコーヒーの栽培を北岸地域に導入しようとした。藍〔乾燥藍〕は、17世紀末に同製品のヨーロッパ市場での価格高騰を受けた会社が、それまでのインドのグジャラート産やコロマンデル海岸産の購入から、ジャワ島での栽培と生産・加工への転換を意図して導入された。VOCは、当初この導入を単独で試みたが失敗し、1ポンドあたり5/8レイクスダールデルで買い取るという条件で首長に協力を提案した。これに同意した彼らの協力のもと、藍は、1709年に改めて栽培と生産・加工が着手され、その生産が急激に上昇した<sup>248</sup>。一方、コーヒーも、1709年に中部ジャワ北岸地域に紹介される。こちらも、当初は栽培や生産はうまくいかなかったが、1720年代半ばにプカロンガンの首長ジャヤニングラット<Jayaningrat><sup>249</sup>が当地での栽培に成功して莫大な利益を得たことが契機となり、栽培において労働集約を必要としないこと、VOCが1ピクルあたり20レイクスダールという高額で買い取ったことから、藍と同様に首長主導のもとで、栽培ならびに生産を行う地域が急激に拡大した<sup>250</sup>。

こうした北岸地域製品の生産現場では、第3章で述べたようなジャワ人が多数働いており、また加えてこの時期には華人の労働者も多数働くようになった。生産を主導する首長は、この時期でも、前述したように労働者への住居や日用品供給の手配を行った。日用品の販売には、華人が重要な役割を担っていた。

このように一方で現地の統治を行いながら、他方で活発に経済活動を行う首長を、ナフテハールは「政治企業家」〔political entrepreneurs〕と定義する<sup>251</sup>。政治企業家である彼らは、その多くが華人の商業ネットワークを活用した。第4章まで述べてきた米、木材、砂糖の生産や貿易や人頭税徴収に加え、水利施設の建設・管理や関所での通行税徴収の活動の多くを現地の華人に委ねた。

この結果、華人系住民の中から、自ら首長となった人々も数多くみられた。プカロンガンやバタン、ウィラデサ<Wiradesa>、ルンバラワ<Lembahrawa><sup>252</sup>、シダユ<Sidayu>の首長となった上述のジャヤニングラットの一族や、スマランのアストラウィジャヤ<Astrawijaya>らのように、華人混血者が首長となったケースもしばしば誕生した<sup>253</sup>。このうち前者のジャヤニングラット1世は、彼の父親から引き継いだ当時のマタラムの王都カルタスラ<Kartasura>とスマランを結ぶ道路の通行税の徴収で高めた経済力を基盤として、同王国の役職に就いた後にプカロンガンの首長となり、西部北岸地域の支配者が持つ



ウダナ・キルン(wedana kilen)の称号を得た。また彼は、通行税の徴収だけでなく、上述したコーヒーの栽培・生産にはじめて成功し、藍の栽培・生産にも大きく関与していた<sup>254</sup>。さらにジャヤニングラットは、米や木材の貿易にも関わった<sup>255</sup>。彼は、これらを通じて、莫大な利益をあげた。また彼だけではなく、ジャヤニングラットの一族もまた、パタン、ウィラデサ、ルンバラワ、シダユの首長となる。そして彼らは、当該地域に対して様々な税を課すことで更に多くの利益をあげ、その影響力を強めた。

こうしてマタラムは、VOCに提供する資金や米などを確保する必要から、1680年以降もより直接に多くの利益を得ることができる華人系有力者を首長に任命し、重用した。そして、首長となった華人系有力者は、政治企業家としてさらに活発に経済活動を行った。

しかしながら、こうした政治企業家、特に華人系の政治企業家の活動をあらためて見ると、米および木材貿易への関与、砂糖と藍ならびにコーヒーという品目の違いこそあれど商品作物の導入やその貿易への関与、通行税の徴収と、1680年までのジャワ北岸地域で見られた華人有力者による活動と多くの部分で共通している。そして、首長とシャーバンダルという違いはあるが、マタラムが彼らに王国の職を与えて、自らの統治に利用していた点もまた共通している。その意味において、前章までで論じた17世紀にマタラム王国の政策のもとでジャワ北岸地域の経済活動を担った華人も、政治企業家であったといえよう。これらを考慮すれば、政治企業家の存在は、ナフテハールが主張する18世紀ではなく<sup>256</sup>、17世紀後半には既に顕著になっていたと考えるべきである。18世紀の政治企業家は、彼らが17世紀までに行っていた活動を拡大させて、さらに強い影響力と莫大な利益を得たのである。

華人を重用するケースは、VOCでも見られる。VOCは、1680年以降ジャワ北岸地域での影響力を拡大し、現地においてマタラムよりも優位な立場に立った。当初VOCは、北岸地域において大きな力を持っていた華人を非常に警戒していた。1677年にスペールマンが、彼らを利用せずに現地の支配を行おうとしたことは、この考えを反映したものと見える。しかし、彼の試みは、華人有力者達の激しい抵抗に遭った。結局VOCは、1679年までに現地の華人有力者をカピタンとして任命することになった。会社は、ジュパラ、グレシク、スラバヤ、スマラン、トゥガルで、現地のカピタンに当該の都市や周辺地域の華人居住区の管理や人頭税の徴収を管轄する権限を与えた<sup>257</sup>。またVOCは、ジュパラの華人が会社の管理下に置かれるとの公告を1680年1月19日に発布した<sup>258</sup>。さらに会社が直轄地としたスマランの首長には、上述したアストラウィジャヤを任命した。VOCは、現地の経済の多

くを掌握している彼らと競合するよりも、むしろ利用して自らも大きな利益をあげようとしたとしたのである。

だが他方で、ジャワ北岸地域の華人は、VOC から会社の意に沿うよう統制も加えられた。1680 年以降中国から北岸地域へ流入した華人有力者同士の争いに、VOC が介入したのはその一例といえる。1720 年代、リン・ペーンコ〈Lim Peen-ko〉という名の華人<sup>259</sup>と当時ジュパラの製糖業を基盤に北岸地域で大きな経済的利権を持っていたクエ・アンコ〈Que An-ko〉との間に、スマランのシャーバンドルの地位をめぐる激しい争いが発生した。この争いに際して、VOC は、会社とより結びつきの強かった後者の訴えを認め、1728 年に前者を同地から追放した<sup>260</sup>。また、会社がカピタンを任命したこと自体も、ジャワ北岸地域の華人が、1680 年以降役職の任命から当該地域からの追放に至るまで VOC の影響を受けたことを意味した。

また北岸地域の華人は、現地での経済活動においても、VOC の影響をそれまで以上に受け始める。当該時期における北岸地域からバタヴィアへの貿易量は、トルノジョヨ反乱後の混乱期の 1680 年から 1705 年の時期に急速に減少したのち、1705 年から 1730 年の間に急速に回復する。しかし、この回復は VOC による貿易のみによってなされたもので、それ以外の勢力による貿易は、当該時期全体を通じて衰退した<sup>261</sup>。VOC は貿易を拡大するなかで、インド系ムスリム〈Mooren〉や他のヨーロッパ人〔特にデー人〕との競争で苦戦していたため、1680 年以降バタヴィアに移住してきた華人を利用して、アジア貿易で VOC が卸した商品を華人に小売させた。その結果、華人は一方で会社に保護してもらい、他方会社が華人や彼らの貿易ネットワークから利益を引き出すという関係が形成された。但し会社は、貿易における独占権を強めるために、VOC が発行する貿易許可証を持った者のみに貿易を認め、海上での密貿易の取締りを強化し、許可証を持たない華人に対し、ジャワ内陸部への立ち入りを制限した<sup>262</sup>。こうして VOC との関わりを持たない華人は、排除されたのである。

これらに加えて、1680 年以降、VOC によってオランダの貨幣ドゥベルチェ〈dubbeltje〉がジャワ北岸地域に導入される。ドゥベルチェは、この時期に流通したオランダの銀貨で、それまで現地で流通していた銀貨リアルと銅・鉛・錫合金の貨幣ピチとの中間の価値をもつ。ナフテハールによれば、リアルとの交換比率が導入当時には 1 ドゥベルチェ = 1/24 レアルで平均 1 ドゥベルチェ = 1/30 レアル、ピチとの交換比率は時期により大きく異なり 1 ドゥベルチェ = 25 から 250 ピチであったという<sup>263</sup>。この貨幣は、VOC がマタラムに対して

ジャワ北岸地域をはじめとする同王国の領域における流通を認めさせ、現地に導入された。導入当初こそなかなか当該地域で流通しなかったドゥベルチェであったが、上述したリアルとピチの中間の価値を持つという利点を背景に、次第に現地で受け入れられる。その結果、マタラムも、1709年には王都カルタスラの VOC 要塞を維持する費用の 3分の1を支払い、その後 1713年にはその全てをドゥベルチェで支払うようになった。また他方では、現地においてドゥベルチェの価値が上昇し、この銀貨を偽造した貨幣も鑄造された<sup>264</sup>。そして、この貨幣の導入と流通の拡大には、現地社会と VOC とを仲介する華人が大きな役割を果たしていた<sup>265</sup>。

その後、ドゥベルチェの現地における流通量は、偽造貨幣の登場や貿易を通じた海外への流出があったために、大きく伸びることはなかった。だが、この銀貨が現地において受け入れられ、その貨幣価値が上昇したことは、ジャワ北岸地域の華人の経済活動にとって非常に重大な意味を持つ。ピチと比べて貨幣価値の高いドゥベルチェが導入されたことで、貨幣運搬時の負担が従来と比べて大きく軽減された。これを背景に、華人は、さらに内陸に入って商業や生産などの経済活動を行うことが可能となったのである。

1680年以降、マタラムから首長に任命されたことにて現地で勢力を拡大した首長や VOC と親密な関係を構築することができた華人有力者は、経済活動をさらに拡大することができた。但し、その一方で前述したように中国からの大規模な流入が展開する状況下で、そのような機会を得ようとする華人間の競合も、激しくなっていた。

#### 4. 華人貧困層と華人反乱

清朝の遷界令撤廃ならびに展界令発令に端を発してジャワ北岸地域に中国本土から多くの華人が入り込んだ一方、同地域の経済において VOC の統制が強まり主要な部分から排除される者が現われたことで、1680年以降現地では、華人の貧困層が少なからず生み出された。華人貧困層が 1680年以前にも存在していた可能性は、全く無いとはいえない。だが、1680年以前は、北岸地域の華人の人数が比較的限られていたため、彼らの多くが経済活動を拡大できる可能性を有した。そのため、華人貧困層の存在は、同年以降に顕在化したと考えることができる。

華人下層者は、主に製糖工場や製材所をはじめとする、輸出品の加工現場での作業に従

事していた。華人は、ジャワ人など現地人に比べると比較的高い技術を持っていたため、労働環境が最も苛酷だった生産現場よりも生産物加工の現場で多くの者が働くことができた。しかし、華人労働者を取り巻く状況は、1680年以前と異なった。彼らは、作業場所あるいは経済的な理由から都市に住むことができず、周辺の村落に居住することを余儀なくされた。また新来者の増加により、華人労働者は、雇用者のもとで以前よりも厳しい労働環境に置かれた<sup>266</sup>。

また、華人の商業活動に対して不満を抱いたジャワ人有力者の存在も、上述の動向に拍車をかけた。この時期、VOCは、従来から行われていたマタラムからの贈与や直接買い付けによる米の入手に加え、華人の貿易ネットワークを使って米を入手することを意図して、北岸地域の商業を営む華人有力者との間で米買い付けの契約を結んだ。これにともない、現地では、有力者に雇われた中小の華人商人が、内陸の米生産地域や市場において米を買い占め始めた。このようなVOCやその下で活動する華人に対し、会社への米販売によって利益が減少した現地の首長はじめジャワ人有力者の不満は大いに高まった。その結果、現地首長達は、VOCを含むヨーロッパ人や華人を米買い付けから排除をし始めた。さらに1737年頃からドゥマクの首長の影響下にある人々によって、同地の華人に対する襲撃事件や彼らの家屋に対する放火が引き起こされた。またジュワナやパティ周辺では、1730年代後半に盗賊による華人の襲撃が起き、ジュパラでは数ヶ所の製糖所が襲われる対象となった<sup>267</sup>。いずれも当該地の首長の影響下にあった集団の仕業と推測される。製糖所の華人労働者は職を失い、治安悪化により活動が困難となった中小の華人商人は、厳しい境遇に置かれた。

このようにして生み出された華人貧困者は、秘密結社との関係を強めた。華人は、相互扶助のために同郷組織を組織していた。この組織は、カピタンの影響下には必ずしもなく、会員間の独自の原理で結ばれていた。このため、この組織はしばしば秘密結社とも呼ばれる。こうした組織を通じた活動が、北岸地域で活発になった。

上記と同様の状況は、バタヴィアでも展開していた。バタヴィア、特にその郊外のオムランデンでは、砂糖生産が大きく展開したことを背景に、製糖所が会社の許可を取らない不法な華人移民を大量に受け入れていた。このために、バタヴィア市内外では1740年までに15000人にまで華人が増加する。しかし18世紀以降、アジア域内でバタヴィア産よりも安価なベンガル産との競争となったこと、また、当時最も主要な砂糖の輸出先だったサヴァー朝ペルシャが1722年に滅亡したことにより、砂糖の価格が下落した<sup>268</sup>。

これによりバタヴィアと周辺地域では多くの製糖所が破産した。これにともない、無職

の華人が増加したことで、現地では治安が悪化した<sup>269</sup>。こうした状況に対応して、VOCは、華人の一部について中国へ送還することや農業労働者とするため喜望峰植民地へ送ることを決定する。この決定が、華人の不安を掻き立てた。乗船させられた華人は全員バタヴィアから見えなくなったところで海中に投げ込まれるという噂が、彼らの間に広まった。この噂に対して、VOCは、華人が反乱を計画していると考えた。当時のバタヴィアの人口は、1739年の調査では城内のヨーロッパ人が1276人だったのに対して華人は4199人で、後者は前者の3倍以上が居住していた。さらに、同時期バタヴィア郊外には、約10000人もの華人が存在していた<sup>270</sup>。このように人口において華人に対し圧倒的に少数であったことが、オランダ人の不安を増大させた。こうした両者の不信が、1740年に爆発する。この年10月9日、オランダはバタヴィア市内の華人が蜂起することを恐れ、華人居住区に対する搜索を行った。この搜索のなかで一軒の家で火災が発生したのを、オランダ人側が華人による総攻撃ののろしと誤解したことで、両者の衝突が起こった。その後1週間続いたバタヴィアの混乱で、1万人以上の華人がオランダ人とその奴隷によって虐殺された<sup>271</sup>。

この華人虐殺を逃れた華人が、バタヴィアからジャワ北岸地域へ避難し、そこで受け入れられた。北岸地域で武装集団を形成した彼らは、現地で華人によって形成されていた秘密結社の仲介を得て、1741年2月のパティとドゥマクを皮切りに、オランダの要塞、オランダ人や華人有力者、ジャワ人有力者や華人が経営する工場などを襲撃し破壊し始めた。反乱の過程において、襲撃された工場で就業していた労働者は、武装集団から合流するか殺害されるかの選択を迫られた。そして彼らのほぼ全てが、前者を選んだ。当時労働者は、首長の下で工場や耕作現場での労働に従事したのに加えて、首長に対し税も支払っていた。

こうして反乱はジャワ各地に拡大し、反乱に参加した華人と当時貧困にあえいでいた多くのジャワ人もこれに加わった。彼らのうち当時最も厳しい状況に置かれていたのが、首長の支配下に置かれた人々〔オラン・ダレム<orang dalem>〕であった。彼らは、耕作地を与えられた一方で、首長が建造する建築物や船舶の材料を提供するなどの賦役も課せられ、後にはVOCに労働者として貸し出された。特に、木材産出の現場では、森林伐採が進行し更に内陸へ移動した産出地で切り出しから運搬まで行わなければならない、その負担は非常に大きかった。こうして彼らは、厳しい境遇のなか低賃金で労働することを余儀なくされた<sup>272</sup>。このため彼らは、VOCや現地の首長さらにそれに与する華人有力者に対する不満を抱き、反乱に参加していったのである。

勢力を拡大した反乱軍は、同年5月から6月にレンバンの要塞、ジュワナやドゥマクの

商館を占領し、スマラン、ジュパラ、トゥガルの要塞を包囲する。1741年11月に行われたスマランにおけるVOCの要塞への攻撃で、反乱軍は、ジャワ人20000人、華人3500人、大砲30門の勢力となっていた<sup>273</sup>。

この反乱軍の動きに同調して、マタラム王もVOCに与えた経済的特権を回収しようとした。当時の王であったパクブウォノ2世<Pakubuwana II>〔位：1726-1749〕は、1741年7月に反乱軍につくことを決め、カルタスラにある会社の要塞を攻撃した。だが、同年11月、マタラムに反発する西マドゥラの現地首長チャクラニングラット4世<Cakraningrat IV>の支援を得たVOCの援軍がスマランに到着すると、形勢は逆転した。このためパクブウォノ2世は、会社に帰順することを選択した。しかし、この同王の動きに反乱軍は猛烈に反発し、先王アマンクラット3世<Amangkurat III>の孫を王位につけることを要求して王都カルタスラへと向かい、1742年6月30日には王宮を陥落させる。これに対して、VOCは、チャクラニングラットの援助を得て、同年末に反乱軍を王都から追い払い、国王を復帰させた。これを契機に、反乱軍側から王族が次々とVOC側についていったことで、翌年には、反乱はおおよそ終息に向かうことになった<sup>274</sup>。

これにともない、1743年11月にマタラムとVOCとの間で新たな条約が締結され、パクブウォノ2世は正式に王位に復帰する。他方で、この条約を通じてVOCは、西マドゥラ、スラバヤ、レンバン、ジュパラ、パスルアン以東の東部ジャワおよびジャワ北岸地域沿岸の幅600ロード〔約2キロメートル〕の支配権を得た。また、上記以外の全ての港市の権益の一部が同王国からVOCへ委譲されること、マタラム王はVOCの許可なしに首長の任命ができないこと、VOCから王宮への表敬訪問の廃止、同王国は毎年米5000コヤン、豆500コヤン、胡椒10000ピクル、藍23ピクル、綿糸300ピクルを会社に供すること等の取り決めもなされた。また、この条約が結ばれた後、会社は、北岸沿岸の支配権を同地域全域に拡大し、1748年にこれをジャワ北東岸地区として直轄領にした。かくして、ジャワ北岸地域におけるVOCの覇権が確立し、以後同地域は完全に会社の影響下に置かれたのである<sup>275</sup>。

華人反乱では、華人貧困層とジャワ人貧困層とが結合して、VOCや華人有力者ならびにジャワ人有力者を襲撃した。この構図は、ジャワ人民衆が華人全般を襲撃したトルノジョヨ反乱とは大きく異なることがわかる。この両反乱における構図の相違には、1680年以前と同年以降とのジャワ北岸地域の華人が置かれた状況の変化、すなわちVOC—マタラム王—現地の首長と華人有力者の関係強化を如実に見てとることができる。華人にとって1680-1740年の時期は、いずれの現地勢力にも支援された。こうして有力な華人が台頭し

た反面、貧困化した華人との間に亀裂が広がった。他方、アマンクラット 1 世の時代に生じたジャワ人の華人に対する反感は、この時期には後退した。華人系住民が首長となった事例がしばしば見られたように、貧困化したジャワ人が下層の華人と行動をともにする現象も起こったのである。それは、華人かジャワ人かではなく、親 VOC か反 VOC かが重要であった。

## 5. 華人反乱後のジャワ北岸地域と華人

華人反乱以降、ジャワ北岸地域は VOC の直轄地となり、華人有力者は、再び会社との関係を深化させることで経済活動の中心を担うこととなる。

反乱終結直後、VOC と華人の関係は良好なものではなかった。華人反乱で大きな被害を受けた VOC は、反乱後しばらく華人を信用せず彼らと距離を置く。同反乱以前から直轄地であったスマランでは、会社による華人カピタンの任命が 3 年間停止された。また、18 世紀後半には、北岸地域全域について華人居住の規模を制限する命令が何度も出され、1773 年には南カリマンタンのバンジャルマシンや南スマトラのパレンバンからジャワに向かう華人船に対する渡航許可証の発行を、VOC が拒否する。さらに、会社は、首長に対して土地の賃貸禁止を命じ、華人に代わりヨーロッパ人の自由民に会社向けの米の購入を委託した。

しかし、これら VOC がとった政策は成功しなかった。華人へ土地を貸し出すほうがより多くの利益を得られる現地の首長達は、会社の禁令に従わなかった。またヨーロッパ系の自由民への米購入委託は、彼らが米の市場価格よりも大幅に低い金額しか支払わないことが頻発して首長から強く抗議されたために頓挫する。その一方で、この時代のジャワ北岸地域では、華人有力者が経済活動のあらゆる分野に関わった。彼らは数としては少数ではあったが、貿易から徴税に至るまで現地の経済を掌握していた。こうした状況を見て、特にオランダ人知事<gouverneur>をはじめ現地に派遣された VOC の職員は、華人有力者の活動を認め、彼らをカピタンに任命して、現地の経済や治安維持のため利用するように方針を転換する。

現地の VOC 職員の方針転換が可能となった背景には、現地への華人流入の変化が関係していた。それまでバタヴィアを經由してジャワに流入していた華人は、18 世紀中葉以降、

胡椒やガンビール栽培が広まり華人労働者を積極的に導入したリアウや、錫鉱山開発が進められたバンカ島、胡椒栽培が盛んなトレンガヌ<Trëngganu>やブルネイ<Brunei>、サトウキビ栽培が行われていたケダー<Këdah>、金鉱のあったクランタン<Kelantan>やカリマンタン西部、錫鉱山のあったスランゴール<Selangor>やペラック<Perak>などに流入するようになった。1780年代にはリアウの胡椒およびガンビール農園では約25000人の華人労働者が、また18世紀末にはバンカ島の錫鉱山に約25000人、カリマンタンの金山では約40000人の華人労働者がそれぞれ存在していたとされる<sup>276</sup>。こうした事情から、18世紀後半にはジャワ島へ流入する華人の数は以前と比べて減少したと考えられる。このため、現地の治安も、華人カピタンによって管理することがほぼ可能になった。

華人有力者は、カピタンとして居住区に住む華人の管理を行い、現地の治安の安定に大きく貢献する。また彼らは、現地の知事らに対し、米などの貿易品だけでなく会社の軍事遠征で用いる船舶も提供した。その見返りとして、知事らは、華人有力者に対し一部地域について土地貸し出しを認めた。また彼らは、バタヴィアの華人と距離を置く政策に対し、彼らを利用することで米などを迅速に供給できるとして、華人有力者を擁護した。さらに知事らは、華人有力者が現地の秩序を乱した場合でも、彼らへの刑罰を軽減した。これらの関係を通じて、華人有力者はさらに現地の経済活動を司るようになった。プカロンガンのカピタンとなったタン・チャウコ<Tan Tjauko>をはじめとする一族は、同地だけでなくスマラン、バタン、グレシク、シダユ、プマラン、トゥガル、ブレデスのカピタンやシャーバンダルの地位を得ていた。また、ハン・チエン・コン<Han Tijen Kong>の一族は、パヌカンやマラン、シダユ、トゥバン、プグル<Puger>、ボンドウオソ<Bondowoso>の首長となった。さらに、スラバヤのカピタンとなったハン・ブイコ<Han Boeyko>の一族は、ジュワナ、パスルアン、グレシク、バングル<Banger><sup>277</sup>のカピタンに任命される。こうした華人有力者は、現地の徴税請負を担い、更に現地での貿易にも深く関与して利益をあげ絶大な力を誇るに至った。華人反乱直前の1740年から1800年までのジャワ北岸地域の社会経済状況について考察したクウィ・フィ・キアンは、この時代を含めた18世紀を「華人の世紀」と位置づける<sup>278</sup>。

しかし他方で、この時代は、職員の密貿易や汚職を一因とする大きな負債を抱えて18世紀末に破産して解散するVOCの末期にあたる。当時ジャワ北岸地域でなされた華人有力者と会社職員の関係深化は、一方では会社を延命させ、もう一方で会社の終焉を導いたと推測される。当時会社の利益の源となっていた米などの商品は、上述したように華人有力



者と現地の職員のネットワークを通じて会社へ素早く供給することが可能となっていた。しかし、他方で、両者の関係を通じて多くの商品が密貿易された可能性は否定できない。クウィ・ファイ・キアンも、後者の可能性が非常に強いことを指摘する<sup>279</sup>。当該時代、華人有力者が VOC の職員と関係を強めたことが、最終的には会社による統治の終焉とその後のオランダによる直接統治を導く一因となったのである。

## 第7章 おわりに

### 1. 本稿のまとめ

ここまで論じてきた、ジャワ北岸地域における華人の流入や活動については、以下のよう  
にまとめることができる。

本稿が論じた 17 世紀に活動する華人の背景として、明朝が 1567 年に海禁政策を緩和し  
対外貿易を認めたのをきっかけに始まった第 1 期に、多くが現地に流入したことは重要で  
ある。彼らは、17 世紀初頭には胡椒を中心とする香辛料貿易に従事し、バンテンや北岸地  
域間と関係を構築した。貿易を通じて富裕化した華人は、それを基盤に現地通貨のピチを  
流通させ、さらに貿易を拡大させた。その後 17 世紀前半には、内陸から勢力を拡大したマ  
タラム王国がジャワ北岸地域をはじめ島内のほとんどの地域を影響下に置き、他方では  
VOC がバタヴィアを建設してジャワでの貿易に参入した。この状況に際して、華人は、バ  
タヴィアを経由して現地へ流入し、同地と北岸各地域との間で貿易を展開させ、両地域の  
華人有力者同士間の関係を構築する。また彼らは、その貿易ネットワークを活かし、北岸  
地域でのマタラムの貿易を担った。さらに華人は、1620 年代半ば以降アグン治世のマタラ  
ムと VOC が敵対し関係が断絶したなかで、バタヴィアと北岸各地の間で貿易を継続し、両  
者への情報伝達や交渉も行った。こうした彼らの活動が、1646 年に両者の関係を回復する  
のに大きな役割を果たした。

上記の状況のなか行われたジャワ北岸地域の貿易は、バタヴィアへの輸出が中心となる。  
この貿易では、米や木材、加えて 17 世紀初頭から生産され始める砂糖の輸出が中心となり、  
北岸地域の華人はこれらの貿易に大きく関わった。米については、運搬や販売など全般に  
彼らに関わる。また砂糖にかんしては、製糖所の運営から栽培や製糖において技術を必要  
とする工程の作業に彼らに関わった。その一方で、製糖所を経営する華人は、技術を必要  
としない作業に多くのジャワ人労働者を使用し、彼らに対して住居や生活必需品、嗜好品  
を供給した。また華人経営者は、金額を現地首長に支払って彼らから労働力や必要な土地  
の管理を任された。これらを通じて華人は、ジャワ人労働者や製糖に関係する村落の居住

者を経済的に彼らに依存させ、現地首長も巻き込んだ。木材に関しては、切り出しの管理や運搬の管理、販売などに華人が関与する。ここでも華人は、切り出し作業を行った現地人労働者や労働者確保を行った現地首長との経済的関係を強めた。一方で、米、砂糖、木材の輸出の対価として、インド綿布、陶磁器、銅、アヘンが北岸地域に輸入され、その貿易と販売についても華人が大きく関わっていた。

1646年、アマンクラット1世が王となったマタラムとVOCとの関係修復がなされ、貿易が再開された。その一方で、同王国は、北岸をはじめとする沿岸地域の貿易活動を管理下に置き、現地首長らジャワ人有力者を排除して、王室のみがその利益を独占しようとした。こうした状況で、第2期の華人流入が行われる。中国で明清交代期の混乱や清朝による遷界令発令などが展開したなかで行われた同時期には、主にマカオからの流入や台湾などからの鄭氏華人の流入が中心となった。彼らを含めたジャワ北岸地域の華人は、上記の品物による貿易をさらに拡大させ、VOCやマタラムとの関係を深化させる。VOCは、彼らに職務の請負や会社への情報伝達など重要な役割を担わせた。一方、マタラムは、現地の華人有力者をシャーバンドルに任命し、貿易を統轄させて徴税も行わせただけではなく、塩や竹の専売、アラク酒の製造と販売、ピチ鋳造、華人人頭税徴収の権利も彼らに与えた。こうしてマタラムは、経済活動においてジャワ人を排除する一方で、華人を活用して、集権化政策を進めた。こうしたマタラムの政策が、華人シャーバンドルを頂点として商業活動を司る人々を「華人」とする認識を、ジャワ人民衆や有力者に植えつけたのである。

こうしたなかで、1675年にトルノジョヨ反乱が発生する。反乱が発生する直前、東部ジャワを除いた各地で米が凶作になり、極端に米が不足して米価の高騰が起こり飢饉へと発展した。このため、同反乱は、反乱軍が豊富に米を確保できたマドゥラ島や東部ジャワを拠点としたことが、反乱拡大の最大の要因となった。加えて、反乱拡大期には、華人への襲撃が頻発し、彼らが打倒されるべき対象となった。だが、トルノジョヨ反乱は、VOCがマタラム側についたことで鎮圧される。この援助に際してVOCとマタラムの間でなされた合意がきっかけとなり、その後の時代、両者の間で前者が軍事援助を行い、その見返りに後者が経済的利権を提供する関係が成立した。

1680年以降、清朝が遷界令を解除し、展界令を発令して中国からの海外渡航を認めたのをきっかけに、ジャワ北岸地域に第3期の華人流入が展開する。この華人流入では、特に1695年から1710年にかけて多数が流入した。一方、現地では、上述したようにVOCとマタラムの関係においてVOCの影響力が増し、同王国が会社に供与する現金や米を実質的に

供給する現地の首長の影響力も拡大する。首長達は、華人の商業ネットワークを活用し、経済活動の多くを現地の華人に行わせた。こうして有力となった華人系住民の中から、自ら首長となった者が出現する。マタラムは、VOC に提供する富を確保する必要から、1680年以降、より直接に多くの利益を得ることができる華人系有力者を首長に任命し、重用したのである。また VOC も、華人に対して規制を加えながらも現地のカピタンに華人居住区の管理や人头税の徴収を管轄する権限を与え、会社が直轄地としたスマランの首長に華人系有力者を任命した。このように、1680年以降の時期は、華人にとって VOC、マタラム、首長のいずれとも関係を構築し、経済活動をさらに拡大することができた時代であった。しかし、同時に中国からの大規模な流入が展開する状況では、大多数の華人は有力者の下で労働者となることを余儀なくされた。こうしたなかで、1741年に華人反乱が勃発する。この反乱では、華人にジャワ人も加わって、VOC ならびにこれに与する現地の有力者を攻撃した。

VOC によって華人反乱が鎮圧された 1743 年以降、ジャワ北岸地域は会社の支配下に置かれる。VOC は華人と距離を置く政策をとったが、オランダ人知事ら北岸地域に派遣された会社の職員は、現地における華人有力者の経済力を無視できず、彼らと再び関係を構築していく。こうして VOC の職員と関係を構築した彼らは、現地で経済活動を司っていったのである。

## 2. 17～18 世紀ジャワ北岸地域の華人の境遇における変化と共通性

本稿が論じてきた 1680 年までの時代、ナフテハールが述べた 1680-1743 年の時代、クウィ・ファイ・キアンがとりあげた 1740-1800 年の時代は、ジャワ北岸地域の華人にとって次のような意味を持つ時代であったと考えられる。

1680 年までは、ジャワ北岸地域で圧倒的な影響力を誇ったマタラムが経済活動からジャワ人有力者を排除する集権的政策を行ったことや、VOC が現地での貿易のみに関心を持っていたことから、華人は同王国と関係を構築することで経済活動を拡大することができた。その一方で、当時の華人流入がその後の時代と比べて規模が大きくなかったことや、彼らの持つ商業ネットワークが内陸国家であったマタラムを大いにひきつけたことを考慮すれば、彼らが当該地域で経済的に台頭できる可能性は最も高かった時代といえる。だがその

一方で華人は、経済活動から排除されたジャワ人の現地首長や、砂糖や木材の生産現場で華人に経済的に依存しながら厳しい条件のなかで働いたジャワ人労働者から、強い反発を受けた。トルノジョヨ反乱での華人襲撃は、これが顕在化したものといえよう。

1680-1743年は、マタラムに加えて VOC や首長が現地で影響力を拡大し、それぞれが経済活動を活発に行ったことによって、華人はこの三者のもとで活動を拡大できた時期だったといえる。しかし、他方でこの時代には、中国からの華人流入が急増したことで、華人間の競合が激しくなった時代でもあった。このため、この時期には、ジャワ北岸地域で華人貧困層が従来以上に多数発生した。華人反乱において、彼ら華人下層民が同じ境遇にあったジャワ人民衆と結びついて、VOC や現地の有力者達を大規模に襲撃したことは、他の時期には見られないこの時期の特徴であった。

1740年以降は、1680年までと比較的類似した時代だったと考えられる。華人の多くマレー半島やリアウ諸島、カリマンタンへ流入したこの時代には、北岸地域を含めたジャワへの流入が減少したため、1680-1740年まで見られたような治安悪化はあまり見られなくなる。一方、現地では、マタラムや首長らと比べ VOC が圧倒的な権力を誇るに至る。こうしたなか、会社〔の現地職員〕と関係を構築し深化させることができた華人は、VOC の後ろ盾を得て経済の分野において現地で大きな影響力を行使することができた。

このように、それぞれの時代で華人の置かれた境遇や彼らの活動が異なって展開した一方、華人有力者が現地の有力な勢力と関係を構築し深化させることによって経済活動を掌握していく点については、この3つの時期を通じて全く共通していることがわかる。それぞれの時代において対象や程度に相違はあるもの、17世紀から18世紀の時代を通じて、マタラムや VOC、現地の首長らは、華人の持つ商業ネットワークや経済力を決して軽視することはできず、経済活動を行ううえで彼らを利用した。こうして、1680年までにはマタラム王国の独占政策のもとで政治企業家ともいえるべき華人有力者の存在が顕著となり、その後彼らは、1680-1740年にはマタラム、首長、VOC の三者のもと、また1740年以降には VOC の現地職員のもとでさらに活発に経済活動を行って、ジャワ北岸地域における影響力を拡大していったのである。

それぞれの時代で構築された華人と現地勢力との関係は、トルノジョヨ反乱や華人反乱が発生すると一旦崩壊する。しかし、各反乱が終結した後、現地で新たに有力となった勢力は、華人と関係を再構築し深化させた。特に VOC は、こうして、華人と VOC および後の植民地政庁は、19世紀後半まで緊密な関係を構築し続けた。17世紀のジャワ北岸地域にお

ける華人の活動は、権力者とジャワ人を経済的に仲介する役割を担い始めた意味において、19世紀後半まで続くVOCやオランダ植民地政庁による植民地体制の礎を形成したといえよう。同時にそれは、支配者とジャワ人との関係が動揺すると、彼らが必ずその抗争に巻き込まれることも意味したのである。

## 注

- <sup>1</sup> 詳細については後述する
- <sup>2</sup> 本稿がとりあげる時代の後、1680年から1743年については後述するナフテハールの研究、また1743年から1800年についてはクウィ・ファイ・キアン〈Kwee Hui Kian〉の研究 (Kwee Hui Kian (2006), *The Political Economy of Java's Northeast Coast c. 1740-1800: Elite Synergy*, TANAP Monographs on the History of Asian-European Interaction vol. 3, Leiden: Brill) によって、それぞれ論じられている。
- <sup>3</sup> Meilink-Roelofs, M. A. P. (1962), *Asian Trade and European Influence: in the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630*, The Hague: Martinus Nijhoff.
- <sup>4</sup> Blussé, L. (1988) *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*. Dordrecht: Foris Publications.
- <sup>5</sup> 本論で後述するように、この反乱は、華人だけではなく多くのジャワ人も加わって展開した。華人が主導したため、多くの先行研究はこのこれを Chinese Revolt や Chinese War としている。本稿も同反乱に「華人反乱」の用語を用いる。
- <sup>6</sup> ジャワ語でブパティ〈bupati〉、オランダ語ではレヘント〈regent〉と呼ばれる。
- <sup>7</sup> Nagtegaal, L.: Jackson, B. (tr.) (1996), *Riding the Dutch Tiger: the Dutch East Indies Company and the Northeast Coast of Java 1680-1743*, Leiden: KITLV Press.
- <sup>8</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 294.
- <sup>9</sup> Reid, A. (1993), *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, New Haven and London: Yale University Press, vol.2, pp. 283-284.
- <sup>10</sup> これについては、第5章で詳しく述べる。
- <sup>11</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 3.
- <sup>12</sup> *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum: Verzameling van Politieke Contracten en Verdere Verdragen door de Nederlanders in het Oosten Gesloten, van Privilegebrieven, aan hen Verleend, enz.*, vol. 3, pp. 123-125.
- <sup>13</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 165.
- <sup>14</sup> なお、各先行研究の概要と問題の所在については、序章で既に述べた内容と重複するため、ここでは改めて言及しない。
- <sup>15</sup> 馬敏、小川博訳注『瀛涯勝覧』、吉川弘文館(1969)、pp. 21-26。
- <sup>16</sup> 上田信『海と帝国』(中国の歴史9)、講談社(2005)、pp. 200-202。
- <sup>17</sup> 里甲制では、人民は国家に「戸」と呼ばれる単位で把握される。そして110の戸からなる「里」が組織され、それは11ずつ10戸の「甲」に分けられた。また、里の中では指導的な立場の「里長戸」が各甲1戸ずつ定められ、それぞれの里長戸が10の甲首戸を統轄した。里の中では、毎年1つの甲が当番となり、里長戸を指揮して徴税や徴用などを行っていた。〔上田、上掲書、pp. 115-119〕
- <sup>18</sup> 上田、上掲書、pp. 187-188, 230-232。
- <sup>19</sup> 絹織物の場合、マニラ経由のものは本国を経由したものの10分の1の値段であったという。
- <sup>20</sup> 現在のボリビアに位置する。
- <sup>21</sup> 上田、上掲書、pp. 254-255。
- <sup>22</sup> 上田、上掲書、pp. 197-199。
- <sup>23</sup> 岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統世界の形成」 横山紘一、川北稔、岸本美緒、斎藤修、杉山正明、鶴間和幸、福井憲彦、古田元夫、木村凌二、山内正之 編『岩波講座世界歴史 13-東アジア・東南アジア伝統世界の形成-16-18世紀』、岩波書店(1998)、pp. 16-18。
- <sup>24</sup> 上田、上掲書、pp. 249-253。
- <sup>25</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, pp. 245-246.
- <sup>26</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 271.

- <sup>27</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 288.
- <sup>28</sup> グレシクの近郊にあったとされ、グレシクよりも遅れて発展したとされる。記録では1656年を最後に見られなくなるが、これは同時期にジョルタンがグレシクに完全に包含されたためと考えられる。〔長岡新治郎「東部ジャワの海岸都市革兒昔 (Grissie) と饒洞 (Jortan) の盛衰と和蘭東印度会社」『東方学』第6号(1953) pp.52-64〕
- <sup>29</sup> シャーバンドルは、「海の王」を意味するペルシャ語を語源とする。通常各港に置かれるのは1名であるが、大きな貿易港の場合は来航する外国商船の所属地域別に2名から4名任命されることもあった。
- <sup>30</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, pp. 283-284.
- <sup>31</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, pp. 250-251.
- <sup>32</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 291.
- <sup>33</sup> 東南アジアでは当時、当該の港市から離れた場所での取引取引を委託されて請け負う制度が発展していた。〔ピレス、トメ、生田滋、加藤栄一、長岡新治郎 訳注、池上岑夫 訳『東方諸国記』(大航海時代叢書V) 岩波書店(1966)、p. 490〕
- <sup>34</sup> Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 265.
- <sup>35</sup> 前述した『瀛涯勝覧』の記述を考えると、ブリュッセイが指摘する16世紀後半における中国銅銭の使用は、遅くとも15世紀から継続していた可能性が極めて高い。
- <sup>36</sup> 後述するナフテハールによれば、ピチとレアルの交換レートは時代によって差があり、1レアル=750~7500ピチであった。
- <sup>37</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 46.
- <sup>38</sup> VOCの成立ならびに活動について詳しくは、Gaastra, F. S. (1982), *De Geschiedenis van de VOC*. Zutphen. [なお本稿では5th edition (2002) を利用]、永積昭 『オランダ東インド会社』(2000) 講談社を参照されたい。
- <sup>39</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 80-84.
- <sup>40</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 115.
- <sup>41</sup> *Generale Missiven van Gouverneurs-generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*, vol. 1, The Hague: Martinus Nijhoff, p. 192, 546.
- <sup>42</sup> *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Passerende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India*, anno 1674, The Hague: Martinus Nijhoff, p. 28
- <sup>43</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 116.
- <sup>44</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 80.
- <sup>45</sup> *De Opkomst*, vol. 6, pp. 9.
- <sup>46</sup> アグンは、1641年にメッカからスルタンの称号を得てスルタン・アグン(Sultan Agung)と呼ばれようになる。なお、Babad Tanah Jawiでは、称号を得た時期に関係なく「偉大なるスルタン」の意味で、スルタン・アグンと呼ばれている。
- <sup>47</sup> *De Opkomst*, vol. 4, p. 2.
- <sup>48</sup> *De Opkomst*, vol. 4, p. 8.
- <sup>49</sup> Kertapradja, Meinsma, Olthof, Ras (1987), *Babad Tanah Djawi: Javaneese Rijkskroniek*, Dordrecht: Foris Publications, pp. 20, 22-24. なおこの当時、マタラムだけでなく北岸地域の港市でも、華人を自らの系譜に織り込み中国との関係を主張していた。例えば『ババッド・チルボン』においても、自らの系統に華人を入れている。〔Hadisutjipto, S. Z. (ed.) (1979), *Babad Cirebon*, Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Proyek Penerbitan Bacaan dan Sastra Indonesia dan Daerah, pp. 43-45〕
- <sup>50</sup> トゥムンゴンは、ムラカ王国時代以降の港市国家にみられる官職で、同王国時代には治安長官とされていた。その一方で、17世紀のマタラムにかんしては、生田滋が「地方領主の称号」としている。〔フーンズ、ファン「ジャワ旅行記」、フーンズ、ファン、フリート、ファン、コイエット、フレデリク、生田滋 訳注 『オランダ東インド会社と東南アジア』、大航海時代叢書II-11 岩波書店 (1988)、p. 17、注5〕 本稿では、当時のVOC文書に現われるトゥムンゴンが後者を指すことが多い一方で、前者の意味も含まれているため併記した。



- <sup>51</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1631-1634, p. 47. 詳しくは後述する。
- <sup>52</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1640-1641, p. 445.
- <sup>53</sup> これについては、次章で後述する。
- <sup>54</sup> *Babad Tanah Djawi*, p. 143.
- <sup>55</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1631-1634, p. 47.
- <sup>56</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1631-1634, pp. 423-425.
- <sup>57</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1636, p. 216.
- <sup>58</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1640-1641, p. 445.
- <sup>59</sup> Schrieke, B. (1925), "The Shifts in Political and Economic Power in the Indonesian Archipelago in the Sixteenth and Seventeenth Century", in Schrieke (1955-57), *Indonesian Sociological Studies: Selected Writings of B. Schrieke*. vol. 1. pp. 1-82.
- <sup>60</sup> Reid, *op. cit.* pp. 283-284.
- <sup>61</sup> マジャパイト王国晩年の1478年からマタラム王国時代の1720年までを記録した王統紀。現存する写本は1738年に編纂されたものとされる。なお、この王統紀については、リックレフスが英訳を行ったものが出版されている。[Ricklefs, M. C. (1978), *Modern Javanese Historical Tradition: A Study of an Original Kartasura Chronicle and Related Materials*, London: School of Oriental and African Studies University of London]
- <sup>62</sup> Houben, V. J. H. (1994), "Trade and State Formation in Central Java 17th-19th Century" in Schutte, G. J. (ed.), *State and Trade in the Indonesian Archipelago*. Leiden: KITLV Press, pp. 61-76.
- <sup>63</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 108-109.
- <sup>64</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 163-179.
- <sup>65</sup> 『バタヴィア城日誌』では、1661年以降において各月の最終日にVOC以外による船舶の出入港数と、船舶に積載された商品の数量(入港時)や金額(出航時)をまとめて記載している。本稿の各表は、1661年以後についてはこれらの数を、それ以前にかんしては本文に現れる両港からの出入港記事における船舶数や商品の数ならびに金額を、それぞれ集計して作成した。
- <sup>66</sup> 1630年代に、ジュパラから若干胡椒の輸出が見られるのみである。
- <sup>67</sup> 1680年以降のジャワ北岸地域における綿布生産の増大については、Nagtegaal, *op. cit.* pp. 135-136に詳しい。
- <sup>68</sup> 大木昌『稲作の社会史—十九世紀ジャワ農民の稲作と生活史』、勉誠出版(2006)、pp. 50-52、61-63。
- <sup>69</sup> Goens, Rijcklof van, (1656), "Reijsbeschrijving van den weg uijt Samarangh nae de Konincklijke Hoofdplaets Mataram, Mitsgaders de Zeeden, Gewoonten ende Regeringe van den Sousouhounan, Groot-Machtichste Koningk van 't Eijlant Java.", reprinted in *Bijdragen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-, en Volkenkunde van Nederlands Indië*, IV (1856), pp. 307-350. 原典は現在失われているが、上記の再版されたものが存在する。また、この和訳として、フーンズ、上掲書、pp. 5-68、がある。
- <sup>70</sup> フーンズ、上掲書、pp. 5-6。大木も同様のことを指摘している。[大木、上掲書、p. 50-52]
- <sup>71</sup> ナフテハールは、18世紀を含めた時期における主要な輸出港をトゥガル、ドゥマク、ジュパラに近接するタドゥナン<Tadunang>、ジュワナ<Juwana>、スラバヤ、パスルアン(1686年まで)の各港としている。[Nagtegaal, *op. cit.*, p. 129.] しかし、筆者が対象とする1680年までの時代では、タドゥナンの名前が見られないことや、スラバヤにおける貿易がジュパラやグレシクと比べて圧倒的に少ないなど、同氏の主張とは大きく異なっている。
- <sup>72</sup> *De Opkomst*, vol. 6, p. 101.
- <sup>73</sup> *De Opkomst*, vol. 6, p. 104-105.
- <sup>74</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 129-130.
- <sup>75</sup> Reid, *op. cit.*, pp. 291-298.
- <sup>76</sup> Reid, *op. cit.*, pp. 291-293.
- <sup>77</sup> *De Opkomst*, vol. 6, pp. 32-34.

- <sup>78</sup> Nationaal Archief: VOC 1200, f. 32-33. [19-4-1653] 【史料 1】
- <sup>79</sup> VOC 1200, f. 1. [27-1-1653]
- <sup>80</sup> VOC 1200, f. 32-33. [19-4-1653] なおティーヘンは、この記事が書かれた当時既に故人となっている。
- <sup>81</sup> VOC 1200, f. 65. [23-8-1653] この文書は、文書の状態が悪く、判読不能の部分が多いが、当該の意味は読み取ることができる。
- <sup>82</sup> これについては、後で詳説する。
- <sup>83</sup> VOC 1283, f. 1361 [29-5-1671], 1362 [7-6-1671], VOC 1290, f. 141. [5-4-1672] 【史料 2】
- <sup>84</sup> VOC 1290, f. 141. [5-4-1672]
- <sup>85</sup> トゥガルについては *Dagh-register Batavia*, anno 1624-1629, p. 342、バンテンにかんしては *Dagh-register Batavia*, anno 1631-1634, pp. 164-165、ジュパラは *Dagh-register Batavia*, anno 1631-1634, p. 276、チルボンについては *Ibid.*, p. 271、スラバヤにかんしては *Dagh-register Batavia*, anno 1636, p. 222、グレシクは *Dagh-register Batavia*, anno 1640-1641, p. 268.
- <sup>86</sup> *De Opkomst*, vol. 6, pp. 101-102.
- <sup>87</sup> *De Opkomst*, vol. 6, p. 172.
- <sup>88</sup> *Dagh-resister Batavia*をはじめとする VOC の各文書では、[表 1][表 2]で挙げたジュパラとグレシク以外にも、ジャワ各地で砂糖の生産が行われ、バタヴィアに運ばれていたことが記されている。
- <sup>89</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 64, 84-87.
- <sup>90</sup> ジャワ島をはじめとする東南アジア地域における鄭氏の活動については、次章で述べる。
- <sup>91</sup> クリスチャン, ダニエルス 「十七、八世紀東・東南アジア域内貿易と生産技術移転—製糖技術を例として」 浜下武志, 川勝平太(編) 『新版 アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』 藤原書店 (1984)、p. 89、Li Tana (1998), *Nguyêñ Cochinchina: Southern Vietnam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Ithaca, New York: Cornell Southeast Asia Program Publications, pp. 80-81.
- <sup>92</sup> *De Opkomst*, vol. 6, p. 96
- <sup>93</sup> Chijs, J. A. van der, (1885-1900), *Nederlandsch-Indisch plakaatboek, 1602-1811*. The Hague: Martinus Nijhoff, vol. 1, p. 465. [9-2-1642]
- <sup>94</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1663, p. 383.
- <sup>95</sup> Bondan Kanumoyoso (2011), *Beyond the City Wall: Society and Economic Development in the Ommelanden of Batavia, 1684-1740*. Department of History, Faculty of the Humanities, Leiden University, p.138, Glamann, K. (1958), *Dutch-Asiatic Trade: 1620-1740*, Copenhagen, The hague: Danish Science Press, pp. 158-159.
- <sup>96</sup> Glamann, *op. cit.*, pp. 161-162, Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 138-140.
- <sup>97</sup> *De Opkomst*, vol. 6. p. 82.
- <sup>98</sup> *Nederlandsch-Indisch plakaatboek*, vol. 2, pp. 358-360. [16-5-1662]
- <sup>99</sup> *Nederlandsch-Indisch plakaatboek*, vol. 2, p. 471. [22-1-1669]
- <sup>100</sup> クリスチャン, ダニエルス、上掲書 pp. 78-92。
- <sup>101</sup> Bondan, *op. cit.*, p. 154.
- <sup>102</sup> 長岡新治郎 「17, 8 世紀のバタビヤ糖業と華僑」 『南方史研究』 II、(1960)、p. 149
- <sup>103</sup> VOC 1200, f. 23-24. [28-3-1653]
- <sup>104</sup> VOC 1290, f. 165. [28-9-1672]
- <sup>105</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 138.
- <sup>106</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1679, p. 562
- <sup>107</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 138
- <sup>108</sup> ボンダンも、18 世紀前半に比べて同世紀後半や 19 世紀前半において製糖所の規模が拡大したことを指摘している。[Bondan, *op. cit.*, p. 161]
- <sup>109</sup> Bondan, *op. cit.*, pp. 162-163.

- <sup>110</sup> *Ibid.*
- <sup>111</sup> 嶋村雅三郎 『サトウキビ—その栽培から利用まで—』 社団法人 国際農林業協力協会 (1981)、p. 32。
- <sup>112</sup> 嶋村、上掲書、pp. 20-21。
- <sup>113</sup> ジャワ島では二期作や三期作も可能なため、5月頃に稲を植えてつけて栽培した可能性もある。しかし、17世紀において5月頃からの稲作が行われた可能性は、それほど高くなかったとみられる。5章で述べるトルノジョヨ反乱直前の1674年からジャワ北岸地域で見られた米の不作と米価高騰が1675年6月の米収穫期に一旦落ち着いたという事実が、当時同地域における稲作の大部分が12月頃から翌年の5月から6月頃までに行われていたことを示しているからである。
- <sup>114</sup> ダニエルス、クリスチャン「清代台湾南部における製糖業の構造—とくに一八六〇年以前を中心として」 『台湾近現代史研究』、5(1984)、pp. 98-100。また同氏は、同じ箇所、台湾では水田にサトウキビを植えなかった一方で、中国内陸部の砂糖生産地域では水田にサトウキビを植えていたことも述べる。
- <sup>115</sup> 具体的な位置は不明。但し、同地名が見られる各文書では「レンバン湾にある」とされるため、レンバンの近郊ではないかとみられる。
- <sup>116</sup> VOC 1277, f. 1168. [31-5-1670]
- <sup>117</sup> VOC 1200, f. 65. [23-8-1653]
- <sup>118</sup> VOC 1200, f. 61. [11-8-1653]
- <sup>119</sup> オランダ語では「供給者<leverancier>」という語で現れる。詳しい定義は不明であるが、各文書の文脈から、木材の切り出しから港への運搬を管理していた者とみられる。
- <sup>120</sup> 詳しい経歴については不明。
- <sup>121</sup> VOC 1264, f. 675. [13-3-1667]
- <sup>122</sup> VOC 1264, f. 677. [11-4-1667]
- <sup>123</sup> VOC 1272, f. 805. [28-6-1669]
- <sup>124</sup> VOC 1283, f. 1349. [25-2-1671] 【史料3】なお、依頼書の内容は不明。
- <sup>125</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 149-151.
- <sup>126</sup> *De Opkomst*, vol. 6, pp. 101-102.
- <sup>127</sup> スマランにおけるピチ鑄造については、次章で述べる。
- <sup>128</sup> 長官をはじめ現地の役職については、次章で詳しく述べる。
- <sup>129</sup> *De Opkomst*, vol. 6, p. 173.
- <sup>130</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 143-147.
- <sup>131</sup> *Ibid.*
- <sup>132</sup> VOC 1302, f. 66. [25-4-1674]
- <sup>133</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 116-120.
- <sup>134</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 51-55.
- <sup>135</sup> フーンズ、上掲書、pp. 22-30。
- <sup>136</sup> フーンズはパンゲランを現地首長と解釈し、生田は藩主と翻訳している。しかし、パンゲランは本来貴族を表す称号であり、後述するマタラムの皇太子アノムをはじめ同王国の王族や宮廷内有力貴族もこの称号を持っていた。このため、本稿では双方の意味を持たせるため「パンゲランの称号を持つ現地首長」とした。
- <sup>137</sup> フーンズの記録には、軍隊の構成なども詳述されているが、ここでは言及しない。
- <sup>138</sup> 約15キロメートル。
- <sup>139</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 116-117.
- <sup>140</sup> 上田、上掲書、pp. 217-218。
- <sup>141</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 119.
- <sup>142</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 120.
- <sup>143</sup> 本稿では、以降この出来事を「台湾占領」と表す。

<sup>144</sup> 鄭氏が台湾を支配していた期間は、1662年から1683年までであり、3人が支配していた時期は、鄭成功が1662年、鄭経が1662年から1681年、鄭克塽が1681年から1683年までとなる。

<sup>145</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 117.

<sup>146</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1670-1671, p. 271.

<sup>147</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1670-1671, p. 273.

<sup>148</sup> VOC 1283, f. 1354. [9-4-1671]

<sup>149</sup> VOC 1283, f. 1351. [22-3-1671]

<sup>150</sup> VOC 1290, f. 143. [12-4-1672], f. 155 [23-7-1672]

<sup>151</sup> VOC 1290, f. 152. [24-7-1672]

<sup>152</sup> この時代、鄭氏〔鄭経〕は、三藩の乱(1673-81)が展開した時期の1674年から1680年まで中国南部に拠点を置いていた。

<sup>153</sup> *Generale missiven*, vol. 3, p. 424, *Dagh-register Batavia*, anno 1663, pp. 69, 252-253, anno 1666-1667, pp. 234-235, 313-314, anno 1670-1671, p. 208, 271, 273, 294.

<sup>154</sup> 鄭氏とイギリス東インド会社との貿易契約締結については、永積洋子「東西交易の中継地台湾の盛衰」佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』(1999)、pp. 364-366を参照。

<sup>155</sup> 遷界令は、鄭氏だけでなく大陸沿岸住民にも大きな打撃を与え、これが後に展界令が出される背景となった。なお、遷界令とその影響にかんする詳細については、林田芳雄『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実記』汲古書院(2003)、pp. 114-125を参照。

<sup>156</sup> 但し、1668年の展界令の適用には地域差があり、広東省に比べて福建省は、展開の幅において大きく制限されていたという。〔林田、上掲書、pp. 122-123〕

<sup>157</sup> Wills jr., J. E. (1976), "De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia", M. A. P. Meilink-Roelofs. (ed.), *De VOC in Azië*. Bussum: Fibula-Van Dishoeck, p. 170.

<sup>158</sup> Campbell, Rev. Wm. (1967), *Formosa under the Dutch*, Taipei: Ch'eng-Wen Publishing Company, p. 384.

<sup>159</sup> 上田、上掲書、p. 302。

<sup>160</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1666-1667, p. 235.

<sup>161</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1670-1671, p. 294.

<sup>162</sup> どの戦争を指すのかは不明。台湾占領か。

<sup>163</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1670-1671, p. 298. 括弧内は筆者補足。

<sup>164</sup> VOC 1200, f. 32. [19-4-1653]

<sup>165</sup> VOC 1290, f. 165 [28-9-1672], 180 [12-11-1672], VOC 1295, f. 489 [12-4-1673], 502 [31-5-1673], 507 [9-6-1673], VOC 1302, f. 79. [2-8-1674]

<sup>166</sup> VOC 1272, f. 788 [1-4-1669], 797. [16-5-1669]

<sup>167</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 49-72.

<sup>168</sup> VOC 1283, f. 1355. [9-4-1671] 当該の文書においては「チンスイの娘婿」とだけあり個人の名は記されていないが、同時期の他の文書にチンスイの娘婿としてジンコの名前が出てくることから、この文書に現れる人物についてもジンコで間違いないといえる。

<sup>169</sup> 村上直次郎 訳注、中村孝志 校注、『バタヴィア城日誌』1 (東洋文庫 271) 平凡社 (1975)、pp. 31-32 注 6、フーンズ、上掲書、p. 23、注 8。

<sup>170</sup> チンスイは、VOC文書において「グレシクのシャーバンダル」と現れるのに加え、グレシクとは関係のないジュパラにおける事柄についても「シャーバンダル」として現れている。〔VOC 1283, f. 1361 [29-5-1671]〕

<sup>171</sup> 位置不明、中部ジャワ北岸か。

<sup>172</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1664, p. 207.

<sup>173</sup> VOC 1290, f. 43 [12-4-1672], *De Opkomst*, vol. 6, p. 186.

<sup>174</sup> VOC 1302, f. 88 [26-10-1674]

<sup>175</sup> *De Opkomst*, vol. 7, p. 156.

<sup>176</sup> *De Opkomst*, vol. 7, p. 204.

- 177 Houben, *op. cit.*, pp. 65-66.
- 178 *De Opkomst*, vol. 7, p. 204. 【史料4】
- 179 *Dagh-register Batavia*, anno 1679, p. 431-432.
- 180 VOC 1272, f. 802 [19-6-1669], VOC 1283, f. 1349. [25-2-1671]
- 181 フーンズ、上掲書、p. 17、注5。
- 182 キアイの称号は、現地の長はじめ有力者の意味の他に、イスラム法学者や教師の意味もあり、現在では後者の意味で用いられるのがほとんどである。
- 183 *De Opkomst*, vol. 7, pp. 156-157. 【史料5】
- 184 フーンズ「ジャワ島の短い記述」フーンズ、ファン、フリート、ファン、コイエット、フレデリク、生田滋 訳注『オランダ東インド会社と東南アジア』、大航海時代叢書Ⅱ-11 岩波書店 (1988)、pp. 90-91。
- 185 VOC 1200, f. 74. [29-9-1653] ローコの詳しい経歴については不明であるが、彼が荷を積んだ船舶を持っているということから、北岸地域において何らかの貿易に従事していた人物であった可能性が高い。
- 186 VOC 1290, f. 156. [23-7-1672]
- 187 Reid, *op. cit.*, p. 259. なお、同氏は、王権による死者の遺産没収を17世紀のマタラム、アチェ、バンテン、パレンバンだけでなく、16世紀から17世紀のシャムやラオス、カンボジア、ビルマ、ブルネイでも見られたことを指摘している。
- 188 なお、チンスイのケースについては、彼に娘婿ジンゴがいたことからリードの指摘と異なる点がある。17世紀のジャワ北岸地域については、相続人がいる場合でも遺産の没収が行われていたのかもしれない。
- 189 *De Opkomst*, vol. 6, p. 186. なお、事件の詳細については後述する。
- 190 VOC 1290, f. 141. [5-4-1672]
- 191 反乱自体は1680年で終結するが、残存勢力による抵抗は反乱鎮圧後の1682年まで継続していた。なお、詳細については後述する。
- 192 ジャワのイスラーム化に重要な役割を担ったとされる九聖人〔ワリ・ソンゴ<wali songo>〕の一人スナン・ギリの称号を代々継承した人物。
- 193 Graaf, H. G. de (1940), "De opkomst van Raden Troenadjaja". *Djawa*, vol. 20, pp. 56-86.
- 194 Graaf, H. G. de (1952), "Gevangenneming en dood van Raden Truna-Djaja, 26 Dec. 1679 - 2 Jan. 1680". *TBG*, vol. 85, pp. 273-309.
- 195 Graaf, H. G. de (1961-62), *De regering van Sunan Mangku-Rat I Tegal-Wangi, vorst van Mataram 1646-1677*. 2vols, VKI vol. 33, 39, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- 196 Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 18-28.
- 197 Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 93-98.
- 198 Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 90-93.
- 199 *De Opkomst*, vol. 6, p. 186.
- 200 Reid, *op. cit.*, p. 293, Ricklefs, M. C. (2008), *A History of Modern Indonesia: since c. 1200* (4th ed.), p. 91.
- 201 *Dagh-register Batavia*, anno 1673, p. 274.
- 202 *Dagh-register Batavia*, anno 1674, p. 241.
- 203 *Dagh-register Batavia*, anno 1674, p. 256.
- 204 *Dagh-register Batavia*, anno 1674, p. 348.
- 205 *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 105.
- 206 *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 262, 286.
- 207 *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 303.
- 208 *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 68.
- 209 *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 121.
- 210 *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 144.
- 211 *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 186.

- <sup>212</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 138.
- <sup>213</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1674, pp. 117-118.
- <sup>214</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 82.
- <sup>215</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 108.
- <sup>216</sup> この当時の東南アジア島嶼部では、王宮内での女性をめぐる争いは、王国や王の存亡に関わる重大な影響を与えていた。例えば、マラッカ王国の王統紀『スジャラ・ムラユ』〈*Sejarah Melayu*〉には、王国や王族の混乱の原因が女性をめぐる争いであったという記述がしばしば見られる。〔Brown, C. C., Roolvink, R. (eds.) (1976), *Sejarah Melayu: or Malay Annals*, Kuala Lumpur: Oxford University Press. pp. 152-161.〕
- <sup>217</sup> 南スラウェシのブギス人王国ボネ王国の国王(位: 1635-96)。1660年、当時マカッサルを中心に南スラウェシを支配し自らも臣従していたマカッサル王国に反乱を起こすが、失敗してブトン、バタヴィアへと敗走する。しかしバタヴィアでVOC軍の一員となってマカッサル戦争では大きな活躍を見せる。これが認められ、戦争終結後南スラウェシを支配することになったボネ王国の国王として、同地域に強く影響及ぼすこととなった。
- <sup>218</sup> 現在のベスキ〈Besuki〉にあたる。
- <sup>219</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1675, p. 109, 116, 138, 161.
- <sup>220</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 78.
- <sup>221</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 237. なお、当該史料をはじめとする当時のVOC文書において、デムンは、ドモン〈Dommongh〉と表記されている。
- <sup>222</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 368. 括弧内は筆者補足。
- <sup>223</sup> プレレド陥落の詳しい時期は不明であるが、先行研究では、5月下旬から6月下旬の間と指摘されている。
- <sup>224</sup> Ricklefs, *op. cit.*, p. 91.
- <sup>225</sup> VOC 1321, f. 1107. [9-6-1676] ここで言及されている「割り当てられたもの」は、文脈から華人の財産の可能性が高い。
- <sup>226</sup> VOC 1321, f. 1122-1123. [10-9-1676]
- <sup>227</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 63.
- <sup>228</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 228.
- <sup>229</sup> VOC 1321, f. 1115. [20-8-1676] 【史料6】, *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 207. 【史料7】
- <sup>230</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 328. 【史料8】
- <sup>231</sup> *Dagh-register Batavia*, anno 1676, p. 270.
- <sup>232</sup> Andaya, L. Y. (1981), *The Heritage of Arung Palakka: A History of South Sulawesi (Celebes) in the Seventeenth Century*, The Hague: Martinus Nijhoff, pp. 218-223.
- <sup>233</sup> 位置不明、東部ジャワ内陸部か。
- <sup>234</sup> 東部ジャワ、クディリ近郊。クルッド山とも言う。
- <sup>235</sup> 但し、トルノジョヨに協力した一部勢力はこの後1682年頃までマタラムやVOCに対して抵抗を続けた。
- <sup>236</sup> 上田、上掲書、pp. 301-303.
- <sup>237</sup> 上田、上掲書、pp. 303-306.
- <sup>238</sup> Blussé, *op. cit.* p. 122. このうち、所屬地明示の義務については、例えば福建のジャンク船は船首部分が緑色に塗られ赤い印が付けてあり、広東のジャンク船は船首部分が赤色で青文字が書かれていた。
- <sup>239</sup> Blussé, *op. cit.*, p. 123, Table 2.
- <sup>240</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 111.
- <sup>241</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 96.
- <sup>242</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 98-101.
- <sup>243</sup> ハウベンは、その後VOCへの支払額はさらに増加し、1697年には1542000リアルであったと指摘する。〔Houben, *op. cit.*, p. 65〕
- <sup>244</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 79-85.

- <sup>245</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 129-133.
- <sup>246</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 138-140.
- <sup>247</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 195. 他方で、ジャワ北岸最大の木材生産地レンバンについては、VOCとマタラムの共同支配下に置かれ、主に前者主導で輸出が行われていた。  
[Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 193-195]
- <sup>248</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 167-171.
- <sup>249</sup> ジャヤディニングラット<Jayadiningrat>とも呼ばれる。
- <sup>250</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 171-174.
- <sup>251</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 164-167.
- <sup>252</sup> 現在のアンバラワ<Ambarawa>にあたる。
- <sup>253</sup> Rimmelink, Willem (1994), *The Chinese War and the Collapse of the Javanese State, 1725-1743*, Leiden: KITLV Press, pp. 25, 39-40, Ricklefs, M. C. (1993), *War, Culture and Economy in Java, 1677-1726: Asian and European Imperialism in the Early Kartasura Period*, Sydney, Asian Studies Association of Australia in association with Allen & Unwin, pp. 204-206, 208-209, 211-212, 216-217, Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 166-167.
- <sup>254</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 169-170.
- <sup>255</sup> Ricklefs, M. C. (1993), *War, Culture and Economy in Java*, pp. 204-206.
- <sup>256</sup> ナフテハールは、政治企業家の存在が顕著となったのは、1705年以降としている。  
[Nagtegaal, *op. cit.*, p. 165.]
- <sup>257</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 99.
- <sup>258</sup> *Nederlandsch-Indisch plakaatboek*, vol. 3, p. 37. [19-1-1680]
- <sup>259</sup> ナフテハールは、彼の詳しい略歴について言及していない。だが、クエ・アンコと激しい権力争いを行った事実を考慮すれば、リン・ペーンコが現地の有力者であったことはほぼ間違いない。
- <sup>260</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 100-101.
- <sup>261</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 123-129.
- <sup>262</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 120-122.
- <sup>263</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 155
- <sup>264</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 154-158.
- <sup>265</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 155.
- <sup>266</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, p. 101.
- <sup>267</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 203-204.
- <sup>268</sup> Glamann, *op. cit.*, pp. 162-166.
- <sup>269</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 89-93.
- <sup>270</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 84-85.
- <sup>271</sup> Blussé, *op. cit.*, pp. 94-95, 鈴木恒之「近世国家の展開」、池端雪浦(編)『東南アジア史』山川出版社、(1999)、pp. 141-142.
- <sup>272</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 185-187, 194-199.
- <sup>273</sup> Ricklefs, *A History of Modern Indonesia*, p. 115
- <sup>274</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 220-227, 鈴木、上掲書、pp. 142-143.
- <sup>275</sup> Nagtegaal, *op. cit.*, pp. 226-227, Kwee Hui Kian, *op. cit.* pp. 40-41, 鈴木、上掲書、pp. 142-143.
- <sup>276</sup> 鈴木、上掲書、pp. 155-158、上田、上掲書、pp. 358-360
- <sup>277</sup> 現在のプロボリンゴ<Prabalingga>にあたる。
- <sup>278</sup> Kwee Hui Kian, *op. cit.*, pp. 158-171.
- <sup>279</sup> ただし、同氏は、この点についてはまだ検証が十分ではなく更なる検討が必要であるとしている。[Kwee Hui Kian, *op. cit.*, p. 171]

史料集



【史料 1】 VOC 1200, f. 32-33. [19-4-1653]

《原文》

Des Chinesen nachodas Tinsuijs jonck waarin meer 176 lasten rijs voor de Compa. om op Bata. te vervoeren geschept echter door herde ende contrarie winden gekeert ende over sulcx eenige lasten rijs bedurven is heeft niet meerder dan 137 gelijcke lasten uijtgelevert sijnde de rest over boort gesmeten soo datter 39 lasten comen te differeren, die bij provisie ende tot U Ede. nader ordre op winst ende verlies afschrijven sullen, ges.<=geschreven> jonck leiht rechtevoorts voor Grisse om ladingh t' erlangen ende daermede costij te tenderen, wanneer deselve over t' gemiste als door onnachszaamheijt der Chines ontstaen zijnde aan te houden, zij, van 's gelijcx d' E. Compa. als andere crediteuren van den overledenen Chines Tiegens bij genaemt Intje Japara tot betalinge connen geraeck als sijnde ges. Tinsuij 1150 Ra. aan den selve ten achteren gebleven, des overleden Tiegens joncq die onder opsicht sijne broederen herwaerts volgens aanschrijven der Curateurs Arent van den Helen ende Cornelis Snork over den beslommerden boedel, soude gecomen zijn, is rechtevoorts met ladingh voor Damack doende die in cort en daarmede costij vermeent te gaen, voorts sijn eenige debiteurs van meer genoemde Tiegens met hun prauwen vool rijs reets naar Batavia, gegaen waer voor voorn.<=voorneemde> Curateurs kennisse hebben gegeven, noch eenige andere sijn mede op dese om te laden besich, die over hun schult aangesproken ende oock meestendeel tselve waar te sijn bekent hebben, soodat op hun doen ende laten goet regardt nemen sullen, op dat de gerechtigde aan t haaren mogen comen.

〈和訳〉

華人ナコダであるチンスイのジャンク船は、176 ラストを超える会社向けの米をバタヴィアへ運ぶために航海する。しかし、強い向かい風によって妨害された数ラストがだめになり、137 ラストに満たない量が供出された。残りは船上でだめになった。そのために、39 ラスト分の違いが出た。それは、閣下の指示があるまでは暫定的に帳簿には記載しない。上記のジャンク船は、荷を得るためにすぐグレシクに行き、それを持ってそちら〔バタヴィア〕へ行く。

華人の不注意によって起こったような損失について、その問題〔の解決〕が持ち越しとなっても、上述のチンスイは1150 レアルを残しているのです。彼らは、会社と、亡くなった華人でインチェ・ジュパラとも呼ばれたティーヘンの債権者として、〔損失の〕代償を支払うことが可能である。

管財人アレント・ファン・ドゥン・ヘーレンとコルネリス・スノルクによる、懸案となっている財産にかんする報告によれば、彼の兄弟の指揮のもとでこちらにやってくる故ティーヘンのジャンク船は、荷とともに直ちにドゥマクへ向かおうとしている。さらに、上記のティーヘンの何人かの債務者は、彼らの米〔運搬〕用のブラウ船と共にバタヴィアに向かった。そのために、上述した管財人の報告は、なお他の者が船への積み込みに余念がないことを伝えている。彼らは、彼の負債について告げられ、そのことについて大部分は負債があることが正しいと知っていた。

そういうわけで、彼らに対して権利を持つ者が彼らのもとに来ることができるよう、彼らの1から10すべてを注視する必要がある。

※括弧内は筆者補足

【史料 2】 VOC 1290, f. 141. [5-4-1672]

《原文》

Den sabandaar Kantisarana of Tingsuij heeft toeseegginge gedaan, om d' E: Comp: met de geeiste quantiteit rijs voor Makassar te versorgen maar seide den prijs te laag door Uw EEd: gestelt was, dewijle men nu 14 en 15 RP ginder voor de kojang gaf, doch soude daarom de schepen niet ledig vertrekken laten.

《和訳》

シャーバンドルであるカンチサラナもしくはチンスイは、会社が望んだ量の米をマカッサルに向け手配する約束をした。だが、あちらでは現在1コヤンあたり14~15ルピーで取引されているので、閣下方によってつけられた価格は低すぎると話している。しかし、だからといって、船を空のままに出航させることはできない。

※カッコ内筆者補足

【史料 3】 VOC 1283, f. 1349. [25-2-1671]

《原文》

Edle.heeren brengene desene den schoonsoon en gezondene van keaij Loura Goutij geschooren Chinees en sabander van Padjangeoengan welcke deser voorschrijvinge aen uwer Edlens. heeft geeijst ' t gene hem nieten het cunnen weijgeren dewijle een vande aensienlijkste en machtigste vande hout leveranciers op dese kust is ...

《和訳》

閣下は、それらをムスリム華人でパジャンクンガンのシャーバンドルであるキアイ、ロウラ・ハウテの使いである娘婿に持たせる。彼は、この依頼書を閣下に要求した。彼はこの沿岸の木材供給者のうち卓越して強力な一人であるので、彼にそれを拒むことはできない。

※括弧内は筆者補足

【史料 4】 *De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie*, vol. 7, p. 204.

《原文》

De rys is ordinary door de gouverneurs en inzonderheit door Naaija Tsitra apart verpagt, dog tot ongelyke pryzen, zynde de laatste en de hoogste verpagtinge geweest 500 realen in een jaar, daar Sipta Wangsa de pagter was, bestaande haar privilegie daarin, dat geen rys of pady uytgevoert mogt worden, die niet bleek uyt handen van de pagters zelfs gekogt te zyn. De Chineese Sabanderye bestond eygentlyk daarin, dat de Chineese Sabandaar of pagter, genoot de tollen der coopmanschappen, die door de Chinesen en geschoren Chinesen af en aanquamen gebragt te worden; de geregtigheyd van koopen en verkoopen der vaartuygen onder malkanderen. De geregtigheyd van zout en bamboesen, van 't arak branden, van 't munten der Javaanse pitjens, van 't toppen, van de Chineese hooftgelden, die gereguleert werden naar 't vermogen van de huysgesinnen, de hoogste op 5 realen en zoo voorts afgaande ..... waarvoor de Sinees Saatsia seven agtereenvolgende jaren twaalfhonderd realen 'sjaars en twee jaren daarna 1600 realen jaal. betaald heeft.

《和訳》

米は、大抵、長官、特にナーヤ・チトラによって別々に徴税請負に出されている。しかし、その額は様々である。最新かつ最高の請負額は1年500リアルであり、シプタ・ワンサが請負権を持っている。彼らの特権には、〔徴税を〕請け負っている者自身から購入されていることが明らかではない米ないし籾米は輸出できないというものがある。

華人シャーバンドルは、実際に、華人やムスリム華人によって持ち込まれたり持ち出されたりする商品の取引における関税を、華人シャーバンドルもしくは請負人が享受する中にある。互いの間における船舶売買の権利についてもそうである。塩や竹、アラク酒、ジャワのピチの鑄造、桶、世帯の資力によって規定され最高が5リアルで以下減額される華人の人頭税……、それらの〔権利の〕ために華人のサーチアは、7年間は毎年1200リアル、以後の2年は毎年1600リアル支払っている。

※括弧内は筆者補足

【史料 5】 *De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie*, vol. 7, pp. 156-157.

《原文》

De Soesoehoenan en zijne ministers waren, na hunne terugkomst op Japara, schier onafgebroken, gedurende de laatste dagen, bij Speelman geweest om over de zaken des rijks te confereren, en syn verscheydene ordres geëxpedieerd, o. a. heeft de Soesoehoenan zyn getrouwen Keeij Sindy, nu genoemd Aria Ourawan, gebeneficeert met het Gouvernement van Soerabaya, met ordre de drie tommogons van daar herwaarts op te zenden, Mas toe ampel, Gressée te laten gobieden en den geschoren Chinees Raksa Sadana, voormaals Sabandaar tot Sourabaya en nu vereert met den naam van Tommogon Marta Raksana, de administratie syner incomsten aan te bevelen, ……

《和訳》

ススフナン [=マタラム王] と彼の大臣達は、彼らがジュパラに戻った後のここ数日間、絶えずスペールマンのもとへ来て、王国のことについて協議し、彼の様々な命令を送った。すなわち、ススフナンは、彼の忠実な臣下であり現在はアリア・オウラワンと呼ばれているキアイ・シンディにスラバヤの統治を任せ、当地の3人のトゥムンゴンにはこちらに移るよう命令を送った。そして、マス・トゥ・アンペルにグレシクの統治を行わせ、以前スラバヤのシャーバンドルであったムスリム華人ラクサ・サダナにトゥムンゴン・マルタ・ラクサの名を与え、王の収入の管理を任せた。

※括弧内は筆者補足

《原文》

…… hebbende de Maccassaren, met de hulpe van de Maduresen haar nu genoegzaam meester van de gantsche Oosthoek van Java tot aan Sidajou gemaakt, en staan nogh al verder progressen te doen, want nu de Javanen met eene te lande terugh gegaan sijn, sullen se sonder verlet connen comen waar se maar alhier willen 't welck bereets veroorsaackt dat veele Chinesen van dese oostcust, naer Bantam als Batavia vluchten, soo datter hier nu niets te verrichen valt sulcx 't cargasoentie cleeden waar naer voorheene groot geroep was moet blijven leggen, ……

《和訳》

マカッサル人は、マドゥラ人の助けを得て、今やシダユまでのジャワ東端のほぼ全域を支配し、さらに拡大させようとしている。というのは、今やジャワ人は陸上で後退しているからである。彼らはここを目指しているために。すぐに来ることができるだろう。

そのことは、既に次のことを引き起こしている。すなわち、これら〔ジャワ〕東岸の華人がバタヴィアとバンテンに避難しているため、何もできなくなってしまった。以前はそちら〔ジャワ東岸〕へと大量に向けられていた積み荷の綿布は、留め置かれなければならないのである。

※括弧内は筆者補足



【史料 7】*Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1676, p. 207.*

《原文》

Dewyl de Macassaaren met hulp der Madureesen hun genoechsaam meester van de gansche Oosthoek van Java hadden gemaect, waren de meeste Chinese ingesetenen nae Bantam en Batavia gevluucht, soodat self op Japara nu niet althoos te verhandelen viel, ...

《和訳》

マカッサル人は、マドゥラ人の援助で、ジャワ東端のほぼ全域を支配してしまった。そのために、華人住民の大多数は、バンテンやバタヴィアに避難した。このため、ジュパラでは、全く商売ができない状態になっている。

※括弧内は筆者補足

【史料 8】*Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1676, p. 328.*

《原文》

de jachjes, Snauw en Granaatappel, hadt men tot nogh niet derven daar lageeren om de negotieboeken, etc. herwaerts te brengen, wyl de Maccasaaren alomme seer woeden en insonderheyt veel Chinesen zonder quartier dootsloegen en waaronder ook de sabandar van Javana, genaamt Tsoeko, dewelcke nogh 1323 guldens aen de Compagnie schuldigh stondt en syn weduwe althans op Batavia present en deswegen aansprekelyck was.

《和訳》

小ヤハト船スナウ号とフラナータッペル号を帳簿等をこちら〔バタヴィア〕へ運ぶために出航させられなかった。なぜなら、マカッサル人が至るところで猛威を振るっており、特に、多くの華人を容赦なく殺害しているからである。殺害された者の中には、ツーコという名のジュワナのシャーバンダルがいた。彼は会社に対して 1323 ギルダの負債を抱えており、ともかくバタヴィアにいる彼の未亡人は、その〔返済の〕義務がある。

※括弧内は筆者補足

表

[表1]ジャワ北岸地域発バタヴィア行船舶総積量

西暦年	非VOC船舶	VOC船舶	合計
1640	4110	0	4110
1675	5380	7747	13127
1685	5180	3625	8805
1695	4875	5457	10332
1705	2805	4383	7188
1716	2470	7895	10365
1725	2160	10405	12565
1735	2485	13668	16153
1775	6500	12200	18700

[Nagtegaal 1996: Table 6]より

Daghregister Bataviaを基に作成されたもの

単位は全てコヤン[Nagtegaalは1コヤン=約1750キログラムと換算

[表2]ジュバラ発バタヴィア行物品表〔非VOC船舶分〕

	砂糖	黒砂糖	白砂糖	氷砂糖	粉砂糖	練砂糖	砂糖(左記以外)	米	籾米	塩	木綿、木綿糸	青色染料(藍?)	鹿皮	水牛皮
1824								40ラスト						
1831										数量不明				
1832								10ラスト						
1834	数量記載なし	数量記載なし						10ラスト						
1837		100bos,1800ピクル,3ラスト						39ラスト	300bos	65ラスト				
1838		1200ピクル						9ラスト,60袋	4ラスト					
1840		600ピクル	100ピクル					107ラスト,209コヤン						
1841	1000bos+		400					533コヤン,187ラスト+		23.5ラスト+				
1844	数量記載なし	360箱						数量記載なし	数量記載なし					
1848										22ラスト				
1853		591ピクル,92カテー							900bos					
1857			25ピクル							2ラスト				
1861	3090bos,239ピクル,70カテー	50ピクル	832ピクル,70カテー					1ラスト	2ラスト	1.5ラスト				
1863	184箱,31600bos,257ピクル	200bos,789ピクル,38カテー	342ピクル,48カテー	29.5ピクル				43ラスト	100bos			2本		
1864	18300bos,500本	305箱,2400bos,100ピクル	805箱,1298ピクル			2000bos		84ラスト		47ラスト				
1865	3500bos	150箱,15358bos,4200groot	104箱					79.75ラスト	2000bos	51ラスト				6
1866	1000bos	915箱,6000bos,285ピクル	361箱,326ピクル	428箱,234ピクル	90ピクル			25ラスト	1000bos	5ラスト	10ピクル,400			
1867	20100bos,4000cleenbos,10	792箱,70ピクル	186箱,140ピクル	160箱,81ピクル	50箱	600箱,10500bos		11.5ラスト			150ピクル	4ピクル		
1868	14400bos,8700	799箱	8702箱	235箱		1123箱,10000	90箱,500bos	23ラスト		22.75ラスト				100
1869	15400bos,4500	8911ピクル	8148ピクル,400(cle	148ピクル		730ピクル,736	2800bos	58.5ラスト	300bos	3ラスト				
1870		1180箱,1870ピクル	2445箱,5650ピクル	600箱,1870ピクル				44.5ラスト			4ピクル			
1871	1850bos,2000	1400箱,1180ピクル,50bos	1282箱,1670ピクル	203箱,73ピクル		10箱		80.825ラスト					400	600
1872		990ピクル	150箱,2158ピクル	87ピクル		300bos		86ラスト						
1873		1449ピクル,330箱	322箱,2338ピクル	7ピクル		183箱,30ピクル,300bos		96ラスト	800bos		10ピクル		7ピクル	
1874		2810箱	2582箱	143箱	290箱	40箱		103ラスト	200bos	8ラスト				
1875		772箱	1854箱	132箱		500		30.5ラスト	4570bos	23ラスト				
1876	800bos,14000	1007箱, 581ピクル	832箱,949ピクル	190箱,143ピクル		2000	1500	86.75ラスト	400bos	15.5ラスト				
1877		1500						37.75ラスト	1500bos	13ラスト				
1878	351箱,930bos,30本,2000							98.25ラスト	1200bos	61ラスト	4ピクル	8ピクル		200
1879		185ピクル					1700bos	7.5ラスト	150bos	10.5ラスト				120
1880	40箱,350本	30箱						91.5ラスト	100bos	17ラスト				250
1881	39箱,4ピクル,10020箱・bos	115箱						84.375ラスト	750bos	33.5ラスト	0.5ピクル			
1882	28箱,150箱・bos							61.875ラスト	400bos	27ラスト				

Dagh-register Batavia より作成(※但し、1882年は1月-6月分までのデータ)

・各物品とも1年間の合計量

・各単位については以下の通り

1bos=1束 1ピクル=125lb 1カテー=1.25lb bos=0.1ピクル [cf. lb=0.494kg] 1コヤン=米:28ピクル、塩:40ピクル 1ラスト=米:24.5ピクル、塩:コヤンと同価値

[Knaap, G (1996) Shallow Waters, Rising Tide. Leiden: KITLV Press.より]

・cleenは「小」、grootは「大」を意味する

・“+”のついたものはその他に数量が記載されていない分を含む

・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない

115-

[表3] グレシク発バタヴィア行物品表〔非VOC船舶分〕

	砂糖	黒砂糖	白砂糖	神砂糖	砂糖(左記以外)	米	籾米	塩	木綿、木綿糸	青色染料(藍?)	鹿皮	水牛の皮
1636						21.5ラスト+		数量記載なし				
1640						10ラスト		数量記載なし				
1641	数量記載なし					17.5ラスト,76コヤン						
1644	数量記載なし					2ラスト		数量記載なし				
1648						24.75ラスト,10カテー	30bos					
1661	8500bos	2ピクル,7800bos	577ピクル,27カテー	20000bos,10000		2.5ラスト			7.5ピクル			
1663	75000bos,30000clenebos		40箱	38000bos,77000		171ラスト	1500bos	123ラスト			200	
1664	200000bos,3500grotebos,21800cleneb	20000bos,10箱			158000	63.5ラスト		9ラスト				
1665	60000clenebos	38箱,180ピクル,102010bos				87ラスト		26ラスト	40ピクル			100
1666	93000bos,2000Clenebos	50箱,50ピクル,25箱,47550bo	20箱		1000	74.375ラスト		2ラスト		3ピクル		
1667	5000bos,11000clenebos	90箱		73400bos,86000clenebos,10000		63.75ラスト		10ピクル	107ピクル			40
1668		14100 99箱,110ピクル	20箱		85154 1000bos	99.875ラスト		23ラスト	15ピクル			
1669	1000(clean)	208ピクル	70ピクル	31500,13000(clean)	100bos,2000	128.625ラスト			5ピクル		900	
1670		58箱	6箱	54000,19000(clean)	100bos	133.5ラスト	300bos	5ラスト	29ピクル	2ピクル	250	490
1671	30000clenebos	18ピクル,40箱	50箱	65900,11000(clean)		127.375ラスト	300bos	9ラスト	25.5ピクル		500	110
1672		29箱,259ピクル		10500bos		47.75ラスト			13ピクル		200	220
1673		457ピクル	20ピクル	120箱,4000		103.375ラスト		4.5ラスト	55ピクル	10本	500	288
1674		275箱				185.5ラスト		25ラスト	20ピクル	42本,4ピクル	900	1465
1675		179箱	35箱		121800 7000	439.5ラスト	1200bos	11ラスト	80ピクル	53本		1780
1676					500 58800	71.25ラスト	800bos	16ラスト				
1677	142750bos,88箱					209.375ラスト	500bos	27ラスト	5ピクル	16本,2ピクル	200	
1678	59600bos,40箱,49200					270.5ラスト	900bos	26ラスト	3ピクル	5本	120	210
1679	51500bos	70箱		21000 21900bos,108200		44.25ラスト	300bos	38.5ラスト	1.5ピクル		575	700
1680		12ピクル,0.75ラスト		22000 58箱,90ピクル,1200		11ラスト		37.75ラスト			725	1397
1681		122650 22箱,1ラスト				68.75ラスト		30.5ラスト			250	950
1682		756				18ラスト		10.6ラスト			1200	120

Dagh-register Batavia より作成

・各物品とも1年間の合計量

・各単位については以下の通り

1bos=1束 1ピクル=125lb 1カテー=1.25lb bos=0.1ピクル [cf. lb=0.494kg] 1コヤン=米:28ピクル、塩:40ピクル 1ラスト=米:24.5ピクル、塩:コヤンと同価値

[Knaap, G (1996) Shallow Waters, Rising Tide. Leiden: KITLV Press.より]

・cleanは「小」、grootは「大」を意味する

・“+”のついたものはその他に数量が記載されていない分を含む

・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない

[表4]ジュバラ発バタヴィア行木材数量表

	梁材	板材	隅材	その他	総数
1624				数量不明	数量不明
1625				数量不明	数量不明
1626				数量不明	数量不明
1632				数量不明	数量不明
1634				数量不明	数量不明
1648		1400+			1400+
1657				数量不明	数量不明
1659	2160	4502	191	132+	6985+
1661				数量不明	数量不明
1663		500		数量不明	500+
1664		1550		数量不明	1550+
1665	1181	2400	113	数量不明	3694+
1666	2172	4230		180+	6582+
1667	7979	8989	618	6545	24131
1668	5820	21194	3295	1579	31888
1669	5952	12744	1197	26749	46642
1670	4543	12869	570	667	18649
1671	6834	11746	4297	481	23358
1672	10929	4127	1523	1714	18293
1673	12331	39747	1479	3884	57441
1674	6369	28822	1902	5058	42151
1675	11586	6479	2682	3282	24029
1676	7307	9495	1555	900	19257
1677	2729	1075	400	1241	5445
1678	1084	290		260	1634
1679	2679	990	13	713	4395
1680	1165	5311		1250	7726
1681	2860	3046		100	6006
1682	257	2550	704	600	4111

Dagh-register Bataviaより作成(※但し、1682年は1月-6月分までのデータ)

・“+”は数量不明分が含まれることを示す

・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない

[表5]バタヴィア発砂糖輸出額[VOCおよび非VOC船舶分]

	ペルシャ	広南	トンキン	日本	中国	オランダ本国	その他	合計
1641	金額不明							金額不明
1653	金額不明							金額不明
1663	28262.1	12.5	237.5				75	28587.1
1664	62105.7	150	372.5			1938.4		64566.5
1665	840	1081.3	1050				327.5	3298.8
1666	19240.5			6942.2	368.9	59000	150	85701.6
1667	2768.8		37.5	17739.6		9080.6	303.2	29929.7
1668	144628.6		112	22808.4+		98062.2	1147.5+	266758.7+
1669		9337.5	7425	98630.6		252517.1	4773.1	372683.3
1670	46714.6		1593.3	40018.2+		60325	947.6	149598.7
1671	25769.2	54527.5		136218.6	2187.5	177336.4	1239.5	367278.7
1672	14070.7	9292.5	722.8	10967	500	12813.5	3334.5+	51701+
1673	5000	46120	119.1	29956		18678.9	6687.9	106561.9
1674	60325.8	11005	1159	64462.3		84190	7991.5	229133.6
1675	7338.9	10700	900.5	474.7		69465.1	2459.7	91329.9
1676	24191.5	18552.5	749.1	813		35809.3	8105.7	88221.1
1677	7626.5	2140	110.5	794.1	78.7	9393.3	3283	23426.1
1678	9093				3840		3756.7+	16689.7+
1679				508.1	7955	9600.2	4415+	22478.3+
1680	6454.5						3012.3	9466.8
1681			25		1500		4829	6354
1682		10012.5		826.1			1037.7	11876.3

Dagh-register BataviaおよびGenerale Missiven より作成(但し、1882年は1月-6月分までのデータ)

単位は全てギルダー

・“+”は金額不明分の額が含まれることを示す

・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない



[表6]バタヴィア発ジュパラ行物品貿易額〔非VOC船舶分〕

	綿布	陶磁器	銅	アヘン	茶砂糖	粉砂糖
1636	金額記載なし〔数量:85.5籠〕					
1637	金額記載なし〔数量:16籠〕					
1640						
1641	5583.875+					
1644	927+					
1647	292					
1648	2039+					
1659	金額記載なし〔数量:6袋〕					
1661	4938.5	22				
1663	4962	95	22			
1664	2087	204.5				
1665	2271	10				
1666	2499	12.5				
1667	29345	340				
1668	1999	167	330	10		
1669	1648	257	506			
1670	700	38	1180	63		
1671	2811	30	4480	200		
1672	2804		1200	300		
1673	3098	260	1072	600		
1674	2364	286	3168	2775		
1675	777	9	2654	1490		
1676	4344	38		3472		
1677	2779	307	88	1170.5		
1678	3210	353	420	4965	42	12
1679	1329	10		3350		
1680	524	20				
1681	622	2				
1682	100			300		

Dagh-register Batavia より作成(※但し、1682年は1月-6月分までのデータ)

・単位は全てレイクスダールデル

・"+"のついたものはその他に額が記載されていない分を含む

・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない

[表7]バタヴィア発グレシク行物品貿易額〔非VOC船舶分〕

	綿布	陶磁器	銅	アヘン
1640	金額記載なし			
1641	4232			
1644	2147			
1647	47.5			
1648	2213.5	55		
1661	2762.5			
1663	1397.5	155		
1664	781	50		
1665	1334	166		
1666	3648.5	63		
1667	939	158		
1668	4356	68	226	
1669	1356	76	50	
1670	1161	171	240	
1671	740	66	360	
1672	4642		3125	430
1673	2585	404	432	
1674	3219	777	128	450
1675	2069	268	140	2710
1676	764	380	1000	280
1677	4195	449	240	3564
1678	5623	189		5057
1679	2792	34		1100
1680	40			
1681	451	33		
1682				750

Dagh-register Batavia より作成(※但し、1682年は1月-6月分までのデータ)

- ・単位は全てレイクスダールデル
- ・“+”のついたものはその他に額が記載されていない分を含む
- ・空欄部分は統計がないことを示すもので、0を意味するものではない

[表8]砂糖生産従事者の職務および人数

①製糖所経営に関わる幹部

職務	人数
PortiarまたはPortiaと呼ばれ、製糖所全般を統率指揮自ら経営主である者や俸給を受けている者が存在	1名
Schryfer(書記)と呼ばれ、帳簿を保管して収入・支出を司り経営の内容を明らかにする	1名
Groot Mandoor(監督長)と呼ばれ、耕作関係を差配する甘蔗畑を指定して耕作人の監督者に命令を下す	1名
Mandoor Gabeeと呼ばれ、Potiaの下で甘蔗を搗碎き糖汁をとる仕事を差配甘蔗の伐採や糖汁しぼりを監督する	1名
Karren Makarと呼ばれる甘蔗を搗碎く臼を整備することを主要な任務とする	1名
Smid(鍛工)と呼ばれる製糖場で使用金属器具を整備する	1名
Hoofd Buffelwachter(水牛監視長)と呼ばれるジャワ人糖汁しぼりに使役する水牛を飼育して働かせ、監視する	1名
Ientingと呼ばれる公司、製糖所、別棟での諸事万端の処理しや連絡にあたり、米や油を準備する	2名
Mandoor Borrongと呼ばれる一定の金額で製糖の全工程を請け負う	2名
Mandoor(監督)と呼ばれBoedjanger(ジャワ人下級労働者)を監督する	3~4名

②Mandoor Borrongの管理下で労働を行う者

職務	人数
葉刈り人、糖汁搾りに使役する水牛飼育人	2名
甘蔗伐採人、甘蔗運搬人	12名
糖汁作り人	6名
水運搬人	1名
糖汁をとった後の甘蔗屑の運搬人	1名
糖汁作りに使役する家畜の飼料を用意する者	1名

③粗糖作りおよび精製に関わる者

職務	人数
糖汁を煮詰める人物(華人)	2名
精製人	1名

④粗糖作りおよび精製に付随する作業に関わる者

職務	人数
砂糖を入れる袋を作る者	1名
薪木の伐採や運搬をする者達の長	1名
砂糖や糖汁を町へ運ぶ舟の舵手	1名
炊事人	1名
Toekang Warrongと呼ばれ、生活必需品やアヘンを買入れる人物	1名
Toekang Warrongの下で働く華人	2~3名
耕作にあたる一般華人労働者	2名
植え付けにあたる一般華人労働者	3~5名

⑤ジャワ人下級労働者

職務	人数
甘蔗畑で植え付け・伐採を行い、甘蔗の表皮を剥ぎ甘蔗を運搬したりする者	50~55名
耕作や甘蔗を碾く者	25~28名
甘蔗を切り乾燥させたり薪木を積み上げるなど屋内作業に従事する者	10~12名
砂糖や糖汁の運搬夫	8名
水牛監視人	3名
薪木および竹木の伐採人	18~20名
水牛車の御者	人数不明
舟の漕ぎ手	人数不明
能力のない者や疲労した者の交代要員	30~40名

[長岡 1960]より作成



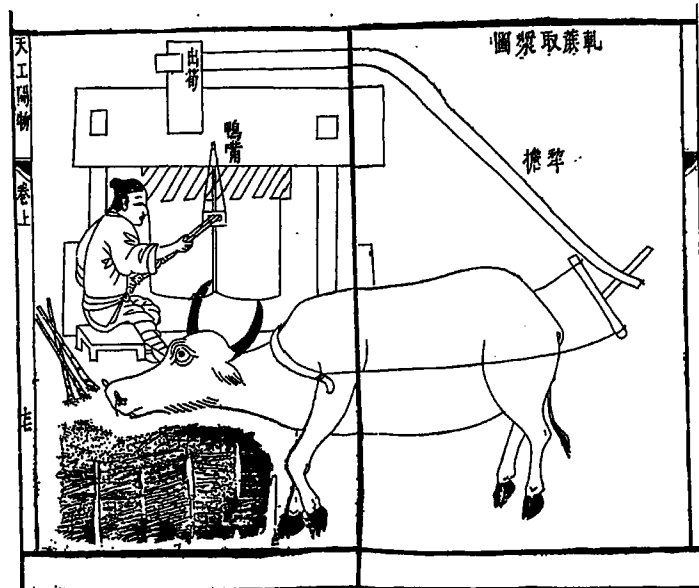


図1 「天工開物」に見られる<sup>たてがた</sup> 豎型雙ローラー甘蔗压榨機

宋應星『天工開物』甘嗜，第六卷（崇禎10年（1637）序刊の初版本，靜嘉堂文庫所蔵）に掲載されている畜力駆動の豎型雙ローラー甘蔗压榨機の挿図であるが、これは世界で最初の豎型雙ローラー・ミルの図でもある。この図版は压榨工程を如実に描き、(1)二つのローラーに斜め向きに刻まれた齒車装置、(2)左側の長いほうのローラーを主軸（出荷）にし、それに横木（擧擧）を取り付けて、原動力である円軌道に沿って歩く水牛から直接動力を伝えて、ローラーに刻まれた齒車が噛み合うことによって回転する、(3)甘蔗を一回压榨したのち、甘蔗粕を圧力送りの役割を果す嚙嘴という甘蔗粕投入装置に差し込んで、ローラーの間に供給しその汁液を压榨する、という三要点を明確にすることにより、この装置が実際に如何なる構造を持ち、如何に作動したかが一目瞭然である。二つのローラーは木製であるが、三ローラーの場合と異なり、甘蔗は一度に一ヶ所でしか搾れない。

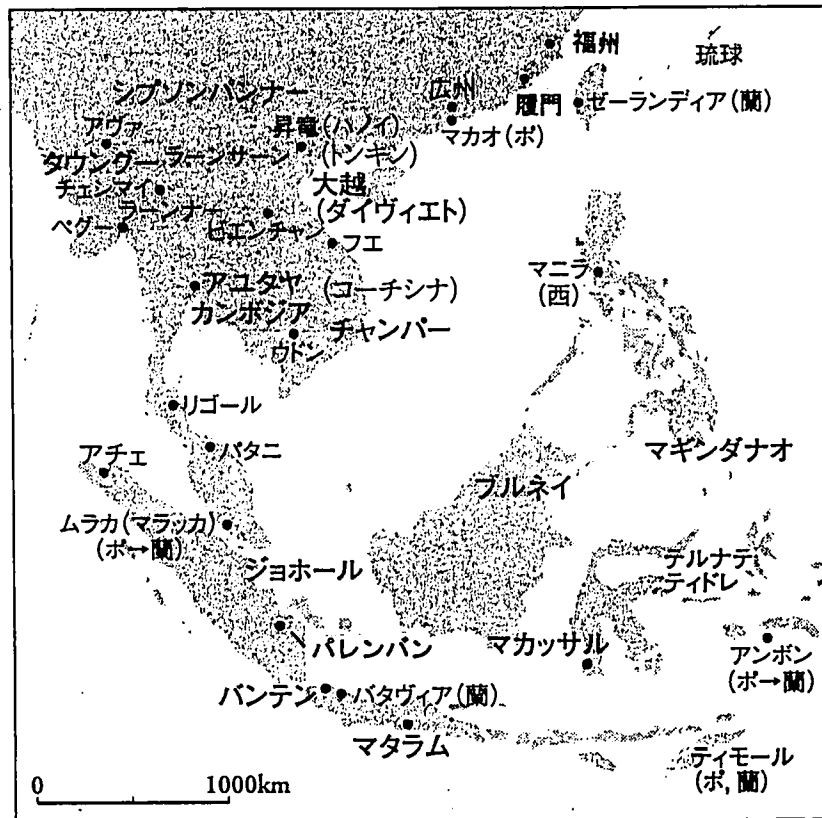
ダニエルス（2001）より

地図

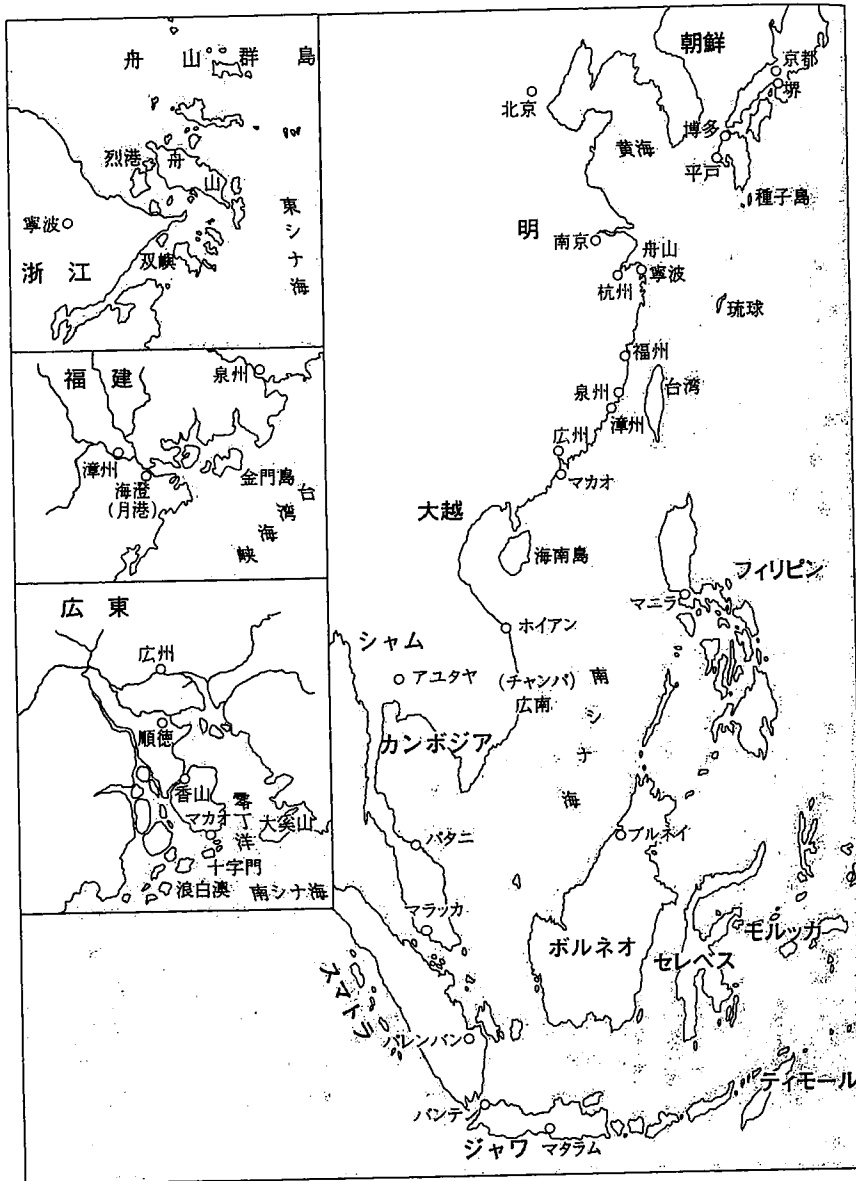
地図1 大航海時代の東南アジア

平凡社 [新版]東南アジアを知る事典より

[一部筆者加筆]

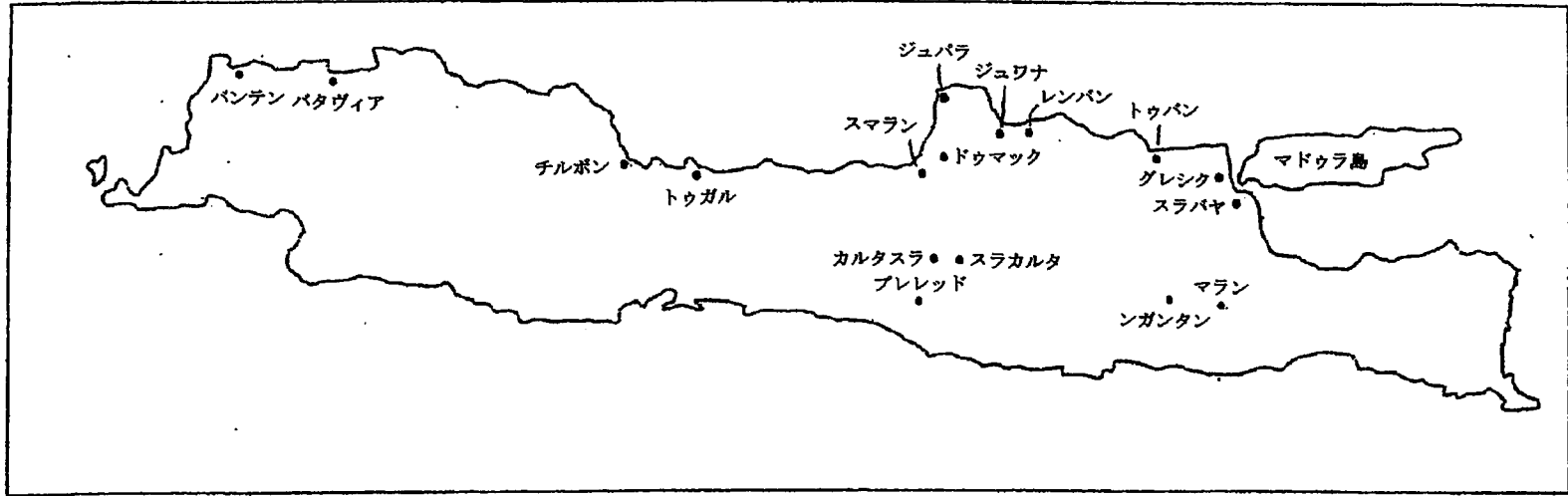


注一ポ:ポルトガル, 蘭:オランダ, 西:スペイン

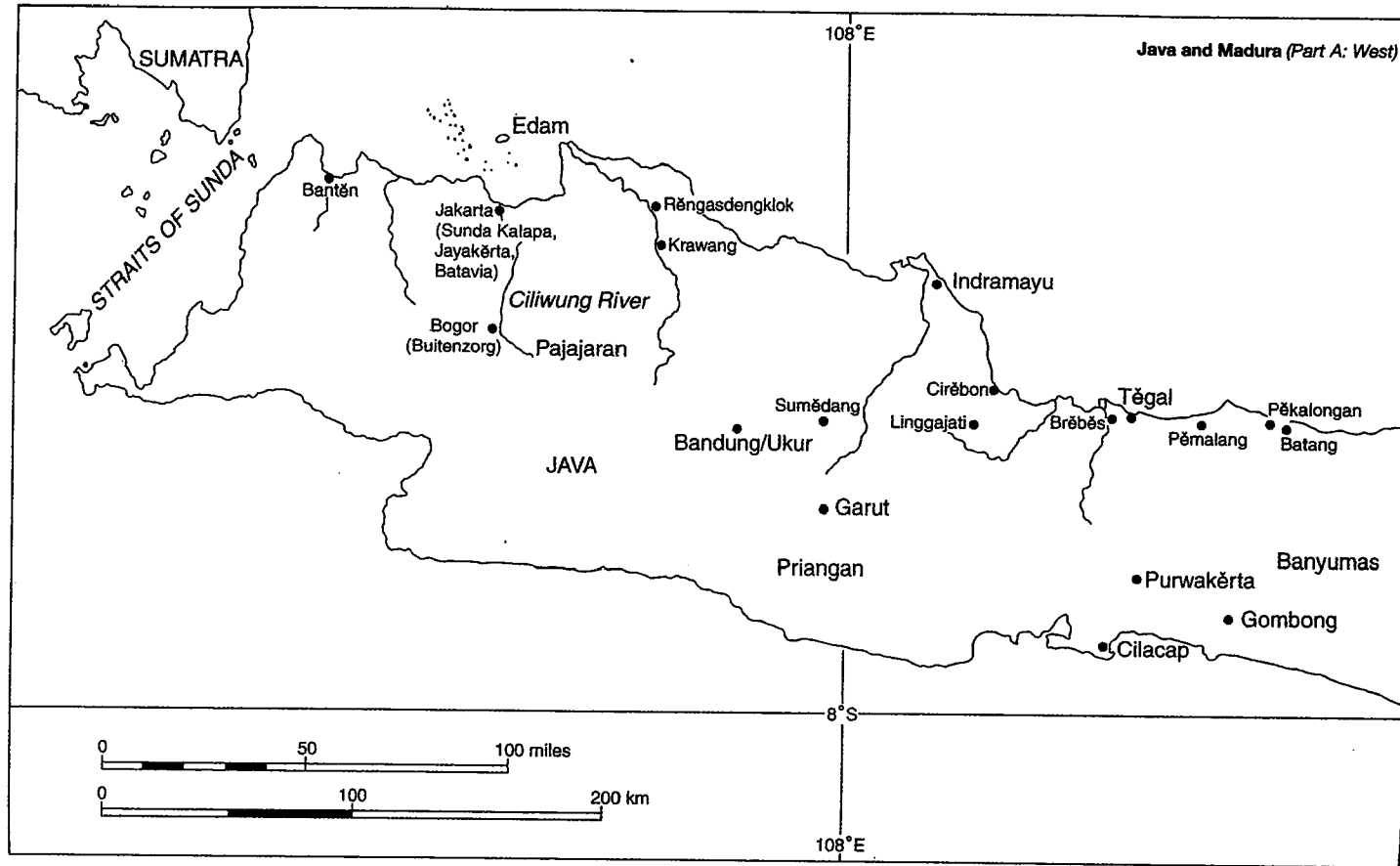


地図2 南シナ海貿易の拠点  
上田(2005)より

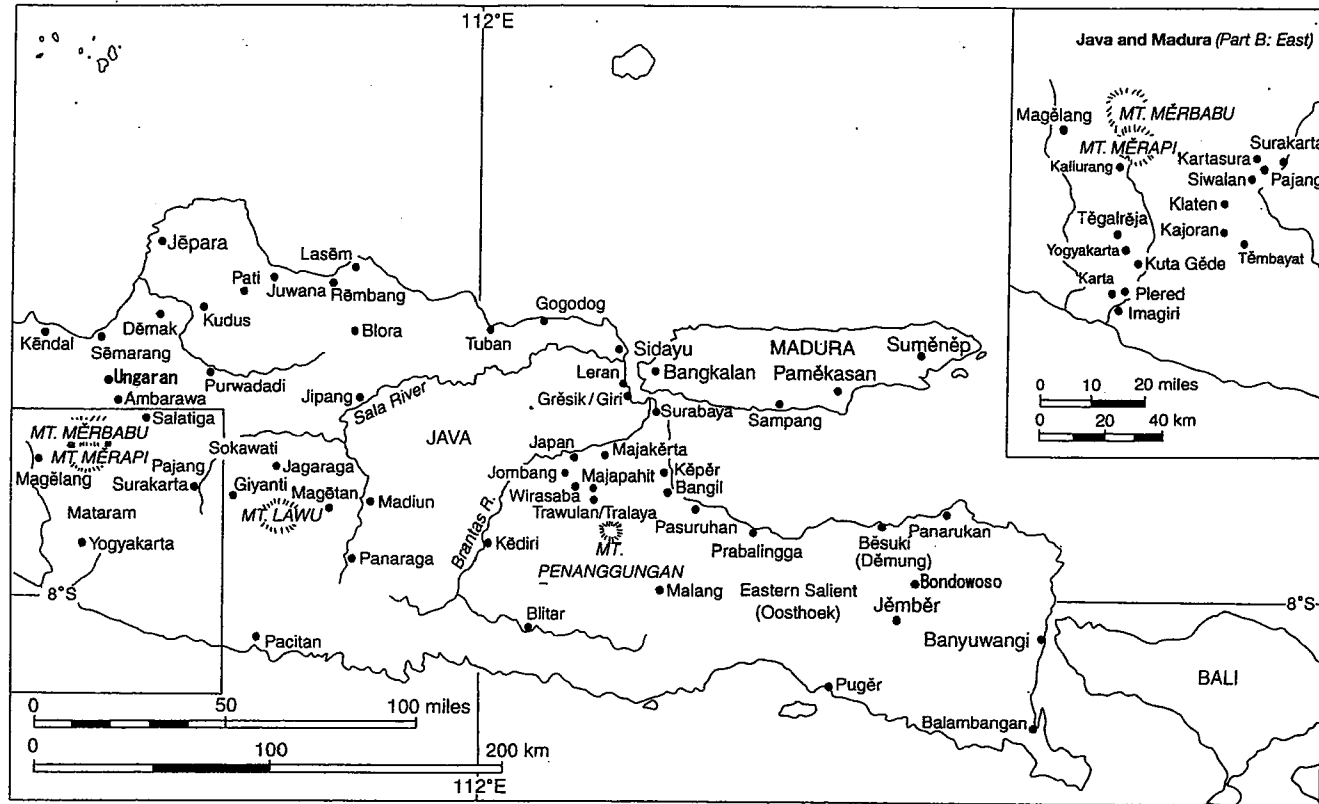




地図3 ジャワ島、マドウラ島



地図4 ジャワ島西部  
Ricklefs (2008) より



地図5 ジャワ島東部、マドゥラ島

Ricklefs (2008) より

一部筆者加筆



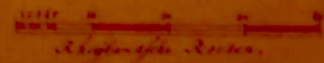
Kaarte  
Van t'Fort en Stad  
J A P A R U A

Nuttigste de aanlegging der poorten, de alle  
de plan en order van de twee Conden fortificatiën  
in den Jaere 1677 te Japarua geschildert

1. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
2. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
3. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
4. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
5. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
6. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
7. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
8. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
9. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
10. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
11. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
12. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
13. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
14. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
15. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
16. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
17. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
18. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
19. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
20. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
21. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
22. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
23. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
24. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
25. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
26. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
27. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
28. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
29. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
30. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
31. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
32. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
33. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
34. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
35. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
36. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
37. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
38. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
39. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
40. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
41. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
42. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
43. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
44. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
45. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
46. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
47. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
48. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
49. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën  
50. De poort van de Conden fortificatiën van de Conden fortificatiën

A. J. van der Meer  
1677

地図6 1677年ジュバラ  
Nationaal Archief  
VEL 1271 より  
一部筆者加筆





地图6  
地图部分  
—部案者加筆

J A P A R A

Muzgatoers de aanwysingh der posten, so als  
de selve op ordree van de Heer Cornelis Speelman  
en den Jaren 1677 beset geweest sijn.

- a J Japanfche Ouydenijst
- b De Ouydenijst van den Boegh
- c De deuringh van den Boegh
- d De Afsonding van den Boegh door den Admiral met  
twee Punten verstaet.
- e De woonwonde twee punten.
- f De twee punten beset met de Comp van den Luytenant Caspar  
Moeny onder de Brigade van den J. Joan Alberto floor.
- g De wooning van den Capitein Joan Alberto floor.
- h De Mand van de Rivier.
- i De Post van den Luytenant Gyslagh Jelsius onder de Brigade van den
- k De post van den Luytenant Joan Spilbergh onder ditte.
- l De post van de Swarte Maerghood. .... onder ditte
- m J Suedenijst
- n De post van den Luytenant Dames Costica onder den Brigade  
van den Capitein Willem Haerfingh.
- o De post van den Luytenant Maestrenis de Jureseij
- p De ooydenijst van den Boegh.
- q De post van den Luytenant pieter wolf onder de Brigade van den  
Capitein Haerfingh.
- r De post van den Luytenant Arant Brinca onder ditte Brigade.
- s De post van den Capitein Remela Matres. .... onder ditte Brigade  
t een Drooge gracht, die ten lang derofst, dog vier sijn diep.
- v De Zee
- w het Straete
- x De post van de Comp Maloyard onder de Brigade van den  
Capitein Brinca Eghes
- y De post van den Luytenant Martinus van Ingen onder ditte Brigade.
- z wooning van den Comp Maloyard alhier van den Comp van den  
1 De wooning van den Capitein Haerfingh Eghes
- 2 De Schoneffde Straete
- 3 Een Punt, beset met een Corporaalschap van de Comp onder den Luytenant  
Maestrenis van Ingen.
- 4 De post van den Comp Nicolaes Feij onder de Brigade van den Capitein  
Willem Haerfingh.
- 5 De eerste punt van de gracht, beset met een Corporaalschap van de  
Comp onder den Comp Maestrenis van Ingen.
- 6 De wooning van den Capitein Willem Haerfingh.
- 7 De posten of Maede
- 8 De posten
- 9 De wooning van den Comp
- 10 J Gouvernementshuys van de Savanna
- 11 De post van een Corporaalschap van de Comp onder den Comp Nicolaes Feij,  
kennende de gracht van den Savanna Gouvernements
- 12 het E Comp van den
- 13 De post van den Luytenant Pieterman van Dyck kennende het gracht  
van den Heer Admiraal.
- 14 De post van de Comp Baynes
- 15 De dubbele binnen besetene Schipsteden  
Met twee Ouydenijst besetene Savanna  
Met twee van out of gaen Ouydenijst plaatsen  
Met twee Wigen Savanna besetene plaatsen  
Met twee punten
- 16 De posten afsonden van de twee punten e, is het  
Judenijst van binnen getuigenissen op N 15

地图6  
说明部分



地図 6 説明より

Kaarte

Van t' Fort en Stad

JAPARA

Musgadens de aanwysingh der posten, So als  
de selve op ordre van de Heer Cornelis Speelman  
in den Jaren 1677 beset geweest syn.

- a T Japansche Cruythuys
- b De Stylte van den Borgh
- c De doceringh van den Borgh
- d De Afsniyding van den Borgh door den E. Admiraal met  
twee Punten vorstenkt
- e De voornoomde twee punten
- f De twee punten beset met de Comp van den Luytenant Caspar  
Attemeyr, onder de Brigade van den E. Joan Alberts' sloot
- g De wooningh van den Capit. Joan Alberts sloot
- h De Mond van de Rivier
- i De post van den Luytenant Guilyam Libout onder de Brigade voorn.
- k De post van den Luytenant Joan Jselbergh onder ditto
- l De post van de Swarte Mardykers ..... onder ditto
- m 'T Sukenhuys
- n De post van den Luytenant Dames Lafluer onder den Brigade
- o De post van den Luytenant Martinus de Larosorij
- p De opgangh van den Borgh
- q De post van den Luytenant Pieter Wolf onder de Brigade van den  
Capt. Harmen Egberts
- r De post van den Luytenant Arent Bremer onder ditto Brigade
- s De post van den Capit. Kimela Hatico .... onder ditto Brigade
- t een Drooge Gracht, die den Borg doorsnyt, dog niet seer diep
- v De Zee
- w het Strandt
- x De post van de Comp. Maleyers onder de Brigade van den  
Capit. Harman Egberts
- y De post van den Luytenant Martinus van Jngen onder ditto Brigade
- z Wooning van Sommige Malayers alhier van Samarang gevlugt

- 1 De wooning van den Capit. Harman Egberts
- 2 De Chineesche Straat
- 3 Een Punt, beset met een Corporaalschap van de Comp onder den Luytenant  
Martinus van Jngen
- 4 De post van den Luyt. Nicolaas Feyt onder de Brigade van den Capit.  
Willem Harsingh
- 5 De tweede punt aan de Stads mieuren, beset met een Corporaalschap van de  
Comp. onder den Luyt. Martinus van Jngen
- 6 De wooningh van den Capit. Wilhem Harsingh
- 7 De passen of Markt
- 8 De pagood
- 9 De Tournoybaan
- 10 T Gouverneurshuys van de Javanen
- 11 De post van een Corporaalschap van de Comp. onder Luyt. Nicolaas Feyt,  
dienende tot guarde van den Javaansen Gouverneur
- 12 des E. Comps. Logie
- 13 De post van den Luytenant Tieleman van Ewyk dienende tot Guarde  
van den Heer Admiraal
- 14 De post van de Compe. Bajers

N. De dubbelde linien betekenen Palissaden

Met Root Afgeset betekent Minuragie

Met groen ; Land of groen bewassen plaatsen

Met geel ; Wegen, Straaten en betreden plaatsen

Met Blaauw ; water &c

N. onder het afsteeken van de twee punten e, is het  
sukenhuis na binnen getransporteert op No. 15

[縮尺図]

Rheylandsche Roeden



参考文献

参考文献

略号

BKI: *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde*

TBG: *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land-, en Volkenkunde*

VKI: *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-, en Volkenkunde*

[未公刊史料]

Nationale Archief, The Hague

Archief van de VOC

no. 1200, 1259, 1264, 1272, 1283, 1290, 1295, 1302, 1313, 1314, 1321, 1322.

[公刊史料]

(1) オランダ語

Chijs, J. A. van der (ed.) (1885-1900) *Nederlandsch-Indisch Plakaatboek, 1602-1811.*

17vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Colenbrander, H. T. and Coolhaas, W. Ph. (eds.) (1919-1953) *Jan Pietersz. Coen: Bescheiden omtrent zijn Bedrijf in Indie. Uitgegeven door het Koninklijk Inst. voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie.* 7 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Coolhaas, W. Ph. (ed.) (1960-) *Generale Missiven van Gouverneurs-generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie.* 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Department van Kolonien (1887-1931) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Passerende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India.* 31 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Heeres, J. E., Stapel, F. W. (eds.) (1907-1955) *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum: Verzameling van Politieke Contracten en Verdere Verdragen door de Nederlanders in het Oosten Gesloten, van Privilegebrieven, aan hen Verleend, enz.* 6 vols. The Hague: M. Nijhoff.

Kertapradja, Ngabehi, Meinsma, J. J., Olthof, W. L., Ras, J. J. (eds.) (1987) *Babad Tanah Djawi: Javaanse Rijksroniek.* 2nd edition. Dordrecht, Providence: Foris Publications.

Valentijn, François. (2002-2004) *Oud en Nieuw Oost-Indiën.* 5 vols. Franeker: Van Wijnen.

Jonge, J. K. J. de (ed.) (1862-1888) *De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie.* 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

(2) 日本語訳

- 馬歆、小川博 訳注 (1969) 『瀛涯勝覽－鄭和西征見聞録－』、吉川弘文館  
ハウトマン、ネック、ファン、渋沢元則 訳、生田滋 注(1981)『東インドへの航海』(大航海時代叢書Ⅱ-10) 岩波書店  
村上直次郎 訳注、中村孝志 校注 (1975)『バタヴィア城日誌』1-3(東洋文庫 271) 平凡社  
ピレス、トメ、生田滋、加藤栄一、長岡新治郎 訳注、池上岑夫 訳 (1966)『東方諸国記』  
(大航海時代叢書Ⅴ) 岩波書店  
フーンズ、ファン、フリート、ファン、コイエット、フレデリク、生田滋 訳注 (1988)『オランダ東インド会社と東南アジア』(大航海時代叢書Ⅱ-11) 岩波書店

(3) 漢籍

- 黄省曾 著、謝方 校注、張燮 著、謝方 校注 (2000)『西洋朝貢典録校注、東西洋考』(中外交通史籍叢刊 5) 北京、中華書局

(4) ジャワ語

- Hadisutjipto, S. Z. (pendahuluan, alih aksara dan ringkasan oleh) (1979) *Babad Cirebon*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Proyek Penerbitan Bacaan dan Sastra Indonesia dan Daerah.

[参考文献]

(1) ヨーロッパ語文献

- Andaya, Leonard Y. (1981) *The Heritage of Arung Plakka: A Study of South Sulawesi (Celebes) in the Seventeenth Century*. VKI vol. 91. The Hague: Martinus Nijhoff.  
Blussé, L. (1988) *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*. Dordrecht: Foris Publications.  
Bondan Kanumoyoso (2011) *Beyond the City Wall: Society and Economic Development in the Ommelanden of Batavia, 1684-1740*. Department of History, Faculty of the Humanities, Leiden University.  
Brown, C. C., Roolvink, R. (ed.) (1976) *Sejarah Melayu: or Malay Annals*, Kuala Lumpur: Oxford University Press.  
Bulbeck, D. (1998) *Southeast Asian Exports since the 14th Century: Cloves, Pepper, Coffee, and Sugar*, Leiden: KITLV Press.  
Campbell, Rev. Wm. (1967) *Formosa under the Dutch*. Taipei: Ch'eng-Wen Publishing Company.  
Gaastra, F. S. (2002) *De Geschiedenis van de VOC*. 5th edition. Zutphen: Walburg Pers.  
Graaf, H. G. de (1940) "De Opkomst van Raden Troenadjaja". *Djawa*. vol. 20, pp. 56-86.  
————— (1940) "Het Kadjoran-vragstuk". *Djawa*. vol. 20, pp. 273-325.  
————— (1952) "Gevangenneming en Dood van Raden Truna-Djaja, 26 Dec. 1679 - 2 Jan. 1680". *TBG* vol. 85, pp. 273-309.  
————— (1956) *De Vijf Gezantschapsreizen van Rijklof van Goens naar het Hof van Mataram, 1618-1654*. The Hague: Martinus Nijhoff.

- (1958) *De Regering van Sultan Agung, vorst Mataram, 1613-1645, en die van Zijn Voorganger Panembahan Seda-ing-Krapjak, 1601-1613*. VKI vol. 23. The Hague: Martinus Nijhoff.
- (1961-62) *De regering van Sunan Mangku-Rat I Tegal-Wangi, Vorst van Mataram 1646-1677*. 2 vols. VKI vols. 33, 39. The Hague: Martinus Nijhoff.
- (1978) "Deregenten van Semarang ten Tijde van de V. O. C., 1682-1809", *BKI* vol. 134, nos. 2-3, pp. 296-309.
- Glamann, K. (1958) *Dutch-Asiatic Trade: 1620-1740*, Copenhagen, The Hague: Danish Science Press.
- Houben, V. J. H. (1994) "Trade and State Formation in Central Java 17th-19th century", Schutte, G. J. (ed.) *State and Trade in the Indonesian Archipelago*. Leiden: KITLV Press.
- Knaap, G. (1996) *Shallow Waters, Rising Tide: Shipping and Trade in Java around 1775*. Leiden: KITLV Press.
- Kwee Hui Kian (2006) *The Political Economy of Java's Northeast Coast c. 1740-1800 : Elite Synergy*. TANAP Monographs on the History of Asian-European Interaction vol. 3 Leiden: Brill.
- Leur, J. C. van (1955) *Indonesian Trade and Society : Essays in Asian Social and Economic History*. The Hague: Bandung, W. van Hoeve.
- Li Tana, (1998), *Nguyễn Cochinchina: Southern Vietnam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Ithaca, New York: Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Lippmann, Edmund O. von (1970) *Geschichte des Zuckers : Seit den Altesten Zeiden bis zum Beginn der Rubenzucker-fabrikation: ein Beitrag zur Kulturgeschichte*. Wiesbaden: Dr. Martin Sandig oHG.
- Meilink-Roelofs, M. A. P. (1962) *Asian Trade and European Influence : in the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Nagtegaal, L: B. Jackson(tr.) (1996) *Riding the Dutch Tiger : the Dutch East Indies Company and the Northeast Coast of Java 1680-1743*. Leiden: KITLV Press.
- Pigeaud, T. G. Th. and Graaf, H. J. de (1976) *Islamic States in Java 1500-1700 : A Summary, Bibliography and Index*. VKI vol. 70 The Hague: Martinus Nijhoff.
- Purcell, V. (1980) *The Chinese in Southeast Asia*. 2nd edition. Kua Lumpur: Oxford University Press.
- Reesse, J. J. (1908) *De Suikerhandel van Amsterdam: van het Begin der 17de Eeuw tot 1813*. Haarlem: J. L. E. I. Kleynenberg.
- Reid, A. (1988, 1993) *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. 2 vols. New Haven and London: Yale University Press.
- (ed.) (1993) *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade Power and Belief*. Ithaca and London: Cornell University Press.

- (2000) *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Ricklefs, M. C. (1974) *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi 1749-1792: A History of the Division of Java*. London Oriental series 30 London: Oxford University Press.
- (1978) *Modern Javanese Historical Tradition: A Study of an Original Kartasura Chronicle and Related Materials*. London: School of Oriental and African Studies University of London.
- (1993) *War, Culture and Economy in Java, 1677-1726 : Asian and European Imperialism in the Early Kartasura Period*. Sydney: Asian Studies Association of Australia.
- (2008) *A History of Modern Indonesia since c. 1200*. 4th edition. Stanford, California: Stanford University Press.
- Schrieke, B. (1955, 1957) *Indonesian Sociological Studies: Selected Writings of B. Schrieke*. 2 vols. The Hague and Bandung: Van Hoeve.
- Wills, J. (1974) *Pepper, Guns and Parleys: The Dutch East India Company and China 1622-1681*. Cambridge and Massachusetts: Harvard University Press.
- (1976) "De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia", M. A. P. Meilink-Roelofs (ed.) *De VOC in Azië*. Bussum: Fibula-Van Dishoeck.

(2) 日本語文献

- 青山亨 (1997) 「古代ジャワ社会における自己と他者—文学テキストの世界観」 辛島昇、高山博 編『地域のイメージ』(地域の世界史 2) pp. 94-137 山川出版社
- 荒野泰典 (1993) 「通訳論—序説」 荒野泰典、石井正敏、村井章介 編『アジアの中の日本史Ⅴ自意識と相互理解』 pp. 243-263 東京大学出版会
- ダニエルス, クリスチャン (1984) 「清代台湾南部における製糖業の構造—とくに一八六〇年以前を中心として」 『台湾近現代史研究』 第5号
- (2001) 「十七、八世紀東・東南アジア域内貿易と生産技術移転—製糖技術を例として」 浜下武志, 川勝平太(編)『新版 アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』 pp. 69-102 藤原書店
- 林田芳雄 (2003) 『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実記』(汲古選書 37) 汲古書院
- 弘末雅士 (1999) 「交易の時代と近世国家の成立」 池端雪浦(編)『東南アジア史Ⅱ島嶼部』(世界各国史 6) pp. 82-137 山川出版社
- (1999) 「東南アジアの港市国家と後背地」 佐藤次高、岸本美緒 編『市場の地域史』(地域の世界史 9) pp. 92-126 山川出版社
- (2004) 『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序—』(世界歴史選書) 岩波書店
- 岸本美緒 (1998) 「東アジア・東南アジア伝統世界の形成」 横山紘一、川北稔、岸本美緒、斎藤修、杉山正明、鶴間和幸、福井憲彦、古田元夫、木村凌二、山内正之 編『岩波講座世界歴史 13—東アジア・東南アジア伝統世界の形成—16-18世紀』 岩波書店

- リップマン, エドムント フォン 米浪信男抄訳(1980-1985)「砂糖の歴史、古代から甜菜糖製造の始まりまでの一文化史への一寄与」『旭川大学紀要』第11-20号
- 永積昭 (2000) 『オランダ東インド会社』(講談社学術文庫) 講談社
- 永積洋子 (1999) 「東西交易の中継地台湾の盛衰」佐藤次高、岸本美緒編『市場の地域史』(地域の世界史9) pp. 326-366 山川出版社
- 長岡新治郎 (1953) 「東部ジャワの海岸都市革兒昔 (Grissie) と饒洞 (Jortan) の盛衰と和蘭東印度会社」『東方学』第6号
- (1960) 「17, 8世紀バタビア糖業と華僑」『南方史研究』第2号
- 大木昌 (2006) 『稲作の社会史—十九世紀ジャワ農民の稲作と生活史』勉誠出版
- 嶋村雅三郎 (1981) 『サトウキビ—その栽培から利用まで—』、社団法人 国際農林業協力協会
- 清水宏祐 (2002) 「イラン世界の変容」永田雄三編『西アジア史Ⅱ』(新版世界各国史9) 山川出版社
- 鈴木恒之 (1999) 「近世国家の展開」池端雪浦編『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』(世界各国史6) pp. 138-181 山川出版社
- (1998) 「東南アジアの港市国家」横山紘一、川北稔、岸本美緒、斎藤修、杉山正明、鶴間和幸、福井憲彦、古田元夫、木村凌二、山内正之 編『岩波講座世界歴史 13—東アジア・東南アジア伝統世界の形成—16-18世紀』 岩波書店
- 上田信 (2005) 『海と帝国—明清時代—』(中国の歴史9) 講談社
- 八百啓介 (1998) 『近世オランダ貿易と鎖国』吉川弘文館

本稿は、2008年度立教大学学術推進特別重点基金（立教SFR）の助成で収集した史料を利用して作成しました。